

平成27年度

第21回日教弘教育賞

教育研究集録

研究主題

学校の実態を踏まえ

明日の教育を考える



第 21 回日教弘教育賞教育研究集録 発行に当たって

公益財団法人 日本教育公務員弘済会
理事長 諏訪部 善 則

平成 24 (2012) 年 4 月、当会は内閣府より公益財団法人の認定を受け、新たな歩みを始めて 4 年目、間もなく 5 年目を迎えようとしています。公益財団法人の使命は、新しい公共の創造をコンセプトとした「民による公益の増進」に寄与し、社会貢献を図ることです。当会は、その使命を果たすべく、奨学事業、教育研究助成事業、教育文化事業など教育振興事業の更なる充実と発展を図り、広く教育界に寄与・貢献する活動を行っています。

教育研究助成事業の一環として平成 7 年度に制定した「日教弘教育賞」は本年度で 21 回を迎えました。制定の趣旨は、「教育に燃え、子どもたちの未来のためにひたすら努力されている教職員の教育実践と研究意欲に対する奨励」を意図したものです。併せて「優れた研究論文を集録して全国の学校に紹介すること」は、21 世紀に生きる子どもたちの教育に大きく貢献するものと考えています。

研究主題については、「学校の実態を踏まえ、明日の教育を考える」という立場から、応募者が具体的な研究主題を決めて論文をまとめることとしています。

本年度も都道府県支部へ全国から多数の論文を応募いただきました。ご応募いただいた論文は、質、量ともに充実したものが多く、かかわられた教職員の皆様の旺盛な研究意欲に心より敬意と感謝を申し上げます。

その中から各支部推薦の教育論文（学校部門 74 編、個人部門 56 編の 130 編）を慎重に審査し、別掲の結果となりました。

審査にあられた皆様とそれまでお力添えをいただいた関係者の皆様に心から敬意を表し、そのご協力に感謝申し上げます。

本研究集録は、変化の激しいこれからの社会を子どもたちがたくましく生き抜いていくために、学校、家庭、地域が連携・協力した教育実践集となっています。

本研究集録が各学校等での研修・実践に広く活用され、今後の教育の着実な発展に寄与できれば幸甚であります。



よりよい社会と幸福な人生を創り出す

審査委員

文部科学省初等中等教育局主任視学官

清原 洋一

このたび、栄えある賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

現在、中央教育審議会において、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」（平成24年11月）の諮問に対する議論を進めていただいております。昨年8月には、教育課程企画特別部会におきまして、次期学習指導要領の土台となり骨格となる「論点整理」をおまとめいただきました。この「論点整理」は、次期学習指導要領が約10年間実施された頃、つまり、2030年の社会と、そして更にその先の豊かな未来を築くために、教育課程を通じて初等中等教育が果たすべき役割を示すことを意図しています。グローバル化は我々の社会に多様性をもたらし、また、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的にも変化させつつあります。こうした社会的変化の影響が、身近な生活も含め社会のあらゆる領域に及んでいる中で、教育の在り方も新たな事態に直面していることは明らかです。そこで学校を、変化する社会の中に位置付け、教育課程全体を体系化することによって、学校段階間、教科等間の相互連携を促し、さらに初等中等教育の総体的な姿を描くことを目指そうとするものです。

特に、諮問の中で取り上げられた課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）については、①習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。②他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。③子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。これらの視点に立って学び全体を改善していくことが示されています。このことは、子供の学びへの積極的関与と深い理解を促すような指導や学習環境を設定することにより、子供たちが主体的・協働的な学びを経験しながら、自信を育み必要な資質・能力を身に付けていくことができるようにすることを意味しています。

今回、最終審査の対象となった論文においては、現在求められている指導改善の取り組みや、教育課題を的確に捉え改善や充実に取り組んでいる実践的な研究でした。子供の学習への興味・関心を高め主体的な学びを引き出す取り組み、自ら課題を見だし追究し子供同士の関わり合いの中で考えを深める取り組み、自己肯定感や自尊感情の向上を目指し豊かな心や行動力を育成する取り組みなど、それぞれに子供の状況や社会的状況を捉え、地域や学校の特色を活かしながら実践し研究を深めていました。また、教師の世代交代が進みつつある状況にあることもあり、ベテラン教師と若手教師が共に刺激し合いながら指導力向上を図る取り組みが多くみられました。いずれの論文も熱意や努力が伝わるものばかりでした。ただし、審査の評価については、特色ある実践ということに加え、現状分析等を踏まえ明確な課題設定になっているか。先行研究を踏まえ工夫や改善点が明確になっているか。実践の成果が根拠となる資料に対応して分析・評価されているかなどの視点も充分考慮し選考いたしました。よりよい研究とするためにも、このような視点を明確にしながら深めていただければと思います。そうした実践の積み重ねを通じて、子供たちは、よりよい社会と幸福な自らの人生を創り出していくことでしょう。

結びに、この日教弘教育賞がこれまで長きにわたり、学校教育の充実・発展に寄与してこられましたことに対し、主催者をはじめ関係の皆様へ深く敬意を表しますとともに、本事業のますますの御発展を祈念いたします。



「日教弘教育賞」第一次審査を終えて

第一次審査委員長 佐賀支部 支部長
上 芝 正 子

今回の「日教弘教育賞」を受賞された皆様、誠におめでとうございます。

日教弘教育実践論文は、各学校を取り巻く様々な現状の中で、教職員が子どもたちと奮闘されている様子が生き生きと描かれています。今回審査を進める中で、各学校の実態、抱える課題があり、保護者や地域と共に日々大変なご努力をされている事に感動しました。この取り組みは、児童生徒の皆さんの日頃の努力によって得られた達成感が次の意欲を湧き立たせ、学校現場だけでなく地域の方々をも巻き込みながら、自慢の学校をみんなで創る原動力となっていることが分かりました。そして、どの教育研究もユニークな子どもたちの活動があり、わくわく感と期待感を持って読ませていただきました。論文の応募総数は130編（学校部門74編、個人部門56編）でした。内容は授業研究が一番多く、次に地域社会との連携と共に、文化の継承・総合教育・キャリア教育など多岐にわたり、各学校現場の特性を生かした取り組みなど、読み応えのある論文ばかりでした。審査の結果、学校部門と個人部門の中から20編を第一次審査委員会として、「日教弘教育賞」審査委員会へ推薦いたしました。

第一次審査委員からの感想をいくらか紹介いたしますので、次回の参考にして頂ければ有り難いです。

- * 「現代の教育課題を適切にとらえているか」「子どもの主体的な変容、発達の姿が見られるか」「他の学校でも活用できるか」の観点で審査しましたが、素晴らしい論文が推薦されたことを嬉しく思います。
- * 過疎高齢化が進んだ地域の小規模校では、教職員と地域と子どもたちが一体となって学校を創っている事に感動しました。
- * 都市部の大きな学校では、子どもたちが厳しい生活環境の中で暮らしており、先生方も頑張っておられ、「大変だろうな」と思いました。
- * 子どもたちの姿が論文の中に出てきていますが、単なる統計の数字とか結論だけではなく、子どもの姿が生き生きと描かれている論文に好感が持てました。
- * 学校単体で研究しているよりも、地域や学校間で連携している研究に優れた実践が多かった。子どもたちの自己肯定感や自己達成感につながっていくような気がしました。
- * 主題設定も大事ですが、考察が未完で終わってしまう論文もありました。客観性や完成度を意識した研究を心がけると説得力が増すのではないかと思います。
- * 現場の大変お忙しい中で、「日教弘教育賞」に応募して頂けることに価値があると思えました。各支部から推薦された論文以外にも多くの応募があったことに感謝申し上げます。以上、報告と感想を述べ審査委員の任を終えたいと思います。

第 21 回日教弘教育賞 審査委員

(順不同－敬称略)

《審査委員》

文部科学省初等中等教育局主任視学官	清原 洋一
日本大学教授	佐藤 晴雄
ぐんま国際アカデミー中高等部校長	吉田シヅエ
日本教育新聞社 編集局長	矢吹 正徳
第一次審査委員会 委員長	上芝 正子
公益財団法人日本教育公務員弘済会専務理事	黒田 文男

《第一次審査委員》

委員長	九州ブロック	上芝 正子 (佐 賀)
委 員	北海道・東北ブロック	北島 博 (宮 城)
委 員	関東北ブロック	砂川 次郎 (群 馬)
委 員	関東南ブロック	小高 正 (千 葉)
委 員	東海・北陸ブロック	島田 芳文 (福 井)
委 員	近畿ブロック	原田 久 (京 都)
委 員	中国ブロック	宇佐見一郎 (岡 山)
委 員	四国ブロック	藤本 泰雄 (香 川)
委 員	日教弘専務理事	黒田 文男 (本 部)

《目 次》

◇あいさつ

公益財団法人 日本教育公務員弘済会 理事長 諏訪部善則	3
文部科学省初等中等教育局 主任視学官 清原 洋一	4
第一次審査委員長 佐賀支部 支部長 上芝 正子	5

◇「日教弘教育賞」受賞論文一覧..... 8

●『最優秀賞』2編

《学校部門》 福井県福井市国見中学校 校長 田行 史子	18
《個人部門》 高知県高知市立潮江小学校 教諭 坂本 興彦	22

●『優秀賞』6編

《学校部門》 秋田県立栗田養護学校 校長 小林 俊昭	26
富山県立富山高等学校 校長 木村 博明	30
滋賀県米原市立春照小学校 校長 鈴木 利己	34
京都府亀岡市立曾我部小学校 校長 俣野 弘和	38
《個人部門》 岡山県高梁市立津川小学校 校長 川上はる江	42
長崎県長崎市立畝刈小学校 教諭 井手 亜弓	46

●『優良賞』8編

《学校部門》 北海道札幌市立清田緑小学校 校長 中秋 勝広	50
福島県田村郡三春町立三春中学校 校長 佐藤 祐也	54
兵庫県豊岡市立豊岡小学校 校長 嶋 公治	58
広島県廿日市市立宮園小学校 校長 新見 忠昭	62
愛媛県今治市立乃万小学校 校長 原田 周範	66
《個人部門》 新潟県新潟市立上山中学校 教諭 堀 徹	70
福井県鯖江市立進徳小学校 教諭 高帛 明子	74
兵庫県明石市立明石小学校 校長 濱田誠二郎	78

平成 27 年度・第 21 回「日教弘教育賞」受賞論文一覧

◎学校部門

◆最優秀賞

【福井県】

課題解決が繰り上げる確かな学び

～「SNS に関する国見中学校ルールづくり」の取り組みを通して～
福井県福井市国見中学校

校長 田行 史子

◆優秀賞

【秋田県】

働く力を高める地域貢献活動の実践

～一人一人のよさを生かし、心を育てる職業教育の在り方を目指して～
秋田県立栗田養護学校

校長 小林 俊昭

【富山県】

人間関係力をもとにした確かな学力と進路意識の向上を目指して

～目的を意識づけた集団活動で個を伸ばす教育活動の取り組み～
富山県立富山高等学校

校長 木村 博明

【滋賀県】

217名の体力向上をめざして！

～体を動かす楽しさを感じる 春照小学校『ten ⑩トレ』運動～
滋賀県米原市立春照小学校

校長 鈴木 利己

【京都府】

安心安全を基盤に生きる力を育み、自律的に行動する児童の育成

～インターナショナルセーフスクール（ISS）をめざした安心安全な学校づくり～
京都府亀岡市立曾我部小学校

校長 俣野 弘和

◆優良賞

【北海道】

学校・家庭・地域で共に育む 読書教育の実践

北海道札幌市立清田緑小学校

校長 中秋 勝広

【福島県】

学年型教科教室の学習環境を生かし、主体的に学び続ける生徒の育成

～生徒一人ひとりの学習意欲が持続する授業の実践を通して～
福島県田村郡三春町立三春中学校

校長 佐藤 祐也

【兵庫県】

授業で学校を創るために

～教師の潜在的カリキュラムに着目して～
兵庫県豊岡市立豊岡小学校

校長 嶋 公治

【広島県】

自分の考えをいきいきと表現する子どもの育成

～国語科「書く」単元の指導の工夫・改善を通して～
広島県廿日市市立宮園小学校

校長 新見 忠昭

【愛媛県】

一人一人のよさを発揮し、共に科学を創造していく子どもの育成

愛媛県今治市立乃万小学校

校長 原田 周範

◆奨励賞

【北海道】

「伝えるもの 受け継ぐもの」を大切にしたキャリア教育の展開

～夢や希望をもって努力し、意欲をもって学び続ける「進路探究学習」の活動を通して～
北海道札幌市立日新小学校

校長 荒川 巖

【青森県】

伝統文化を継承し、地域活性化へ取り組む生徒の育成

～しちのへ秋まつりとトラジョサンパ～
青森県立七戸高等学校

校長 西村 俊也

【青森県】

「教えて考えさせる授業」と「探求型授業」の実践をとおし学びを生かし共に高め合う子を育成する

青森県八戸市立長者小学校

校長 嶋脇 郁夫

【岩手県】

心身に障がいを持つ生徒と共に歩む態度を育てるための指導のあり方

～総合的な学習の時間の活動・生徒会活動を通して～
岩手県宮古市立崎山中学校

校長 佐藤 和信



- 【宮城県】 花山を愛し 夢や希望に向かって 楽しく学ぶ児童の育成
～地域の「ひと」「もの」「こと（しごと）」を生かした協働教育と豊かな体験活動を通じた学校経営の一試み～
宮城県栗原市立花山小学校 校長 長谷川 研
- 【山形県】 学び合い 学力を高め合う生徒の育成
～言語活動を取り入れた指導を通して～
山形県東根市立第一中学校 校長 池田 史明
- 【山形県】 心豊かな人間性を育む世田谷・舟形児童交流学習
～明年30年目を迎える「ホームステイを基本にした児童交流学習」から学ぶ～
山形県最上郡舟形町立舟形小学校 校長 渡辺 正
- 【福島県】 自ら学び、考える力を伸ばす授業の創造
～学ぶ喜びを味わわせる 子ども主体の学び合いを通して～
福島県喜多方市立第二小学校 校長 神田 優子
- 【栃木県】 本との「新たな出会い」を求めて
～書評ゲーム「ヒブリオバトル」の実践をとおして～
栃木県宇都宮市立築瀬小学校 校長 設楽 富男
- 【群馬県】 理科学習「こん虫を育てよう」と関連させた総合的な学習「カイコについて調べよう」
～世界文化遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」の1つ「高山社跡」のお膝元の学び～
群馬県藤岡市立藤岡第一小学校 校長 新井 和良
- 【群馬県】 地域と学校を元気にする小規模校の学校運営
～郷土を誇る合い言葉「AZUMA PRIDE」を生かして～
群馬県みどり市立東中学校 校長 三ツ屋雄一
- 【埼玉県】 子供がうれしくなる授業の実践・創造を通して教員の指導力を育む
埼玉県川越市立新宿小学校 校長 平岡 健
- 【埼玉県】 『所高KIZUNA活動』の実践
～開かれた学校として 見える関係・言える関係・共に動ける関係づくりに向けて～
埼玉県立所沢高等学校 校長 関口 恭裕
- 【新潟県】 キャリア教育を中核にした学校づくり
～カリキュラム開発と教科横断的な取組を通して～
新潟県上越市立春日新田小学校 校長 大山 賢一
- 【新潟県】 「地域とともに歩む希望あふれる学校」を目指して
～地域の教育力を生かした教育活動の展開～
新潟県小千谷市立小千谷中学校 校長 菅原 誠廣
- 【長野県】 地域との連携を通して、社会において自立的に生きる力を育む
～「多様な他者と関わり合う」職場体験学習とクラブ活動～
長野県上田市立北小学校 校長 小岩井 彰
- 【長野県】 「観光立国 王滝」への取り組み 長野県木曾郡王滝村立王滝中学校 校長 相渡 弘
- 【茨城県】 筋道を立てて考え、表現する力を育てる算数科学習指導の在り方
～問題解決における数学的な表現を用いた話し合い活動の充実を通して～
茨城県神栖市立横瀬小学校 校長 箕輪 一廣
- 【茨城県】 一人一人の願いや思いを大事にした学校づくりをめざして
～生徒指導の意義を踏まえた教育活動の改善を通して～
茨城県日立市立滑川中学校 校長 大友 正徳
- 【東京都】 自らすすんで学ぶ生徒の育成
～生徒の興味・関心を喚起する学習課題の工夫～
東京都小平市立小平第二中学校 校長 星野 実



【神奈川県】	意欲を持って課題に取り組み、主体的に考えようとする子を育てる ～算数科の指導を通して～	神奈川県横須賀市立鷹取小学校	校長 横田 良
【神奈川県】	学力向上に向けた授業力向上への取組 ～生徒指導の根幹は授業にあり 授業が変われば学校が変わる～	神奈川県横浜市立飯島中学校	校長 和久井清司
【千葉県】	グローバル時代に生きる日本人としてのあり方を目指して ～総合的な学習における3年間を見通した日本文化探究学習について～	千葉県流山市立東深井中学校	校長 岩本 守
【静岡県】	「げんき えがお 心豊かな とよおかの子」の育成 ～地域と共にあるこども園をめざして～	静岡県磐田市立豊岡こども園	校長 飯田 幸子
【富山県】	教員の意欲と資質を高める学校経営を目指して ～授業改善・資質向上・学校スリム化の三位一体の経営改善～	富山県中新川郡上市町立上市中央小学校	校長 野村 明男
【石川県】	主体的に考え表現する生徒の育成 ～見通しと振り返りを効果的に取り入れた学習スタイルの実践～	石川県七尾市立朝日中学校	校長 井田 正輝
【石川県】	意欲的に学び、考え、自信をもって表現できる生徒の育成 ～自己肯定感を感じることでできる体験を通して～	石川県珠洲市立緑丘中学校	校長 吉木 充弘
【福井県】	教師が「気付く」、子どもが「わかる」授業研究システム ～「授業の山場とふりかえり」と「協同」による算数の授業づくりを通して～	福井県鯖江市惜陰小学校	校長 林 哲治
【岐阜県】	豊かに切り拓く子をめざして ～「活用する力」を育む授業の創造～	岐阜県岐阜市立柳津小学校	校長 近藤 義博
【岐阜県】	持続可能な地域の発展に貢献する普通科高校の在り方 ～「Global Welfare（地域・国際社会の中でよく生きる）」を目指して～	岐阜県立池田高等学校	校長 野畑 伸芳
【愛知県】	主体的・協働的に、能動的に学ぶ力の育成 ～アクティブな学びの場づくりを通して～	愛知県名古屋市立八王子中学校	校長 上井 靖
【愛知県】	地域貢献活動を通じたキャリア発達を促す教育の実践 ～ゆるキャラ「東海市まちづくり応援大使」を活用して～	愛知県立東海商業高等学校	校長 石濱 登
【三重県】	関わり合い、高め合える仲間づくりを目指して ～自尊感情を高める取り組み 道徳・特別活動を通して～	三重県桑名市立城南小学校	校長 小島 琢也
【三重県】	夢や志を育てるキャリア教育 ～志授業、職業のプロに聞く、高校体験授業、重役会議～	三重県四日市市立内部中学校	校長 佐藤 正倫
【滋賀県】	保幼小中12カ年を見通した稲枝教育の推進 ～確かな学びと豊かな心をはぐくむ稲枝教育の推進～	滋賀県彦根市立稲枝中学校	校長 菅井 孝明



【京都府】	わが町ふるさとへの思いを深める生活科・総合的な学習の創造 ～つなぐ・つなげる・つながる教育をめざして～ 京都府京都市立翔鸞小学校	校長 安藤 裕子
【大阪府】	言語力を養い、進んで表現する児童の育成 ～学び合い、高め合う学習を重視した国語科（3年間の授業実践）を通して～ 大阪府大阪市立晴明丘南小学校	校長 石丸 真平
【和歌山県】	ふるさとの学びを生かし、自学・自治を目指す教育の推進 ～地域の伝統文化芸能を受け継ぐ あやめ踊り継承の取組～ 和歌山県日高郡日高川町立中津中学校	校長 和佐 公生
【和歌山県】	新興住宅地における実践型コミュニティスクールの試み ～学校づくりに ESD の視点を取り入れる～ 和歌山県橋本市立あやの台小学校	校長 佐藤 昌吾
【鳥取県】	自らの学びを実感する学習の創造 ～体育科を中心として、主体的に学び合う子どもをめざして～ 鳥取県八頭郡八頭町立八東小学校	校長 安住 順一
【鳥取県】	集団とのかかわりを通して、自ら考える生徒を育てる ～河北中学校の1年間を通して、めざす授業の形『河北の学び』をつくる～ 鳥取県倉吉市立河北中学校	校長 八田 学
【岡山県】	学び合いや関わりを大切にした学力向上への取組 ～学び合いと家庭・地域との連携で学力と自己肯定感をはぐくむ～ 岡山県津山市立中正小学校	校長 内田香代子
【島根県】	自分の考えを豊かに表現し、互いに高め合う子どもの育成 ～科学的な思考力・表現力を育てる理科学習を通して～ 島根県出雲市立湖陵小学校	校長 板垣 靖
【島根県】	自分の考えや思いをもち、生き生きと表現できる子どもの育成 ～「読むこと」における学び合いを通して～ 島根県邑智郡邑南町立市木小学校	校長 中野 寿晴
【山口県】	数学的な思考力・表現力を高める授業の創造 <3年次> ～書くこと・話すことを軸に～ 山口県下松市立花岡小学校	校長 藤本 哲城
【山口県】	自ら考え、学びを楽しむ生徒を育成する授業づくりのあり方 ～思いを伝え合い、良さを認め合う関係づくりを通して～ 山口県美祢市立大嶺中学校	校長 松本 孝志
【香川県】	望ましい食習慣の形成をめざし、自ら考え実践できる子どもの育成 ～食に関する学びを通して豊かな心をはぐくむ～ 香川県三豊市立詫間小学校	校長 福岡 和信
【香川県】	生徒の可能性を拓くデザイン教育の在り方 ～3年次課題研究を集大成として～ 香川県立善通寺第一高等学校	校長 直井 信也
【徳島県】	学校間ネットワークの構築・強化による小規模校の活性化 ～分散型小中一貫教育（チェーンスクール）を活用して～ 徳島県阿南市立椿町中学校	校長 浅野 晋一
【徳島県】	教職員研修の在り方についての一考察 ～アクティブ・ラーニングの手法をめぐって～ 徳島県吉野川市立山川中学校	校長 松原 文和



【愛媛県】	共に生き共に育つ児童の育成を目指して ～特別支援学級と通常の学級との学び合いを通して～ 愛媛県新居浜市立浮島小学校	校長 森田まゆみ
【高知県】	蓄積データで教師のかかわりの共通軸を探る ～生徒の行動がプラスにかわる瞬間に何が起きているのか～ 高知県高知市立西部中学校	校長 山田 洋士
【大分県】	小学校におけるグローバル教育の推進 ～児童が主体的に英語とふれあう外国語活動「豊田モデル」～ 大分県中津市立豊田小学校	校長 林 史郎
【大分県】	主体的に学び、より深く考える子どもたちを ～自ら考え、ともに学び合う学習過程の形成～ 大分県竹田市立都野小学校	校長 畑山 誠二
【福岡県】	教科等における学び方・考え方との関係・関連を明確にして横断的・総合的な学習の充実を図る総合的な学習の時間の実践的研究 福岡県北九州市立すがお小学校	校長 毛利 伸二
【福岡県】	国語科・算数科学習において基礎的・基本的な知識及び技能が定着した子どもの育成 ～学んだことが使える学習の工夫と家庭学習の習慣化を通して～ 福岡県嘉麻市立牛隈小学校	校長 原 泰子
【宮崎県】	学ぶ意欲をもち、主体的に学習に取り組む島野浦っ子の育成 ～授業改善と9年間を見通した小中連携の取組を通して～ 宮崎県延岡市立島野浦中学校	校長 押領司 誠
【宮崎県】	地元の子どもは地元で育てる・それでも妻高に行きたい、という学校を目指して ～「聖陵セミナー」や様々な中高の連携を通して石段を積み上げる～ 宮崎県立妻高等学校	校長 飯干 賢
【熊本県】	「外国語を通じて、思いを伝え合う児童の育成」 ～外国語活動・「教科型英語」の授業実践を軸として～ 熊本県熊本市立尾ノ上小学校	校長 長尾 秀樹
【熊本県】	既習事項を活かし、主体的に学ぶ生徒の育成 ～「山鹿中学校学習モデル」の取組を通して～ 熊本県山鹿市立山鹿中学校	校長 大野 朗久
【鹿児島県】	既習事項を生かし、自ら考え仲間とともに新たな学びを創造する子どもの育成 鹿児島県奄美市立宇宿小学校	校長 恒吉 芳友
【佐賀県】	児童の自己肯定感を高めるための試み ～学校・保護者・地域 トライアングル子育てをめざして～ 佐賀県小城市立砥川小学校	校長 山口 正子
【長崎県】	地域のよさを学びにつなげて主体的に学び合う児童の育成 ～学校全体で取り組む教材開発と「学び合い」の授業づくり～ 長崎県佐世保市立柚木小学校	校長 溝上 敦子
【沖縄県】	校長の経営ビジョンに基づく学力向上推進の取組 ～全校体制でベクトルを一つに取り組む学力向上推進プロジェクト～ 沖縄県宮古島市立佐良浜小学校	校長 砂川 茂和

◎個人部門

◆最優秀賞

【高知県】

主体的に学ぶ子どもを育む意図的しかけと学びの場

～メダカの卵観察と『顕微鏡免許証』の取得を通して～

高知県高知市立潮江小学校

教諭 坂本 興彦

◆優秀賞

【岡山県】

職員の意欲と授業力を高める校長の学校経営

～過小規模校での地域と連携する学校づくりの実践を通して～

岡山県高梁市立津川小学校

校長 川上はる江

【長崎県】

主体的に考えて動く子供の育成を目指して

～「逆算」を合い言葉として～

長崎県長崎市立畝刈小学校

教諭 井手 亜弓

◆優良賞

【新潟県】

いじめを生まない学級づくり

～一次支援の視点を重視した、ライフスキル教育の実践を通して～

新潟県新潟市立上山中学校

教諭 堀 徹

【福井県】

自ら学び、伸びようとする子をめざして

～ストーリー性のある学習を通して～

福井県鯖江市進徳小学校

教諭 高島 明子

【兵庫県】

「受けるより、与える方が幸い」を実践できる子どもの育成

～達成感や自己有用感を育むスモールステップとピアサポート活動～

兵庫県明石市立明石小学校

校長 濱田誠二郎

◆奨励賞

【北海道】

極小規模小学校における連携プレーを目指した体育授業の取り組み

～低・中・高の複式3学級のネット型実践より～

北海道河東郡鹿追町立上幌内小学校

教諭 高瀬 淳也

【秋田県】

“「問い」を発する高校生”の育成を目指した授業実践

～「授業アクセント10」（能動的な授業参加のしかけ）による深い数学の学びを目指して～

秋田県立秋田高等学校

教諭 岩見 進

【秋田県】

人との関わり合いを授業の中核にする授業の構築をめざして

～特に少人数校での学びを広げ、深めるために～

秋田県横手市立横手南中学校

教諭 出雲 紀行

【岩手県】

農業教育の可能性に懸けるプロジェクト研究指導

～廃棄されるホップの主蔓（づる）を有効利用させた和紙の開発と普及～

岩手県立遠野緑峰高等学校

教諭 村上 利行

【岩手県】

よりよい食生活をおくろうとする実践的な態度の育成

～6年「見直そう毎日の食事」ランチボックスにチャレンジの実践をとおして～

岩手県紫波郡矢巾町立矢巾東小学校

主幹教諭 川越 浩子

【宮城県】

ICT機器の活用とその効果の検証（宮城県米谷工業高等学校での実践）

～二次関数における授業実践例～

宮城県仙台市立仙台高等学校

教諭 菅野 大地

【宮城県】

「自助、共助、公助」を育む防災学習の取組

～第5学年総合的な学習の時間における指導の充実を通して～

宮城県塩竈市立浦戸小学校

教諭 松野 広



【山形県】	5年工業単元における新たな教材化の可能性を探る ～5年社会科「食料品工業に携わる人々」をもとに～ 国立大学法人山形大学附属小学校	教諭	西長 大
【福島県】	学び続ける素地をはぐくむ授業づくり ～「科学する共同体」への参加を通して～ 国立大学法人福島大学附属小学校	教諭	白井 孝拓
【栃木県】	自分の考えをもちながら、ペアやグループ活動で考えを伝え合い、深め合う授業 ～小学2年生・国語『お手紙』の授業実践～ 栃木県宇都宮市立陽東小学校	教諭	池田 珠実
【栃木県】	人権教育における直接的指導構想 ～「同和問題」に視点を当てた授業の創造を通して～ 栃木県日光市立猪倉小学校	教諭	竹澤 隆文
【埼玉県】	酵母を教材とする連携事業・発表会・競技会・進路指導の実践 ～農業高校での微生物・酵母の学習を通して～ 埼玉県立杉戸農業高等学校	教諭	田熊 重利
【長野県】	健康課題解決に向けた学校保健委員会のあり方 ～受診率向上を目指して～ 長野県下伊那郡阿南町立大下条小学校	養護教諭	両角 千彬
【茨城県】	定時制高校における「モラル・スキル・トレーニング」の実践に関する一考察 ～県立水戸南高等学校の事例研究を中心にして～ 茨城県立水戸南高等学校	教諭	長島 利行
【東京都】	デジタルカメラを利用した生徒ノート共有システムの開発とその評価 ～東京都立大山高等学校における数学Aの授業実践を通して～ 東京都立大山高等学校	教諭	浜口 拡輝
【東京都】	子供とともに、学び、伝え合う人権教育 東京都武蔵村山市立第一小学校	主幹教諭	村上 正昭
【神奈川県】	学校設定科目「いのちを考える」アクティブ・ラーニングの実践研究 ～生徒の未来を変える「いのちの授業」をめざして～ 神奈川県立平塚湘風高等学校	教諭 教諭	大宮美智枝 吉田しのぶ
【千葉県】	よい姿勢の習慣化を目指して 千葉県千葉市立幕張小学校	養護教諭	高宮 幸恵
【静岡県】	社会で働くための人間関係の形成を目指した高等部作業学習「静大プロジェクト」の取り組み ～静岡大学教育学部美術科・家庭科との協働～ 静岡大学教育学部附属特別支援学校	教諭	増田 萌
【静岡県】	高校生が選ぶ直木賞 ～個から共へ、共から個へ～ 静岡県立磐田南高等学校	教諭	青島 玲子
【富山県】	教員同士の学び合いを通し、互いの資質の向上を図るためのミニ校内研修の実施と効果の検討 富山県教育委員会西部教育事務所	指導主事	宮崎 靖
【石川県】	学校文化を考える ～教職員の実践力を高めるための提言～ 石川県金沢市立田上小学校	教諭	松田 聡



【三重県】	思いや考えを伝え合う子どもの育成 ～話し合い活動の時間を保障する取り組みの一考察～ 三重県伊勢市立明倫小学校	教諭	竹田	圭
【滋賀県】	地震と防災について学ぶ ～自助と共助の心を育てることをめざして～ 滋賀県近江八幡市立安土中学校	教諭	西村	裕康
【京都府】	仲間と協同的に試行錯誤する中で、科学的思考力を高める ～第3学年の理科学習の中で、「ものづくり」に重点を置いて～ 京都府京都市立西院小学校	教諭	俣野	源晃
【兵庫県】	共に学び合う子どもを育てる学級づくり ～主体的な学びと協働的な学びに着目して～ 兵庫県加西市立北条小学校	教諭	國野	大樹
【大阪府】	共生社会での就労をめざした特別支援学校のキャリア教育 ～事業所と教員の意識調査に基づいた教育～ 大阪府立泉南支援学校	校長	家門	鉄治
【大阪府】	初任者の成長過程からみる初任者指導のあり方についての一考察 ～初任者のレポート、指導教員と校長の関わりを手がかりとして～ 大阪府枚方市立平野小学校	校長	小川	温子
【奈良県】	養護教諭の職務を再考する ～小規模校において養護教諭の専門性をいかに発揮するか～ 奈良県奈良市立都祁小学校	養護教諭	北井	利枝
【奈良県】	「覚醒状態が低い児童とのコミュニケーションのあり方、深め方の考察」 奈良県立明日香養護学校	教諭	赤井	伸充
【和歌山県】	重度脳性まひ児への動作を通したやりとり学習による自立活動6区分の視点からの考察 ～動作改善の時期的関連性と学校生活のエピソードを中心に～ 和歌山県立和歌山さくら支援学校	教諭	藤澤	憲
【鳥取県】	知的好奇心を引き出し、学ぶ喜びが実感できる授業づくり ～コース別少人数指導を活かした数学的問題解決学習の実践を通して～ 鳥取県鳥取市立東中学校	教諭	神波	徹
【岡山県】	「みんなで創る生徒指導」を目指して ～「やりたい!」を引き出す「コミュニケーション日」～ 岡山県都窪郡早島町立早島小学校	教諭	藤村	洋旨
【島根県】	中学校1年生における体力向上に関する実践 ～スポーツテストを活用した授業改善の取組とその効果について～ 島根県出雲市立大社中学校	教諭	松尾	匡樹
【広島県】	事象を数理的に考察し表現する能力を高める関数指導の工夫 ～問題解決の方法を数学的に説明し伝え合う活動を通して～ 広島県東広島市立福富中学校	教諭	時永	啓史
【広島県】	タブレット型端末を使ったコミュニケーション指導 ～児童と教師の意思のやり取りを目指して～ 広島県広島市立広島特別支援学校	教諭	益田	峻佑
【山口県】	自楽（自学）を通した子ども達の基礎学力の向上の実践的研究 ～子どもの自発的な学習をめざして～ 山口県山陽小野田市立須恵小学校	教諭	西村	浩生



- 【香川県】 自ら進んで規則正しい生活習慣を身に付けるための一実践
～学校・家庭・地域をつなぐ大規模校における取り組み～
香川県高松市立太田南小学校 養護教諭 山口恵美子
- 【徳島県】 特別支援学校教職員の自立活動の専門性を高めるために
～専門性の向上をめざしたオン・ザ・ジョブトレーニング（OJT）による取り組み～
徳島県立鴨島支援学校 教諭 小谷 慎一
- 【愛媛県】 太鼓表現活動による、人と関わる楽しさ、生活空間の拡大を目指して
～知的障害特別支援学校による、即興的な太鼓表現活動の創造的取組～
愛媛県立宇和特別支援学校（知的障害部門） 教諭 水田 勲
- 【高知県】 着実に授業実践力を育成する組織的システムの研究（数学科）
～豊富な実践理論と新たな発想を融合し授業実践力の向上をめざす～
高知県四万十市教育研究所 研究員 中平 源
- 【福岡県】 家庭生活の中で成長を自覚する児童を育てる家庭科学習指導の在り方
～実践的・体験的な活動における評価活動を通して～
福岡県嘉穂郡桂川町立桂川小学校 教諭 萩尾志穂美
- 【宮崎県】 児童一人一人が互いに考えを深め合う算数科学習指導の在り方
～予習的課題を活用し、言語活動の充実を図る学習指導過程の工夫改善を通して～
宮崎県宮崎市教育委員会宮崎市教育情報研修センター 指導主事 細山田 修
- 【熊本県】 算数が「好き」「わかる」児童の育成
～日常の数学的事象を意識した、実感を伴う「習得」と「活用」の算数科授業をめざして～
熊本県球磨郡山江村立山田小学校 教諭 那須真一郎
- 【鹿児島県】 誰にでもできる荒れを生まない学級経営Ⅰ
～意図的に中間層・正義派層に役割を与え、承認する取り組みについて～
鹿児島県鹿児島市立谷山中学校 教諭 釜崎 孝一
- 【鹿児島県】 進んで体を動かす明和っ子の育成を目指して
～運動の質と量を確保する授業の創造～
鹿児島県鹿児島市立明和小学校 教諭 池田 智幸
- 【佐賀県】 わがまち仁比山の「ひと」「もの」「こと」から学ぶ学校保健活動
～地域の達人と先人の功績から学ぶ保健学習・児童保健委員会活動の統合的健康教育実践～
佐賀県神埼市立仁比山小学校 養護教諭 千々岩 峰子
- 【長崎県】 世界史Aにおけるアクティブ・ラーニング導入による学力向上の試み
～問題演習型アクティブ・ラーニングの授業実践の成果と課題～
長崎県立長崎明誠高等学校 教諭 朝長 千恵
- 【沖縄県】 地域との連携・交流を通して思考力・判断力・表現力を育む農業教育の取り組み
～地域資源を活用した加工特産品づくりによる地域活性化をめざして～
沖縄県立中部農林高等学校 教諭 屋嘉比 仁
- 【沖縄県】 みんなが輝く算数文章問題の学習
～入門期における問題づくりの実践を通して～
沖縄県那覇市立松島小学校 元教諭 當銘 久子

日教弘教育賞

最優秀賞

優秀賞

優良賞

課題解決が繰り上げる確かな学び

～「SNSに関する国見中学校ルールづくり」の取り組みを通して～

福井県福井市国見中学校

校長 田行 史子

I はじめに

本校がある国見地区は福井市の最も西に位置し、東は国見岳を仰ぎ、西は日本海に面し、越前加賀国定公園に指定されている風光明媚な海岸地帯である。市の中心部からの距離は約 30 km、郊外バスで約 50 分の地点にあり、人口 1,464 人、世帯数 450、少子化・高齢化（38%）が急速に進む小さな集落である。昔ながらの助け合いの精神が残っており、伝統行事も大切に継承されている。また、公民館を中心とした住民活動も活発に行われている。



このような豊かな自然環境と地域の人々の温かく優しい眼差しに見守られながら、本校生徒 23 名は地域の宝として、素直に健やかに育っている。

II 研究の概要

1 研究のねらい

近年のスマートフォン等の急速な普及に伴い、日に日に生活が便利になっている。一方、児童生徒が、無料通話アプリや SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）、オンラインゲーム等の利用などに関して、その長時間利用による生活習慣の乱れや不適切な利用によるいわゆる「ネット依存」や、ネット詐欺・不正請求などの「ネット被害」、SNS によるトラブルなど、情報化の進展に伴う新たな問題が生じている。

へき地小規模校と言われる本校においても、この問題に関しては様々な問題が起きており、解決すべき喫緊の課題となっている。そこで本校では、生徒が自ら考え、判断し、実践していく力を育成すること、生徒、保護者、学校が本音で話し合い、理解し合う土壤をつくることなど、これを機に何か手立てを講じていきたいと考えた。

2. 本校生徒の課題

(1) SNS に関する課題

平成 26 年 10 月、SNS の使用に関する実態調査を

行ったところ、本校生徒は長時間にわたりネットやゲームをしていること、依存度も「中程度以上」ある生徒が全体の半数以上いるなど、深刻な状況であることが明らかになった。（図 1・2）

図 1 ネット・ゲームに費やす時間

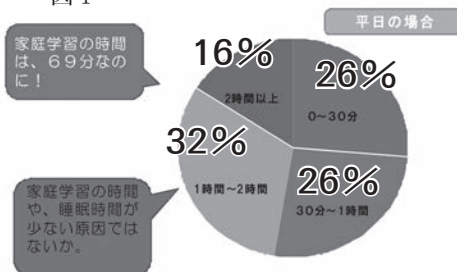
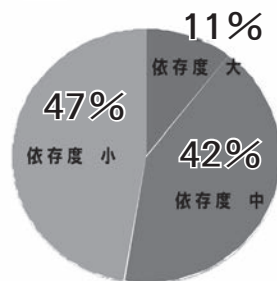


図 2 インターネット依存度



(2)健康に関する課題

当時、授業を参観して生徒の様子をみていると、一部の生徒ではあるが、毎日のように居眠りをしたり、集中力に欠いたりする生徒が数人いた。養護教諭が行った生活習慣に関する調査でも、睡眠時間が十分確保されていない生徒や就寝時刻が極めて遅い生徒がいること、そしてその主な原因がオンラインゲームや SNS の利用であることが明らかになった。

また、著しい視力の低下も気になっていた。

(3)家庭学習時間に関する課題

本校生徒は全体的に真面目であり、与えられた宿題にはほとんどの生徒が確実に取り組み提出している。しかし、家庭での学習時間は平日平均が 68 分、休日平均が 62 分であり、「家庭学習 1 日 90 分」という目標には達していなかった。そして何より、全く学習し

ないと回答する生徒が11%もいたことには驚いた。

家庭学習の行い方については、毎日のように指導していたがいっこうに改善せず、あらためてSNSとの関わりが深いことに我々教師が気づかされた。

3. 実践の経過とその課題

(1) ルールづくりのきっかけ

平成26年10月16日、視聴覚資料や様々な事案をもとにSNSの危険性についての学習会を実施した。その際、生徒会長が謝辞の中で、「被害者にも加害者にもならないために、私たちは生徒会を中心に国見中学校のルールをつくりたいと思います。」と述べたのである。生徒の自主的な取り組みはこの機を逃してはないという教師の思いも重なり、生徒会執行部が中心となってルールづくりがスタートすることとなった。

(2) ルールづくりの方向性

基本的な考え方として、教師からは次のことを生徒に伝えた。

- ① ルールは自分たちで決めること（教師が押しつけたり強制したりしない）
- ② 全校生徒でじっくり話し合うこと
- ③ 保護者や教師の考えや意見を聞く機会を持つこと
- ④ 保護者全員の理解を得たルールにすること
- ⑤ 決めたルールは全員が守ること

(3) 完成までの経過

このようにしてルールづくりが始まり、図3に示したような過程を経て完成に至った。

① 生徒の原案

全校生徒を対象にアンケート調査を実施し、生徒会執行部は図4のような原案を作成した。

図3 「SNSに関する国見中ルール」完成までの経過	
平成26年	
10月	・「情報モラル学習会」にて、SNSの危険性について生徒が学ぶ。 ・生徒対象に「SNS使用に関するアンケート」調査をする。
11月	・学校保健委員会で「No more メディア依存」について生徒・保護者・教師が学習する。 ・生徒会が「国見中ルール」原案を作成する。
12月	・保護者と教員に向けて、生徒がルールの原案について意見を求める。

- ・保護者と教員の意見を公開する。
- ・保護者と教員の意見をもとに、各学年で話し合い、修正案①を作成する。
- ・保護者対象「SNSの危険性について」の学習会を開催する。
- ・臨時生徒総会にて、修正案①の妥当性を話し合い修正案②を決定する。
- ・修正案②について保護者の承認を得る。
- ・臨時生徒総会にて、「SNSに関する国見中ルール」が決定する。
- ・啓発ポスターを作成し、家庭や学校内に掲示する。

図4
国見中ルール原案
LINE やメールの利用は、10時まで
ネットやゲームの時間は、90分
学習が終わってから利用する。

② 保護者の意見

生徒の原案

に対して、保護者

全員から

回答があ

った。「自分

たちで決めた

ので尊重する

という肯定的

な意見」は

26%あ

ったが、PTA

主催でSNS

に関する学習

をした直後

というこ

ともあ

った。残り

74%か

らは様

々な意見

が寄せ

られた。(図

5)

教師が

予想して

いた以上

に厳しい

図5 保護者の意見（一例）

決めごとをすることはとてもいいことだと思います。しかし、一人ひとりの意識が大切なではありませんか？決めごとをしても、守る子、守らない子は当然います。自己申告なのでどうにでもなります。
今は子どもなので大人に守られています。社会人になって仕事にゲームができますか？仕事をほったらかしてゲームができますか？けじめをつけること、我慢をすることを学んで自覚してほしいです。

これに似たようなルールはどの家庭でも言われていることではないでしょうか。
でも、守れていないのが実情だと思います。このようなルールを決めたところで、どこまでみんなが守れるのでしょうか？

③教師の意見

教師も様々な意見や願いを書いた。(図6) どの教師も生徒に考えさせるような表現にしたことは、生徒が素直に受け止めようという姿勢につながった。

図6 教師の意見

普通9時以降は家に電話しないから、LINEのやり取りは9時までにはしてはどうか。

LINEでのやりとりより、学校で友達と話すことを大切にしたい。

ネットやゲームが90分は長い。

テスト1週間前は、さらに厳しいルールを作りたい。

ネットやゲームを保護者のいるところ(居間)でするのはどうか。

睡眠時間を6~7時間とって欲しい。

④生徒会の試行錯誤

保護者や教師の意見を受け、生徒は各学年で何度も協議し、生徒会が修正案を決めた。これをもとに臨時生徒会総会を開き、全員で話し合いたいと申し出てきた。当日は保護者や新聞社などのマスコミにも公開することとなった。



保健委員会による問題点（SNS使用時間・睡眠時間・ネット依存度の現状）の再確認



グループで協議
 ・これで親を説得できるかなあ
 ・僕たちの本音は？



温かく見守る保護者

どの班も主体的に意見を出し合い、生徒会執行部が提示した修正案の妥当性について協議した。最終的には図7のように、生徒にとっては原案よりかなり譲歩したルールとなったが、生徒は自分たちで決めたという充実感を味わっていた。

「SNSに関する国見中ルール」

- ・LINEなどのSNSでのやりとりは、**21時まで**。
(21時を過ぎたら、送れません。返信しません。)
- ・ゲームやインターネットの利用は、
平日**60分**まで。テスト期間は使いません。
- ・遊びの時間は、**学習90分**が終わってからにします。
23時頃には寝ます。

図7

4. 結果と考察

(1)生徒の課題解決力の向上

生徒は独善的にルールを決定することなく、保護者や教師といったコミュニティの中で実践、省察するといった過程を通して決定に至った。この完成までの過程に身を置くことこそが、生徒の力量形成という点で、非常に意義深かったように思う。

ルールづくりを任せられるということは、そのルールに妥当性があること、生徒が共通理解に至っていること、そして何よりも決定したことを実践していく責任がついてくるということである。この経験こそが「生きる力」や「大人力」につながっていくものと考えられる。

平成27年3月に実施した調査結果(図8)を見て明らかのように、おおむねルールを守っている生徒が93%である。生徒同志でルールを守る雰囲気もできつつあることも生徒の感想からも伺える。

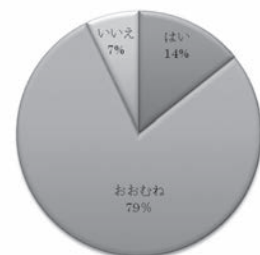


図8 自分たちでつくったルールを守っている

★9時過ぎに気づかず送ってしまう場合があるが、互いに「もうやめよう」という会話ができた。土日になると、ついつい60分以上使用してしまう。宿題が終わる前にちょこちょこ必ずやってしまう。最近は無いです。★LINEを送った後、気づくことが多かった。来てでも送らないことは守れた。親に携帯を渡すことはできなかった。

(2)家庭学習時間の増加

同じく平成27年3月に実施した調査結果である。(図9) 家庭学習を90分以上すると肯定的に回答した生徒が93%という結果を得た。

家庭学習時間の確保については、それまで

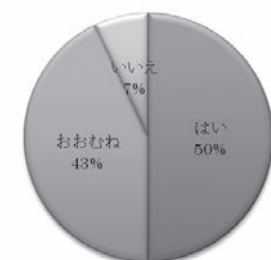


図9 家庭時間（最低90分）は確保している

教師が四苦八苦しながら指導してきたことであるが、なかなか効果が出なかった。強い説諭により、生徒との人間関係構築に苦慮したこともある。

今回のように別の視点から本題にアプローチすることは非常に効果があることも再確認できた。

(3)親子でのコミュニケーションの充実

ルールを決める過程において、生徒から保護者あてに現状報告やアンケート調査の依頼などが出されている。生徒会が全保護者からの回答を得ることとしているため、日ごろなかなかコミュニケーションを図ることのできない家庭でも、親子で会話をしなくてはいけない。ルールが決定した後も、保護者が我が子を褒めたり注意したりということがしやすくなったという保護者の声もたくさんあった。

★過度というほどにLINEやゲームなどはしていないのですが、動画を見出すと、どうしても長くみてしまう傾向ですね。きちんとルールができているので、友達同士で遅くまでやり取りをしているということはありませんでした。長く使ってしまったという意識が出るというのは、いいことだと思います。自分で、テスト期間は触らないように、私に「かくしておいて」という自分ルールも作っていて、それは大変いいことだと思います。

(4)教師の指導力向上

今回のような生徒が問題解決を目指す取り組みへの教員の様々な関わりはいくつかの効果をもたらした。①各教員が参画し、生徒の実践を振り返り、次の手立てを練り上げるというプロセスが、生徒指導や教科指導といった分野に転移する、②生徒は家庭と学校の連携の中で育つという、生徒の生活全体を視野に入れるという指導概念が獲得されていった、③目に見えて変容していく生徒を目の当たりにし、自信と見通しが持て、意欲が増した、④保護者から直接感謝の言葉もらうなど、保護者と教師の距離が縮まった、⑤新聞やテレビ等のマスコミに報道されるたびに、教師の自己肯定感や意欲も高まった、などのことがあげられる。

5 今後の課題

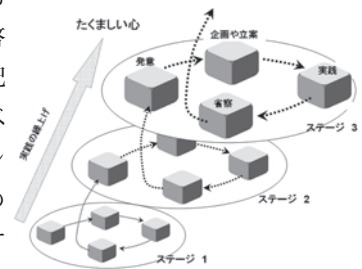
平成27年3月の調査ではルールを守っていないと回答している生徒が7%いる。当初インターネット依存度が大きいと診断された11%の生徒と重なると思われる。保護者と連携しながら改善していかなければならない。

また、ルールが実態に合わなくなった場合にも、生徒自身の手によって改善していくような柔軟な対応が必要である。これこそが、ルールを守るという実践を継続していく上で重要であると思う。

III おわりに

現在、本校では「生徒自身に課題を解決する力をつけていくべき」との考えから、ここ数年、総合的な学習の時間において国見地区のまちづくりに取り組んでいる。地区の活性化に向けた具体策を生徒自身が企画立案し、自治会や公民館に提案している。途中に起こる問題は地域の人に相談しながら解決し、完成の活動(形)に仕上げていく。今年は、防災訓練への参加を啓発するポスター配布、まちおこしイベントでのフォトコンテストや大声大会の開催、国見をPRするゆるキャラの着ぐるみ作成、国見PR動画制作など、大人顔負けの成果をあげ、地域住民からも温かい拍手をもらったり、賞賛やねぎらいの言葉をかけてもらったりした。これも、生徒自ら企画立案し、自ら実践していく過程のステージが練り上がることによって、楽しさや面白さ、重要性を実感し、たくましい心が育っているに違いない。

今回のルールづくりやまちづくりでの体験をもとに、生徒には未来に向かって、今後もたくましく前進してほしいと願っている。



主体的に学ぶ子どもを育む意図的しかけと学びの場

～メダカの卵観察と『顕微鏡免許証』の取得を通して～

高知県高知市立潮江小学校

教諭 坂本 興彦

1 はじめに

「凄い！凄すぎる！」

初めてメダカの卵を顕微鏡で観察したときの感動は衝撃的だった。それ以来、「この生命の神秘を覗く感動を味わわせたい」と強く願って実践を重ねてきた。

近年、子どもの理科離れが憂慮されている。この現状の改善には、学習指導要領の理科の目標が示す「自然に親しみ」、「自然を愛する心情を育て」、「実感を伴った理解を図る」ことが重要であり、子どもを引きつける魅力ある教材の開発が不可欠である。この観点からも5年のメダカの卵や顕微鏡は優れた教材と考え、その提示方法を工夫し意図的にしかけを施すことで、学ぶ意欲をより一層引き出そうと試みた。

2 主題設定の理由（実践のねらい）

(1) 学力の二極化の解消を目指す

学力の二極化が大きな問題となっている。ひとり親家庭の増加や貧困率の上昇などによる家庭の教育力低下は、本校でも大きな課題として認識されている。子ども一人ひとりの進路保障と自己実現、それによって次世代への負のスパイラルを断つことこそ、教育の大きな使命である。この学力の二極化解消を目指す授業改善に全校を挙げて取り組んでおり、全ての子どもに学力をつけることは、私の中心課題でもある。

(2) 意欲を引き出し、主体的に学ぶ子どもを育む

少し先の未来を見通すのも困難な時代において、想定外の事態や課題を自らの力で乗り越えていくために必須なのが主体的に学ぶ態度である。この態度の形成には、学ぶ意欲を引き出すことや成功体験が欠かせない。だからこそ『顕微鏡免許証』で成功体験を演出したいと考えた。少し高いハードルである試験に挑戦し、努力して乗り越えた成功体験を、生涯にわたって主体的に学ぶ正のスパイラルへの基盤としたい。

(3) 教え合い学び合いで知識・技能の定着を図る

顕微鏡の操作技能の習得は、メダカの卵を正しく観察するために必須であり、主体的学びにも不可欠である。そこで、顕微鏡操作に必要な知識・技能の定着を図り、

より主体的に学ぶ集団へと高まることを目指して、児童相互に教え合い学び合う『顕微鏡免許証』システム【意図的しかけ】を提示し、卵パックとプレパラート【学びの場】を整えることとした。

3 仮説

意欲を引き出すための【意図的しかけ】を施し、【学びの場】を整えれば、基礎的な知識・技能の定着率が高まり、主体的に学ぶ子どもが育つであろう。

4 1年目の実践と検証・考察

(1) 『顕微鏡免許証』システム【意図的しかけ】

理科専科初年度、まず考慮したことは児童の実態だった。実験・観察は楽しく意図的に行うが、結果をじっくり考察することや、粘り強く学習することが苦手な児童が多くいた。顕微鏡は覚えるべきパーツが多くあり、操作手順もおおよそ5段階と複雑なため、その習得には意欲と粘り強さが必要だと考えた。そこで単元当初に、免許証取得までの見通しを明確にし、ゴール（免許証を取った自分）をイメージさせ、意図的に学習できるように『顕微鏡免許証』システムを提示した。そして、授業で顕微鏡のパーツの名称や操作手順の学習を1時間行った後、希望者は休み時間に理科室に来て試験を受けられることとした。以下その概要。

- ・顕微鏡のパーツの名称を問う【**学科試験A**】と操作手順を問う【**学科試験B**】、**実技**をクリアした児童に『顕微鏡免許証』を発行する。（複数回チャレンジ可）
 - ・アドバイスした仲間1人が合格したら『顕微鏡コーチ』、3人が合格したら『顕微鏡マスター』に認定する。（教え合い学び合いの活発化がねらい）
 - ・**特典**①高性能LED顕微鏡がいつでも自由に使用可
②卵パック、プレパラートも自由に使用可（後述）
③かっこいい！（免許証は胸の名札に入るサイズ）
- ※本実践は、初任者研修で「理科経営」を学んだ折、先輩教員が語られた“顕微鏡免許”に着想を得ている。

「世界にたった1枚のあなただけの顕微鏡免許証」これが児童を引きつける謳い文句である。更に免許証

の特典として、いつでも自由に卵を含めた好きな物を観察できることとした。これにより「○○を観察したい。」だから「免許証を取りたい。」のように思いが結びつき、より学習意欲が高まると考えたのである。

コーチとマスターには、児童相互の教え合い学び合いを促すねらいがある。操作技能の習得に苦勞する児童は、既に免許証を取得した者から操作技能の要点を個別に学べる。一方の免許証取得者は、この要点を意識して教えることで自らもより深く学べる。

このような意図的しかけで、個々の学びに意味や連続性となりが生まれ、児童により一層主体的な学習態度が育まれる。その結果として、知識・技能の確実な習得にも結びつくのではないかと考えた。

主体的に学ぶ子どもを育むことがねらいなので、強制や個別の勧誘は一切行わなかったが、試験開始初日に数名が免許証を手に入れた。合格者が出てよりゴールイメージは明確になった。特典がピンと来ていなかった児童にも、授業中に合格者が高性能 LED 顕微鏡を使うことで、より鮮明に卵の観察ができることの素晴らしさが伝わって受験者が増えていった。

(2) 卵パックとプレパラート【学びの場】

児童に主体的な学習態度を育むために、休み時間などに来て自由に観察ができるように小さなパックに卵を入れて置き（卵パック）、学びの場づくりをした。コンセプトは、「いつでも覗ける。自分で学べる。ルールが明快。」以下その概要。

- 産卵日別に卵パックをビーカーに入れ、〇日目という札で明示する。…すぐ分かる。すぐ手に取れる。
- 微生物のプレパラートは定位置の箱を準備。
- 道具や教材のありかと片づけ方を明示する。



《スライドガラス》
《顕微鏡》
《スポイト》
《テスト問題》
など。

(3) 検証・考察

約4週間の試験期間で、76名中36名が合格し取得率47.4%だった。休み時間だけの試験で半数近い児童が免許証を手にしたのは、合格の特典と基準があり、意欲と見通しを持って学習できたからだろう。免許証を手にした児童の表情には達成感が表れていて、主体的な学習態度を育むことにつながった。また、半年後に実施した「高知県学力定着状況調査」①(1)顕微鏡操作の手順を選択する問題の正答状況を分析すると、免許

証の有の正答率63.9%、免許証無30.0%で、知識・技能の定着に効果があることが実証できた。これは県平均29.6%に対する優位からも明らかであった【表1】。

【表1】 H25 高知県学力定着状況調査 正答率比較

①(1)正答率	県平均	潮江小	県平均との差
全体	29.6%	46.1%	+ 16.5%
免許証有		63.9% (23/36名)	+ 34.3%
免許証無		30.0% (12/40名)	+ 0.4%

しかし、試験を受けること自体のハードルが高く、自力でのチャレンジが難しい学力に課題のある児童の取得率は低かった。これを事前に想定して作ったコーチとマスターの制度は十分に機能せず、全ての児童を巻き込んだ教え合い学び合いにまでは至らなかった。その結果、学力の十分な底上げはできなかった。

卵パックは観察に大いに役立った。同じ3日目の卵どうしを見比べて異同を見つけたり、3日目と7日目の成長の違いについて実感を伴って理解したりできた。教師が投げかけなくても、「じゃあ間の5日目はどうなっているの？」と自ら問題解決を行ったり、同じ卵が翌日どう変化しているかを確かめに来たりするなど、主体的に学ぶ子どもを育むことにつながった。

5 2年目の実践と検証・考察

(1) 教え合い学び合いを目指して

この年の児童は意欲的に実験・観察を行い、発言も活発だったが、学習意欲の継続が難しい児童が前年より多かった。また、学力に課題のある児童も多くいたため、前年の反省から、ある程度の免許証取得者がいる状況で、授業時間内に顕微鏡操作技能の教え合い学び合いを設定した。授業で関わる場を作ることで、学力に課題のある児童を押し上げ、休み時間での教え合い学び合いにもつなげたいと考えたからであった。

(2) 検証・考察

約4週間の試験期間で、67名中43名が合格し取得率64.2%と向上した。授業中に関わる場を設定した効果だろう。また、半年後の「高知県学力定着状況調査」①(1)顕微鏡操作に関する問題「解剖顕微鏡を使うとき、真横から見ながらレンズを観察するものに近づける理由は？」の正答状況分析によれば、免許証有の正答率79.1%、免許証無50.0%で、やはり知識・技能の定着への効果は実証できた。しかし、県平均58.5%に対する免許証無の-8.5%が課題となった【表2】。

【表 2】 H26 高知県学力定着状況調査 正答率比較

□(1)正答率	県平均	潮江小	県平均との差
全体	58.5%	73.8%	+ 15.3%
免許証有		79.1% (34/43名)	+ 20.6%
免許証無		50.0% (12/24名)	- 8.5%

この年も残念ながら、休み時間の活発な教え合い学び合いにまでは結びつかなかったこと、免許証有で誤答だった9名のうち6名が授業中に取得した児童だったことから、知識・技能の確実な定着には、(授業時間外でも取り組むぐらいの)一定以上の意欲的な学習態度が必要なのではないかと考えた。

6 3年目の実践と検証・考察

(1) 教え合い学び合いの実現を目指して

前年までの実践をふり返って、教え合い学び合いがうまく機能しないのは、学力に課題のある児童に働きかける動機づけが弱いからだと考えた。コーチとマスターは、免許証を取るだけでも難しいのに…と感じる児童への動機づけにはならない。今年の児童は、発言が少なく積極性に欠ける印象で、仲間で学び合うことも苦手な様子だった。そこで、学力に課題のある児童へも強く動機づけて、学ぶ側からの「教えて」を引き出し、主体的な学びにつなげたいと特典④を加えた。

④免許証を取得した児童のうち、希望者はメダカの卵をもらい、孵化させて飼育できる。(マイ卵)

(2) マイ卵の効果

マイ卵への反応は最初の全体説明の時から上々だったが、真価を發揮したのは、実際にもらった児童が教室へ持ち込んだ時からだった。マイ卵が児童の関わりを生み出し、稚魚が孵化し始めると、それは更に活発になった。孵化した稚魚は、卵パックからペットボトルで作った簡易水槽へ移さなければならない。簡易水槽を用意する手順は、模造紙に書いて貼り出し、最初の数名だけ手助けをした後は、児童の教え合い学び合いに任せた。稚魚

の移し方も同様にした。その結果、知識・技能の共有が進み、「孵化した稚魚のえさはどうするの?」「は



らの養分で育つから、最初はえさはいらないよ。」などと仲間と確認し、実感を伴って理解できた。また、普段理科室へ来ない児童も、教室でマイ卵を楽しそう

に眺めながら共感し合う仲間の姿に刺激を受けた。この仲間からの刺激と、稚魚の孵化による卵への興味関心の高まりが、免許証取得への意欲につながった。休み時間の理科室では、主体的に学ぶ姿が多く見られた。その証拠に、6/1の5名を皮切りに6/26までほぼ毎日途切れることなく合格者が出た。

(3) 掲示の効果

今年は1週間ごとに、学級別の免許証取得者数とコーチとマスターの人数を、理科室の入り口に掲示した。掲示に気付いた当初は隣のクラスと比較していたが、取得者数が20人を超えた辺りから、「あと〇人で

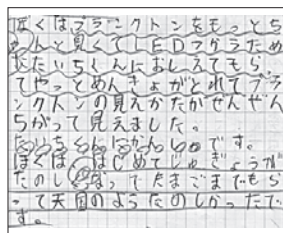


全員合格」などと言い出した。学級では「教えて」「〇〇君には僕が教える」「みんなが合格したら凄いね」といった会話が自然と出てくるようになったそうだ。その結果、ある学級は試験

終了2日前に、全員が免許証を取得できた。

(4) 検証・考察

例年通り約4週間の試験期間で、65名中59名が合格し取得率90.8%と、休み時間のみで実施した結果としては驚異的であった。マイ卵が契機となり活発化した教え合い学び合いにより、知識・技能や顕微鏡で覗く世界の共有が促進された。その過程で、仲間への共感や協力が広がりを見せた。1学期をふり返るとどの児童の感想にも、メダカの学習とともに、仲間との関わりについての記述が見られた。分からないことが聞ける安心感と、できた喜びや達成感を味わった児童は、ごく自然に感謝を表現している。

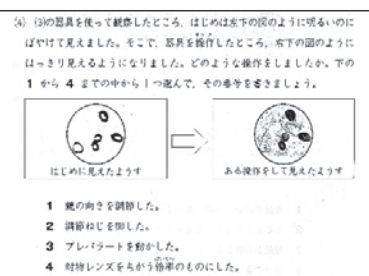


教え合い学び合いの活発化には、学級担任とのつながりも不可欠であった。学級担任には『顕微鏡免許証』システムの意図は簡単に説明していたので、教え合い学び合いの他教科への波及効果と、学級経営との相乗効果も意識して、仲間を手助けた児童や、免許証取得に努力した児童を評価し励ましてくださった。

このように、マイ卵という外的動機づけに刺激された学ぶ側からの「教えて」が、主体的学びと教え合い学び合いを活発化させた。そして、知識・技能の共有を促進し、仲間への共感を深め、仲間の協力に感謝するというつながりを生んだ。この共有・共感・感謝の連鎖的つながりにより、免許証取得への強い意欲と仲

間と共に伸びる意識を併せ持った“学ぶ雰囲気”が生まれ、より主体的に学ぶ集団へと高まっていった。

今年4月実施の「全国学力・学習状況調査」の顕微鏡操作に関する問題②(4)の正答状況分析の結果、6年(今年の児童)5年とも免許証有の正答率が大幅に優位で、全体の正答率も共に優位であった【表3】。



【表3】 H27 全国学力・学習状況調査 正答率比較

②(4)正答率	全国平均	潮江小6年	潮江小5年
全体	37.9%	43.3%	78.5%
免許証有		55.8% (24/43名)	81.4% (48/59名)
免許証無		20.8% (5/24名)	50.0% (3/6名)
全国平均との差		+ 5.4%	+ 40.6%

※5年の調査実施条件:7月中旬(免許証試験終了後約3週間)

3分程度で、②(3)(4)のみを抽出した問題用紙に直接解答した調査実施条件の違いから、5年と6年の結果は同列には扱えない。しかし、①5年の免許証有人数の母集団における割合は90.8%で、学力に課題のある児童も多く含まれている。(免許証無6名は、平素の学習状況と正答率50.0%から、取れなかったのではなく、取る意思が無かったと判断できる。)この条件下での81.4%の正答率から、主体的学びの高まりと、“学ぶ雰囲気”の中での教え合い学び合いが、知識・技能の定着に効果的に作用したと考えられる。また、②免許証有に限定すると、単に免許証有よりもコーチやマスターの正答率が高く、仲間に教えて学ぶことで知識・技能の定着率が高まることも確認できた【表4】。

【表4】 潮江小5年「免許有」児童の正答率内訳

全国平均	免許証有37名	コーチ14名	マスター8名
37.9%	78.4% (29名)	85.7% (12名)	87.5% (7名)

前述①②と大幅な正答率の相違から、主体的学びが高まり、教え合い学び合いが活発化すれば、知識・技能の定着率が大幅に高まることが確認できた。

7 仮説の検証

卵パックやプレパラート等の学習環境【学びの場】を整え、個々の学びに意味や連続性、つながりを持たせる『顕微鏡免許証』システム【意図的しかけ】を施すことで、個人の学ぶ意欲を引き出すとともに、集団の“学ぶ雰囲気”を生み、教え合い学び合いを活発化させた。その結果、基礎的な知識・技能の定着率を大

幅に高め、主体的に学ぶ子どもを育むことができた。

8 成果と課題

○意欲に基づいた主体的学びこそが重要で、これを高めれば、結果として知識・技能の定着率も向上すると確認できた。この主体的学びを高めるためには、教材(卵や顕微鏡など)や仲間、教師などのあらゆる教育的環境を、意図的に「つなぐ、つなげる」ことが効果的であった。そして、教師どうしが意図を共有してつながることで、より主体的に学ぶ子どもを育むことができると確信することもできた。

○学力に課題のある児童の意識に注目し、「なぜ?」と問うことで、『顕微鏡免許証』システムを目の前の児童にマッチングさせ、より意欲的な集団の“学ぶ雰囲気”を生む実践にまで改善できた。これにより、全ての児童を巻き込んだ、確かな学力をつける実践へと大きく前進することができた。

●教師の願いが、外的動機づけ(『顕微鏡免許証』の取得)として児童に効果的に作用し、主体的学びを引き出した。しかし、児童自らが強い願いを持ち、それが次々に内発的動機づけを生み出し、主体的学びを培っていく、いわゆる“心に火がついた”状態に導くことこそ教師の役割である。この児童自身の願いに基づく内発的動機づけの形成を目指したい。

9 おわりに

教育は、まず『願い』ありき

願いのレベルが、『教育の質』を決める

初めてこの言葉に出会ったのは8年前だった。それ以来、子どもたちに幸せをつかめる力をつけたい、と強く願って実践を重ねてきた。児童の実態を捉え、目指す姿を明確にイメージして、その差を埋めるための授業改善に取り組んできた。いかに教えるかではなく、いかに学ばせるか。その日々の延長線上に今回の実践があり、児童の素晴らしい学びに出会うことができた。児童の姿に学ぶことで、この言葉の本質に触れられた思いである。心から感謝したい。

子ども一人ひとりが、幸せにつながる『願い』を持てる実践を目指して、今後も精進を重ねていきたい。

働く力を高める地域貢献活動の実践

～一人一人のよさを生かし、心を育てる職業教育の在り方を目指して～

秋田県立栗田養護学校

校長 小林 俊昭

1 はじめに

本校の高等部環境・福祉科は平成22年度に開設され、秋田県内の特別支援学校知的障害教育校としては唯一の職業学科である。社会的・職業的自立に向け、職業に関する専門教科を中心とした教育課程を編成しており、生徒全員の企業就労実現を目指している。

平成26年度より学年縦割りの学習グループを編成し、毎週水曜日と金曜日は一日を通して活動するコース学習を実施している。

コース学習は地域コミュニティコース（家政科）とエコロジーサービスコース（流通・サービス科）の2つのコースがあり、それぞれの専門教科の意義や目標に沿って「地域貢献」を目的とした学習を行っている。

本稿は平成26年度から行っているコース学習における地域貢献活動の実践報告である。

2 主題設定理由

「働く」の言葉の語源は「傍（はた）を楽にする」という一説がある。今は賃金労働のことを「働く」と指す意味合いが強いが、他者の負担を軽くしてあげる、楽にしてあげるということが本来の意味であり、「人のために何かをする」ということが「働く」ことだと言える。

本学科生徒の主障害は軽度の知的障害、発達障害である。「勉強ができない、分からない」といった劣等感や、いじめやからかいの対象になった経験から、自己肯定感や自尊感情が低く、自信の無さから他者との関わりを苦手としている生徒が多い。そのため、生徒が自己肯定感や自尊感情を高めながら、「人のために何かをしたい、人の役に立ちたい」という気持ちを育てていけるよう、地域貢献活動を実践した。

3 実践のポイント

(1) 地域のニーズに応じた活動内容の設定

生徒が社会的役割を担い、人の役に立つことへの喜びを感じられるよう、地域のニーズに応じた活動内容を設定した（表1）。

表1 コース別活動内容

<地域コミュニティコース> ・喫茶くりの木の営業 ・スマイル健康教室の開催
<エコロジーサービスコース> ・地域公共施設、商業施設の外部清掃 ・除雪ボランティア

(2) 課題意識を高める活動場面の設定

生徒が能動的に働く姿を求め、一人一人が自ら思考し行動できるよう、次のような活動場面を設定した。

① 学年縦割りの協同（共同）作業

経験を積んでいる生徒がリーダーシップをとりながら、同じ目標に向かって力を合わせて作業したり、一緒に作業を進めたりする場面

② 事前ミーティング

活動を進めていくために、目標を共有し合い、事前に生徒間で計画を立てたり、役割分担をしたりする場面

4 研究の実際

(1) 地域コミュニティコースの実践

地域コミュニティコースは、地域の方に学校へ来ていただけるような活動をする「地域貢献」の形を目指している。

① 喫茶くりの木の営業

「喫茶くりの木」は校舎の一角にある。毎週金曜日の午前11時から午後1時半まで営業し、コーヒーや地域の菓子店から仕入れたデザート、手作りのランチを提供している。

実践を積む学習の場として平成23年度から営業を行っている。コース学習導入後は、生徒が地域の方の目線に立ち、できるだけ自分たちの力で喫茶くりの木を運営できるよう、学習活動を見直した。

現在、生徒が行う仕事は多岐にわたる。提供するランチメニューの決定、調理レシピや材料表の作成、

FAXによる食品会社への材料注文や地域菓子店へのデザート注文等である。これらの仕事は異学年で4～6つのペアを組み、1週間おきに担当を変え、全員が全ての仕事を体験することになる。「喫茶くりの木」の従業員として一人一人が責任をもって運営に携わるためである。

営業日当日は各担当業務に分かれ、登校後速やかに開店準備を始める。接客担当者はホールや玄関、トイレの清掃を行う。厨房担当者は開店時刻に合わせて調理を進める。レジ担当者は営業中の会計に加え、営業終了後は直ちに精算を行う。精算は収入調書の作成だけでなく、食材や消耗品等の経費から支出調書の作成までを含んでいる。



〈接客の様子〉

当日の担当業務は学年縦割りで分担している。業務分担をする際、全ての業務を経験できるよう、最初は教師が生徒の経験の度合いや実態を踏まえて業務分担を決める。全ての業務を経験することで、生徒はどの業務も営業を成り立たせるうえで欠かせない仕事であることを理解する。そして、学年が上がるにつれ、自分が得意とする業務で力を伸ばすためにリーダーを務めたり、自分の課題に合わせて自ら役割を決めたりするなど、仕事への意識が向上してくる。

開店すると、いつもすぐに地域の方が足を運んでくださる。常連客も増え、現在1日の平均来客者数は約45人となっている。26年度の総来店者数は2,163人であった。これは25年度までの数をはるかに超えている。営業中は業務ごとに交代で休憩時間が20分与えられるが、どの生徒も昼食を済ませるとすぐに戻ってくる。店にはたくさんのお客様が待っていることを知っているからである。

地域の方に「また来たい」と思ってもらえるように、生徒が「何ができるか」を考える場面づくりを大切にしている。

②スマイル健康教室の開催

「スマイル健康教室」は前期8人、後期11人の生徒が学年縦割りで役割を分担し、地域の方々の健康増進を目的としたレクリエーションを企画運営する

活動である。26年度は前期、後期に1回ずつ実施した。

事前ミーティングでは生徒が中心となってレクリエーションの内容を協議した。「ある程度の運動量を確保しつつ、地域の方に楽しめる企画」をテーマに、生徒がたくさんアイディアを出し合い、実際に自分たちでやってみて内容を決定した。また、パソコンを使ってポスターやチラシを作成し、地域に出向いて参加希望者を募った。

本番に向けて、生徒が「地域の方に楽しんでいただくために何ができるか」を考えられるよう、生徒間で役割分担をする場を設けた。また、教師が参加者役となってリハーサルを行い、その様子をビデオで撮影し、映像を見直して改善方法を考える場も設けた。

いずれの開催日も参加者が想定より少なかったが、参加した地域の方はレクリエーションをととても楽しんでた。また、責任をもって自分の役割をやり遂げた生徒たちからも「楽しかった」という声が聞こえた。

「スマイル健康教室」はその名称のとおり、生徒も参加者も共に笑顔で楽しむことができる活動となった。



〈レクリエーションの様子〉

(2) エコロジーサービスコースの実践

エコロジーサービスコースは学校から地域へ出向いて地域の役に立つ活動をするを目標としている。

①地域公共施設、商業施設の外部清掃

外部清掃ではビルクリーニングの知識や技術を生かし、保育園やコンビニエンスストア等の地域の公共施設、商業施設に定期的に出向いて清掃を行っている。

26年度は4月から11月まで計40回実施した。いずれの施設も従業員が通常業務の合間に清掃作業を行っているため、生徒たちの外部清掃は大変喜ばれている。

学年縦割りの3～6人を1クルーとし、事前ミーティング、清掃先への移動、清掃作業、点検、清掃完了報告といった一連の流れを全てクルーで責任をもって進めている。

事前ミーティングでは清掃先の要望に応じてリーダーを中心にクルー内で清掃計画を立てている。教師が準備した作業カードと清掃計画書を活用し、清掃内容に応じて必要な資機材とその準備数を考えたり、誰がどの範囲で何の清掃を行うか、役割分担を行ったりしている。

外部清掃ではトラブルが起きたとき「すぐに近くの人に相談すること」を大切にしている。教師は生徒間で話し合い、自分たちで解決できるよう、できるだけ離れて見守ることを心掛けている。生徒たちは自分たちの力でやり遂げることで達成感を得ており、その積み重ねが働く意義を理解することにつながると考えている。

作業の振り返りでは作業カードに示された評価項目に沿って「なぜできたか」「なぜうまくいかなかったか」評価の理由を明確にしている。評価の理由を明確にし、「より良くするために」という視点で改善策を考えていくことで、生徒は向上心をもって作業に取り組むようになった。

地域の要望以上の仕事ができるよう、プライドをもち、常に質の高い清掃作業を目指している。



〈外部清掃の様子〉

②除雪ボランティア

冬季は、清掃よりも除雪のニーズが高いことから、地域で除雪ボランティアを実施した。地域の方の協力を得て、民生委員の方々に呼び掛けてもらったところ、一人暮らしの高齢者およそ10世帯から除雪依頼を受けた。

除雪ボランティアは異学年の5つのペアが1日2世帯へ訪問する。事前ミーティングでは訪問時の高齢者の方とのやりとりを想定し、教師を高齢者に見立て、入念なシミュレーションを行ってから実際に各家を訪問した。

いざ出かけてみると、インターホンを鳴らしても誰も出てこないということがあった。耳が遠かったり、足が不自由であったりという様々な事情が後でわかった。生徒たちは、高齢者の様子を目の当たりにし、最初はとまどっていた。訪問を重ねるうちに、大きな声を出して聞こえるようにゆっくり話をしたり「今、そっちへ行きます」と言って、お年寄りの

近くへ行って話をしたりするようになった。例年になく雪が少ない年であったが、雪が降らなくても毎週水曜日と金曜日には必ず出向き「何かお困りのことはありませんか」と言葉を掛けた。

除雪ボランティアは「除雪をする」という本来の目的を達成することよりも「コミュニケーションをとって喜んでいただく」ことの意義が大きかった。ある方には「あなたたちの学校では、心を育てているのね」と言っていただいた。学校宛てに感謝の手紙が届くこともあった。

生徒たちは、自分の言葉や行動が他者に喜びを与えられることに気づき、地域の方のたくさんの温かい言葉と笑顔に自信に変え「コミュニケーションの力がついた」と振り返っていた。



〈訪問時の様子〉

5 成果と課題

(1) 成果

次に示す表(表2)は、3年次の現場実習における企業からの評価を年度別に比較したものである。企業に配付される評価票は34の評価項目があり、5つの要素に分かれている。評価はAからDの4段階で示され、Aは「本人のセールスポイントとして評価できる」Bは「普通、そのままでも特に課題とはならない」Cは「実習に支障はないがもう少し努力してほしい」Dは「改善が必要である」と評価される。この表では、各項目でAもしくはBの評価を得た生徒の割合から要素ごとの平均値を求めている。

表を見ると、地域貢献活動を実施した26年度以降、作業態度を除いた全ての要素で評価が上がっていることが分かる。特に、報告、連絡、質問等の勤労習慣を要素とした評価が大きく伸びている。

実習先からは「働くことに楽しみをもっている」「課題を自分で見付け、工夫して取り組む姿は素晴らしい」といった声があった。また、生徒の実習日誌には「もっと仕事を覚えたい」「作業スピードを他の従業員の人と同くらいにしたい」といった内容が書いてあり、向上心をもって仕事をしている様子が見られた。

表2 実習企業先からの評価比較

H25～27年度3年次におけるA+B評価の割合平均(%)			
評価の要素 (評価項目数)	H25.3年	H26.3年	H27.3年 (7月までの評価)
労働の理解(3)	91.3	93.3	100.0
勤労習慣(8)	79.5	93.8	98.4
作業態度(11)	96.0	91.8	96.6
作業遂行能力(5)	80.0	92.0	97.5
社会性(7)	83.8	90.0	92.9

(2) 課題

26年度の卒業生は、全員就職が内定し、4月から社会人として新しい生活を迎えた。しかし、4ヵ月が経ち1人の生徒が会社を辞めてしまった。

この生徒は失敗を指摘されたことで自信を失い、働くことへの意欲が低下し、他の従業員からは「やる気がない」と、さらに指摘を受けることになった。上司や卒業担任のフォローを受けても、困難な状況を自分の力で打破しようとするまで至らなかったのは、常にどこかで「やらされている」という意識があったことが原因ではないかと考えている。

また、生徒一人一人のよさを生かせるよう学習活動を行ってきたが、卒業までの3年間で教師が生徒に対し、生徒自身のよさを十分に伝えることができていたのか、生徒は自分のよさをどれだけ自覚し、社会で通用する自信をもっていたのか、となると疑問が残る。

この反省を受け、生徒が職業人として、社会で力を発揮できるよう、生徒自身が自分の意志と責任で人の役に立つために行動し、十分に「やりがい」や「喜び」を感じられるようにしていきたい。そのためには、社会に出てからの「現実」と学校に在籍している間の「理想」の差を埋められるよう、生徒が「他者から求められていること」を理解し、行動できるようにする必要がある。また、教師は生徒のよさを認め、伸ばしていくとともに、実社会の厳しさも真剣に伝えていかなくてはいけない。

日々の学校生活において「必要とされていること」「求められていること」が何であるか、生徒が考える場をつくりたい。そして、相手の思いを受け止め、自ら進んで行動できるよう指導していくことが、今後の課題である。

6 おわりに

地域貢献活動を実践する中で、地域の方と関わり合うことが、生徒にとって「日常」となった。この日常の中で「ありがとう」の言葉をいただき、地域から必要とされてきた経験は、生徒が自分の道を進むための足場を固めてくれた。そして、地域の方の言葉や笑顔は、生徒に「あなたはとても大切な存在だ」ということを伝えてくれた。

本学科の生徒が、地域の方に支えられながら、地域を支える一員であり続けるために、今後も地域貢献活動の実践を積み重ねていきたい。そして最後に、いつも温かいまなざしで生徒を見守ってくださる地域の方々に心から感謝申し上げたい。

〈参考文献〉

- ・「キャリア発達支援研究1 キャリア発達支援と実践の融合を目指して」
キャリア発達支援研究会編著

執筆責任者 教諭 今井 彩

人間関係力をもとにした確かな学力と進路意識の向上を目指して

～目的を意識づけた集団活動で個を伸ばす教育活動の取り組み～

富山県立富山高等学校

校長 木村 博明

1 はじめに

(1) 今日の教育課題と研究主題の設定

次期学習指導要領においては、課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆるアクティブ・ラーニングなど）の充実や集団活動を通じた人間関係力の育成、進路意識の醸成などが、今日的な教育課題の一つである。多様な個性をもつ生徒を伸ばすには、個別指導はもとより、目的を意識づけた集団活動を通じて高め合うことが有効であると考えている。そこで、個と集団を伸ばす学習原理、「教えることは最高の学習」（セネカ）の考え方にに基づき、以下の3点について、人間関係力をもとに確かな学力と進路意識向上を研究主題に設定した。

①支え合う集団活動による人間関係力の向上

学校不適應や特別な支援が必要な生徒・保護者への早期対応とともに、生徒の共感的な支え合いによる人間関係力の向上が必要なこと。

②学び合う集団活動による確かな学力の向上

探究科学科の協働的探究活動の成果を生かすとともに、学び合いなどの授業改善によって、生徒自らが課題解決を目指す確かな学力の向上が必要なこと。

③高め合う集団活動による進路意識の向上

計画的な進路指導で、生徒が進路目標への学習計画を立てて実践するとともに、目標が共通する学習集団を育てるなど、進路意識の向上が必要なこと。

(2) 本校の実態

本校は、昭和43年に全国初の理数科設置、平成14年に本県初のスーパーサイエンスハイスクール（SSH、～18年）指定など、教育課題に率先して取り組んできた。

「学び合い富山ビジョン」のあらまし

※太字は今回の研究関連、（ ）は開始年度

- 教育活動の充実
 - ・ピア・サポート活動の導入（平成26）
 - ・アクティブ・ラーニングの推進（平成25）
 - ・アメリカ短期留学研修（平成26）
- 教育環境整備
 - ・全教室への電子黒板等の整備（平成27）
 - ・図書館メディアセンター整備（平成26）
 - ・協働学習コーナー等の整備（平成26） 他

た。平成23年度には「探究力」の育成を目指し、理数科を拡充し理数科学科・人文社会科学科の2学科を設置（探究科学科と総称）した。各学年は普通科5、探究科学科2の7学級で、定員280名である。学習はもとより、学校行事や部活動に熱心な生徒が多い。

(3)新たな教育活動をめざす「学び合い富山ビジョン」

社会の変化を背景に、生徒は多様化し、人間関係力及び、学習や進路意欲などに課題を持つ者も増えてきた。一方、教科の授業は一斉指導が主だった。そこで、平成27年度の創校130周年に向け、新たな教育活動を目指して、平成25年度に教職員のブレインストーミングを行い、課題と目標、なすべき教育活動の共有化を図った。これを元に「学び合い富山ビジョン」を策定し、その実現を図っている。今回の研究は、このビジョンで提言された教育活動を中心に、生徒の集団活動に着目し、今日的な教育課題の解決を目指したものである。

2 研究仮説

生徒の全人的な発達を促すため、目的を意識づけた集団活動で個を伸ばす、3つの研究仮説をたてた。

- (1) ピア・サポート活動により支え合う集団を育てるとともに、専門家と連携して学校不適應の解決を図ることによって、人間関係力を向上することができる。
- (2) アクティブ・ラーニングや協働的探究活動等に取り組み、学び合う集団の中で、課題発見・解決・発表などの確かな学力を向上することができる。
- (3) キャリア・デザインによって生徒が目標設定し、計画的に実践するとともに、進路目標を目指し高め合う集団を育てることで、進路意識を向上することができる。

3 研究の実際

集団の支え合いのもと、学び合い、高め合うことで個を伸ばす、との共通理解を図り、指導改善を進めた。

(1) 人間関係力の向上を目指して

- ① ピア・サポート活動による支え合う生徒集団づくり
人間関係力を高めるピア・サポート活動を導入する

研究主題とめざす力・教育活動例の概念図

主題 めざす力 教育活動例

集団の中で個を伸ばす

人間関係力

- ピア・サポート活動
- カウンセラー等専門家との連携 他

確かな学力

- アクティブ・ラーニング、学び合い
- 協働的な探究活動
- アメリカ短期研修 他

進路意欲

- キャリアデザインスケジュール帳
- キャリアガイダンス、他

ため、平成 25 年度に教員を県外研修会に派遣。平成 26 年 4 月に構成的グループエンカウンターなどの校内研修会を行った。ホームルームや新入生共同宿泊学習（4 月、1 泊 2 日）などの活動に取り入れ、ともに支え合うことを意識づけた。12 月に各学級の生徒保健委員研修会を行い、生徒主体の活動を準備している。

② スクール・カウンセラー（以下 S C）等との連携

不適応傾向の生徒には、早期から S C と連携し、ケーススタディに当たった。また、長期欠席生徒と保護者の意思疎通と人間関係の修復を図った。

特別支援が必要な生徒には、専門の特別支援教育コーディネーター等を招聘し、授業視察と研修会を行い、教員の対応力の向上を図った。

また、P T A と連携し、S C 等を講師とした保護者向けセミナーを年 1 回開催し、家庭の理解を図っている。

(2) 確かな学力の向上を目指して

知識を理解し、課題を発見・解決し、表現できる確かな学力を育てるため、協働的な学習の活発化を図った。

① 協働的な探究活動の定着

探究科学科は、1 年当初に探究力の向上を意識づけ、物事や情報への批判的思考法、反論などの論理演習を学んだ後、班毎に県内フィールドワークや、課題発見・仮説検証を行い 9 月の発表に臨む。2 年次は班毎に大

探究科学科 1・2 年の主な活動 ○授業 ●授業外

1 年

- 4 月 クリティカルシンキングと論理演習
- 5 月 外部講師ポスターセッション講座
- 7 月 7 名程の班で県内フィールドワーク
- 9 月 文化活動発表会でポスターセッション
- 10 月 外国人講師「学問への招待」セミナー
- 11 月 2 年次のテーマ設定・先行研究調査等
- 3 月 大学教授等訪問指導

2 年

- 4 月 調査研究（5 名程で 1 班、16 班）
- 7 月 東京方面研修、フィールドワーク等
- 9 月 文化活動発表会でポスターセッション他
- 12 月 3 校合同発表会でポスターセッション他
- 1 月 論文作成

探究科学科 第 2 学年の探究テーマ例

無限を数える／抗真菌活性の探索／建物の高さや振動の関係／ルービックキューブの数学的考察／英訳ドラえもんに見るオノマトペの日英比較／改憲—我々は本当に憲法を知っているのか 他



学教授の指導を受け、9 月の校内発表会、12 月の県内探究科学科 3 校合同発表会（富山・富山中部・高岡）を経て論文をまとめている。3 年次は身につけた探究力を教科の学習に生かし高い学力を目指している。

② 普通科への協働的な探究活動の普及

思考力や表現力が大きく向上することから、普通科 1・2 年生は、毎年 9 月の文化活動発表会で、学級毎の「生態系」「食生活」などのテーマを学習班で分担し、展示解説やポスターセッションを行っている。

また、2 年生は、総合的な学習の時間に、論理演習やグループワークを実践した。協働的な探究活動は、全校に根づいてきたと言える。

<参考>普通科 2 年 論理演習の感想

「クリティカル・シンキングによって問題の理解力、論述力が上がった」「反論力を身につけ自分なりに考えるようになった」「グループワークで見方を広げることができた」など

③ アクティブ・ラーニング活動等の取り組み

ア 公開型校内研修会による教職員への普及

各教員が自ら授業改善に取り組みやすいよう、協調学習やアクティブ・ラーニングなどで日本を代表する専門家を招聘し、公開型の校内研修会を開催した。毎回校内外から 80 名近くが参加し理解を深めた。

○平成 25 年 12 月 東京大学教授 三宅なほこ

「協調学習を引き起こす授業づくり」

○平成 26 年 2 月 京都大学准教授（当時）溝上慎一

「能動的学習を促す授業方法 アクティブ・ラーニングとピアインストラクション」

○平成 26 年 5 月 産業能率大学教授小林昭文「アクティブ・ラーニング型授業の意義・効果・始め方」



イ 授業実践と研究協議

平成 25 年に、県教育委員会指導主事等訪問を活用し、研究授業では、生物「協調学習によるジグソー活動を利用して」、保健体育「剣道実技への学び合いの導入」など各教科で取り組み、研究協議会は、「学習を支援する『学び合い』について」をテーマに理解を深めた。また、これを契機に、映像機器での提示と学び合い型演習、ペアワークやグループワーク、問題演習への学び合いの導入、クリッカーの活用など多くの実践が始まり、校内互見授業などで成果の共有を図っている。



「学び合い」生徒の感想例

「一緒に学ぶやりとりが楽しい」「質問し合うことで、多様な観点から理解が深まった」「学習する仲間ができた」「教えることでよりよく理解できた」など

ウ 中学校で教える学習サポーター活動

平成 25 年から、近隣中学校の夏季の自習セミナー（中学 3 年対象、5 日間、50 名程）支援のため、生徒の希望者 50 ～ 60 名が各 2 ～ 4 回参加している。事前研修では、教えることの意義や、目線合わせ、共感的に受容、「そんなことも分からないのか」等は禁句など、態度や言葉がけに留意させている。

中学生から好評で、高校生も自己有用感を高めることができた。2 年連続参加の者、昨年度教えてもらい今年教える側になった者、教職志望を固めた者、授業態度が熱心になった者など、多くの成果があった。



ボランティア生徒感想例

「分かったつもりのことでも教えるのは難しかった。『よく分かった、ありがとう』と言われ、うれしかった」「来年も参加したい」「先生の授業の素晴らしさが分かった」など

エ アメリカ短期留学研修での学習班の取り組み

平成 26 年度から 1 ・ 2 年希望者を対象に、夏季に米国大学の語学学校での研修を開始した。32 名が参加し、世界十数ヶ国の高校生と寮生活を共にし、英語による議論などに取り組んだ。生徒は事前研修から 6



生徒の感想例

「困った時に仲間が支えてくれた」「自分から動かないといけないと分かった」「失敗と挑戦を通して強くなった」など

班に分かれ、励まし合って課題分担、自主活動に取り組む中で、積極性を身につけ進路意識を高めた。校内発表を通じ、他生徒にも大きな影響を与えている。

オ 自主的な学び合いの呼びかけ

本校は自主学習のため、学習室 100 席、図書館閲覧室 50 席、職員室前 20 席などを設けている。新たに協働学習コーナーを設置し、授業前・放課後の教室等の学び合いを担当等から呼びかけている。



(3) 進路意識の向上を目指して

① キャリア・ガイダンス等の充実

生徒の殆どが大学進学をめざすことから、職業選択と進路決定のため年 5 冊の進路資料を作成・配布し、年 6 回の担任面接などで活用している。

1 年次は全員が保育所でのインターンシップを体験し、夏季のキャリア・ガイダンスでは、弁護士、新聞記者、研究者、医師、会社員などの講話で職業意識を高める。2 年次は各学期 1 回の進路講演会、夏季の東京方面大学研修や大学生による進路懇談会で、志望大学・学部を明確化させ、進路意識の向上を図った。



② キャリア・デザインのためのスケジュール帳の導入

こうした進路意識と日々の学習をつなげ、いっそう強化するため、平成 26 年度からキャリア・デザインのためのスケジュール帳を導入した。生徒自らが、進路目標に向けた学期・月・週単位の学習計画をたて、日々記録し振り返ることで成長を実感し、意欲を高めることができるよう、各頁にアドバイスを載せるなど充実を図った。

③ 目標が共通する集団づくりによる進路意識の向上

平成 26 年度から、2 ・ 3 年生で進路目標が共通する者の学習指導や添削指導の際に、学習集団化を図った。学び合い、高め合い、切磋琢磨する意義を呼びかけ、学習集団による進路意識の向上を図ってきた。

4 研究の成果

※数値は平成 26 年度アクションプラン達成度評価等
※〔総合評価 A ～ D〕は、同プランの各達成目標について学校評議員と PTA 役員計 20 名による総合評価

(1) 人間関係力の向上

ピア・サポート活動によって、各学級・学年の雰囲気や和やかになり、SC等との積極的な連携によって、不適応傾向の生徒の殆どが早期に解決した。併せて、長期欠席生徒や保護者の人間関係の改善を図ったことで、不登校生徒はほぼ半減した。(下表) 生徒の人間関係力は全体として改善が図られたと考えている。

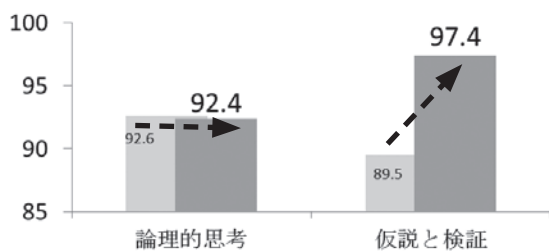
年間30日以上不登校生徒数の経年比較			
(平成24年度の不登校生徒数を1.0とする)			
平成24	平成25	平成26	
当該生徒数比 (1.0)	(0.5)	(0.6)	

(2) 確かな学力の向上

① 探究力向上への意欲的取り組み

課題研究発表会(平成26年12月)では、内容や態度について大学教授等から高い評価をいただいた。

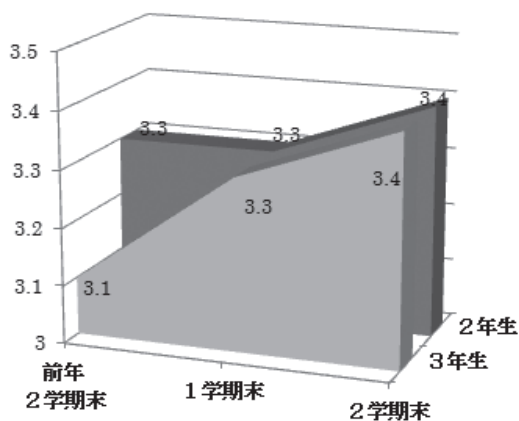
生徒の意識調査では、論理的思考の学習に興味が大変高く、仮説・検証を考える意欲についても、昨年度より目立って高い。(下図) 5段階評価[総合評価A] 生徒の意識変容(1年生) (5段階評価で4以上の合計%)



② 学び合い活動の体験の増加

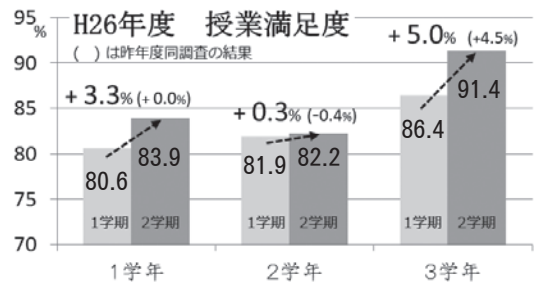
授業の前後や放課後に、学級や部活動仲間で自主的に学び合う姿が多く見られるようになった。学び合い活動の体験は、平成26年2学期末までの1年間で、2・3年生とも増加した。(下図) [総合評価A] 学習課題を学び合うことで、生徒自身によって知識理解とともに、確かな学力の向上が図られていると考える。

学び合い活動体験の増加
前項の5段階評価の学年別平均値



③ 生徒の授業満足度の向上

平成26年度1・2学期末比較では、全学年で高いレベルで授業満足度が向上した。(下表) [総合評価A] (5段階評価で4以上の合計%)



以上の生徒評価に加え、教員は、授業や質問教室・添削指導を通じて、生徒の多くが知識・理解や、論理的思考や発表力を向上させたとしている。確かな学力の向上について、一定の成果があったと考える。

(3) 進路意識の向上

2年生は平成26年2月調査で「スケジュール帳を活用し進路意識が向上した」者は46.6%にとどまった。一方で、志望大学・学部を決めた者は97.7% (昨年度は、76.7%) で大幅に増加した。[総合評価A]

また、2・3年生には、進路目標が共通する集団で積極的に学習する動きが生まれた。3年生は、卒業時に全員の進路が決定し、(文部科学省「学校基本調査」での無職無業者なし) 進学実績も良好だった。生徒の進路意識は、全体的に向上しているといえる。

5 課題

いっそうの改善を図るため、下記の4点を中心に残された課題について検討し、その対応を進めている。

- 授業の効率化を図り、アクティブ・ラーニングや探究活動などの時間を確保するため、全教室に電子黒板を整備し研修会を実施する。
- グローバル化に応じた探究力を育成するため、課題研究の先行研究調査に英語文献調査を協同的活動として位置づけ、世界初研究の意識を高める。
- アメリカ短期留学研修3月事前研修で、新2年の学習集団化、新1年生を指導する力の育成を図る。
- スケジュール帳は、担任面談や学習集団の目標意識形成の際に、積極的利用を図る。など。

6 おわりに

今後とも、本校の伝統である全人的な教育の理念を引き継ぐとともに、教育課題に対応し、集団の中で個を伸ばしていく教育活動の充実に努めたい。

217名の体力向上をめざして！

～体を動かす楽しさを感じる 春照小学校『ten ⑩トレ』運動～

滋賀県米原市立春照小学校

校長 鈴木 利己

1 学校の現状と課題

本校の合言葉は「元気いっぱい・やる気いっぱい・やさしさいっぱい」である。しかし、5年前の学校保健委員会では、保護者から「元気いっぱい・やる気いっぱい」が感じられないと児童の体力低下が話題となった。教師も日頃の児童の様子から体力低下を様々な場面で感じ取っていた。特に課題となったのは女子の運動する子と運動しない子の二極化である。土日にスポーツ少年団で何時間も運動している子に対して、運動しない子は一日家の中で過ごすといった状況であった。さらにスポーツ少年団に所属する児童は年々減少している。

そこで、保護者が小学校時代にもおこなっていたマラソン大会（11月）を実施したが、期間と限定した取組のため大きな成果は得られなかった。

この現状を少しずつ変えていこうと4年前から高学年のクラスで「朝トレ」という15分間運動を毎日実施した。きっかけは福井県・秋田県の取組である。福井県は「体力アップから学力アップへ」（図1）の取組を50年前前から実践している。その成果に注目し本校でも4年間継続して実施してみた。

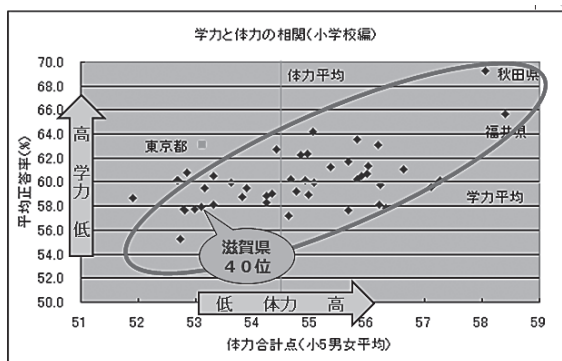


図1：学力と体力の相関図

その結果、クラスの体力総合平均点は福井県の得点を上回った。継続した取組により体力向上が期待できることがわかった。今回「県の10分間運動」の取組を本校が米原市拠点校として受けることとなり、全校での取組に広げることになった。

2 取組の目的

- ① 全校一斉で10分間運動を実施し、217名の体力の向上と意欲を高める。
- ② 『走・跳・投・敏・表・柔』のバランスよいトレーニングで体幹を鍛え体力向上をめざす。

3 運動できる環境づくり

(1) 活動場所

217名という小規模校でもあるので、業間に全校一斉で実施する。冬場は1m近くの雪が積もり、屋外での活動ができないため、年間継続して天候に左右されないように、廊下や空き教室を利用し屋内ですべての取組ができるように設定する。

(2) 活動時間

10:20～10:35の中休みに活動する。この15分間を「準備3分+活動10分+後始末2分」となっている。音楽に合わせて活動し、10分間の活動時間をできるだけ確保できるように設定している。

(3) 活動内容

① 10分間運動のメニュー

走：変形ダッシュ 15m

跳：ラダートレーニング（週2回）

投：下学年は、的当て競争

上学年は、バスケットボールサーキット

表：EX ダンス体操

敏：反復横跳び

柔：下学年は、ようかい体操第一

上学年は、コアトレーニング

上記の6領域を7日間で1サイクルする活動である。トレーニング化するのではなく、楽しく運動することを重要視した。その一つが『ダンス体操』である。音楽に合わせて体を動かすことで、運動嫌いな児童にも体を動かす楽しさを感じさせたい。また、ICT機器の活用をおこなって、児童は大型テレビでダンスの手本を視聴し運動（写真1）をする。



写真1：ダンス体操をする1年生

③ 5月・11月のマラソントライム

気候のよい季節を選び2～3週間は、業間にマラソントライムを実施する。上学年は近くのクロスカントリーコースを走り、アップダウンがあるコースを走ることで体幹を鍛え体力向上をめざす。

4 取組の経過

児童の様子から「楽しい」から「また、やりたい！」を感じられる活動をめざす。そのためにも児童の実態を把握し課題を分析してメニュー内容を改善していく。そのことが運動を習慣化させ、運動する子としない子の二極化の課題が解消されると考える。

(1) 保護者に理解を得る (H 26 年 5 月上旬)

PTA 総会において、10 分間運動の取り組みを説明した。体力と学力の相関関係を「福井県と秋田県の結果」や「カリフォルニア州の調査結果」(図 2)を例にあげて説明した。「体力アップから学力アップへ」にたいへん関心を持ち熱心に聞き入る保護者が多く、平成 26 年度末の学校評価では取組に対し保護者から 98.6%の支持を得ることができた。

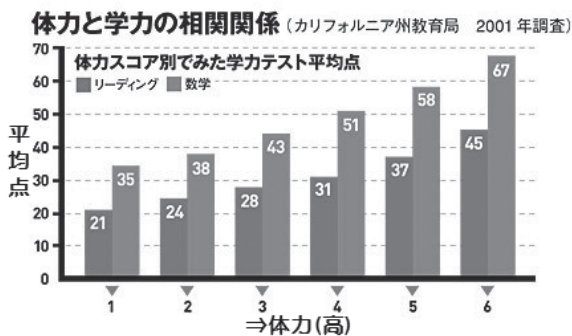


図 2：カリフォルニア州の体力と学力の相関図

(2) 活動時刻の変更 (H 26 年 7 月下旬)

1 学期が終わり、教師アンケートをおこなった。その結果、業間という時間が「2 校時の授業に影響する。」など活動時刻に反省点が多く見られた。そのため、教師たちで話し合いを持ち活動時刻を 2 学期から 1 校時の前 (8:45～9:00) 朝に移行す

ることになった。

(3) ミニハードルトレーニングへ変更

(H 26 年 9 月下旬)

活動メニューにラダートレーニング(写真 4)が週 2 回あるため、1 回をミニハードルトレーニングに切り換え、7 日間で 7 つの種目を活動できるように変更した。ラダーとは違いすぐに引かかるため集中して運動でき、足を高く上げるので運動量も確保できるよいトレーニングである。



写真 2：ミニハードルトレーニング

(4) ボールトレーニングの導入(H 26 年 12 月上旬)

「楽しく走る」ことをねらいボールトレーニングを導入した。ジグザグ走など走りに変化が付き、児童も楽しく取り組めるようになった。また、バランスを意図的に崩すことで、体幹を鍛え体力を高めることができる。

(5) ボール投げトレーニング (H 27 年 3 月中旬)

教師から、児童たちに投げる力がつくトレーニングをさせたいという要望ができた。そのため体育館でできることを考え、大きな網状的のを作ってみた。今では児童が一番好きなトレーニングである。

(6) 教育テレビ：E ダンスアカデミーに出演

(H 27 年 4 月下旬)

新しい年度が始まり 1 年生を迎え全校児童 197 名となった。活動名を児童や保護者から募集し平成 27 年度から「ten @トレ」という名前で活動を始めた。



写真 3：E ダンスアカデミー収録

し平成 27 年度から「ten @トレ」という名前で活動を始めた。

NHK 教育テレビの「E ダンスアカデミー」(写真 3) という番組に本校の取組が取り上げられ、全校児童のテレビ出演が決定した。5 月 22 日(金)に 197 名で踊るダンス体操が全国に放送され、児童の意欲は、ますます高まった。

(7) 児童が活動を考える (H 26 年 7 月下旬)

楽しく運動させるためにミニハードルとラダー

(図3)を組み合わせたメニューに変更した。今までの動きに変化が付き、新しいトレーニングと同じようにモチベーションがあがった。基本メニューが終わるとグループで話し合い、自分たちでメニューを工夫するなど思考した活動ができるようになった。(高学年)



図3：ラダーとミニハードルの組み合わせ

(8) ステップブロックを導入 (H27年7月上旬)

お尻と腰とふくらはぎの筋力を鍛えるステップブロックトレーニングを導入した。児童と一緒に活動している教師から「運動量も多く負荷がラダートレーニングより大きい。」という感想があった。



写真4：ステップブロック

児童は高さを変えたり、色を合わせたりするなどとても楽しんで活動している。(写真4)

(9) アジリティクロススの導入 (H27年7月中旬)

反復横跳びをアジリティクロストレーニングに変更した。バランストレーニングで16種類の動きがあり、児童も楽しく取り組んでいる。2人ペアで行うが、30秒続けると児童の息が切れる。楽しみながら運動量も多い。(写真5)



写真5：アジリティクロス

5 体力づくり体験授業

年間3回の体験授業を実施した。

<第1回> “走”の授業

講師：元男子100m世界選手権代表安井章泰選手

<第2回> “投”の授業

講師：やり投げ世界ランク6位新井涼平選手

<第3回> “敏捷性”の授業

講師：名古屋グランパス望月嶺臣選手

児童は、一流選手の動きを体感し、目を輝かせな

がら体を動かす姿が見られた。



6 他教科と体力づくり体験授業とつなげる取組

「2020年東京を成功させるには何が大切か。」

(6年生国語科学習：討論会)

児童が「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する」ことに興味や関心を持つために、国語科の授業で2020年東京オリンピックについて考えさせた。

ちょっと考えてみよう2020!
今日の話題は・・・

ロンドンオリンピックの成功とは・・・
「ロンドン大会によって障害者アスリートを取り巻く環境に大きな変化が見られるようになった。パラリンピックから3ヵ月後、英パラリンピック協会主催のスポーツイベントが行われ、1000人以上が参加したのを皮切りに、翌年にも障害者スポーツに関するイベントが連続して行われた。私も昨年開催されたイベントに足を運んでみたのだが、パラリンピックのスター選手からサインをもらうために、多くの若者が列を作って並んでいたのだ。ロンドン大会後に障害者がスポーツ活動を行えるクラブの新設目的にテレビ番組に出演したり、企業の広告塔として活躍したりしている。社会的な影響力を手に入れたスター選手が、政府による福祉予算カットといった問題をイギリス国内の障害者の代弁者として、問題提起してくれるようになった。」

図4：家庭学習の作文プリント

宿題(図4)として取り組むことで保護者も巻き込んだ学習となり、保護者の意見も取り上げた。日本は障がい者スポーツにおいて、まだまだ理解を深めなければならないことを児童は知った。その事実から児童がパラリンピックの選手の立場をよく考え、よりよい学習となった。最後に、第2回体験授業に来てくださったやり投げ世界選手権日本代表新井選手に学習したことを伝えた。たいへん熱心に聞いて下さり、『僕自身も勉強になりました。』と感想をいただいた。六年生の児童も違う角度からスポーツに興味や関心を持ち日頃の運動への意欲を高めることができた。



7 学びの広がり

こども園との連携 ～5歳児と5年生の交流～

来年度入学してくるこども園の年長児と5年生が“ten 10トレ”を通じて交流を行った。初めてラダートレーニングをする年長児にどのように教えたらよいか話し合いやシュミレーションをして



取り組んだ。

児童から「先生、自分がやるより難しかった。」などの感想もあり、交流を通して教える喜びや難しさなど新しい学びが広がった。

8 取組の成果

① 体力テストの結果から

体力テストの結果を5年前と比較すると全体的な体力の向上が見られる。二極化した女子の体力に大きな変化がみられた。(図6)

6年生の女子についてみると1年生時には、全国平均以上の種目は3/8種目であったが、7/8種目に増え、体力が向上しているといえる。(図5)

平成27年度 新体力テスト 全国平均との比較								
	米原市立 春照小学校							
	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横跳び	20m×4リッポン	50m走	立ち幅跳び	フットボール投げ
1年男子	△	△	△	◎	○	○	○	○
2年男子	△	▲	○	◎	○	○	△	△
3年男子	△	△	▲	◎	◎	○	△	○
4年男子	△	○	○	◎	○	○	○	○
5年男子	△	△	○	◎	◎	△	△	△
6年男子	○	○	△	◎	○	○	○	○
1年女子	△	△	△	○	○	○	○	△
2年女子	△	◎	○	◎	◎	△	△	△
3年女子	△	△	△	◎	◎	△	△	○
4年女子	△	○	○	◎	◎	○	○	○
5年女子	△	△	○	◎	◎	△	△	△
6年女子	○	◎	○	◎	◎	◎	△	○

(調査実施月 平成26年6月)

◎1学年上の全国平均以上 ○同学年の全国平均以上
△同学年の全国平均以下 ▲1学年下の全国平均以下

図5：H27年度体力テスト結果

ランク	AとBの割合	DとEの割合
平成22年度	37%	27%
平成27年度	65% (+28%)	11% (-16%)

図6：体力テストランク人数割合の変化

② 児童の姿から

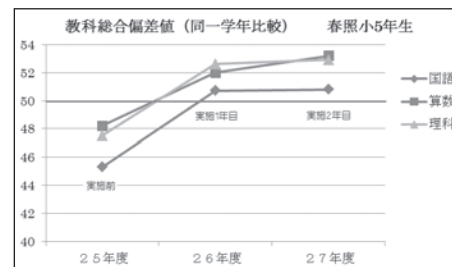
<日頃の様子>

- 1日の生活リズムがつかれるようになった。
- 1時間目の授業がスムーズにスタートできる。
- 学習姿勢の保持ができるようになってきた。

<1年間の様子>

- 欠席0の児童が前年の1.5倍以上に増加した。
- 昨年全員出席8日間⇒今年度1学期で7日間。
- インフルエンザによる学級・学年閉鎖0ゼロ。

③ 体力から学力へ！



上図から毎年実施されている市学力調査では、ten⑩トレを始めた時期と学力が向上している(全国平均以上)時期が一致していることがわかる。今後、学力と体力の相関関係を調査していきたい。

9 終わりに

今回の体力向上の取組は、児童や教師、保護者にとってプラスの要素が多くみられた。毎朝、全校が教室を出て活動することにより、教師は、他学年の児童の様子も把握でき、『今日はAくん調子わるいのかな。』など以前に比べ児童理解が深まっている。また、同じ取組をすることで教師間の連帯感が生まれ、職員室の雰囲気も変わってきた。今では、ten⑩トレが春照小の特色として、県内や全国に知れわたったことで学校全体の自信となっている。

今後も工夫を重ね、楽しい活動であり続けたい。そのためには以下の点が課題となってくる。

- ① 運動用具の維持管理：毎日10分間の運動であるが、この1年半でも用具が破損するなどして交換している。また、新しい運動メニューを導入する際にも費用がかかる。
- ② 児童の体力向上への意欲を高める：年数回のゲストティーチャーを招いて体験授業を続けていきたい。そのため、人材や費用等の確保に向けた取組が必要である。
- ③ 学力と体力の相関関係：学級、個人の両方についてより細かな分析を進めていく。

これらの課題を改善し、春照小学校の児童197名の体力向上の取組をより確かなものとしていきたい。

<参考文献>

学力と体力の相関関係

>>平成21年12月18日朝日新聞記事より抜粋

カリフォルニア州：学力と体力の相関関係

>>2013年8月24日プレジデントオンラインより抜粋

Eダンスアカデミーの写真

>>2015年5月22日EダンスアカデミーNHKより

執筆担当者 体育主任 伊部 学

安心安全を基盤に生きる力を育み、自律的に行動する児童の育成

～インターナショナルセーフスクール（ISS）をめざした安心安全な学校づくり～

京都府亀岡市立曾我部小学校

校長 俣野 弘和

1 主題設定の理由

(1) 子どもを取り巻く状況と校区・児童の実態

近年、子どもが巻き込まれ犠牲となる事件や事故が多発している。また、陰湿ないじめも後を絶たない。子どもたちの命が脅かされる中で、子どもたちの安心安全に社会や学校がどう向き合い取り組むかは喫緊且つ大きな課題である。

本校では平成25年当時、けがやトラブルが多く発生し落ち着かない状況であった。また交通事故や不審者の出没など、登下校時や校外の生活に危険や不安を感じることもあった。校内の安定と校外の安全を確かなものにして保護者や地域から信頼される学校を何とかつくりたいという思いであった。

本校が安心安全な学校づくりに取り組むことを明確に打ち出したのはインターナショナルセーフスクール（ISS＝WHOの認証制度：けがや事故、いじめや暴力を予防し、健やかで安全な学校づくりに取り組む学校）をめざすことを学校内外に宣言したことである。認証を受けることを目的にしながら、子どもたちには自分自身を守る力を、教職員には危機管理意識の高い教職員集団を、地域には幅広い連携と協力で子どもたちを守るセーフティネットが広げられるようにという思いで取組をスタートさせた。

(2) 研究及び取組の基本的な考え方

○めざす学校像
安心安全 いのち輝く学校

○研究主題

安心安全を基盤に生きる力を育み、
自律的に行動する児童の育成

安心安全を学校教育の基盤に位置づけ、その上に学力の定着を図り、自立に向けた生きる力につなげていくことを取組のコンセプトとした。



〈全体構想〉

「安心」「安全」とは何かを問い直し、次の点を取組により獲得する具体的な目標とした。

- (1) 自分の体は自分で守れるようにすること。
 - ①安全への知識・判断力・行動力を育てる
 - ②命を大切にすることを育てる
 - ③危険への感覚・予知する力を育てる
- (2) 安全で安心な環境をつくること
 - ①人を大切にする学級づくりをすすめる
 - ②学校内外の環境の安全性を向上させる
 - ③PTA、地域住民、各種団体との連携を強化する。

2 取組を進める上での留意点

取組を進める上で大切にすることは、次の5点である。

- (1) 「子ども発」の発想を大切にして児童の主体的自主的な活動にする
- (2) 日常的な取組を大切に短期目標を確実に積み上げていく
- (3) 取組を「見える化」して経過や結果が内外に分かるようにする
- (4) 保護者や地域の方の参加や参画を工夫し連携と協働を広げる
- (5) これまでの取組を安心安全の視点でとらえ直し、再構成する

3 取組の着手

(1) 取組に対する意欲づけ

平成25年9月に「みんなで曾我部小学校を世界に誇れるセーフスクールにしよう」と全校集会で取組宣言をした。シンボルマークとなるロゴマークを子どもたちから募集し「I（あい）ちゃん」と命名、「曾我部小学校をこんな学校にしたいという思いを込めた「曾我部小学校ISS〈IちゃんとISS憲章〉



曾我部小学校ISS憲章
★明るく元気で、笑顔あふれる学校をつくりまします
★優しい心と思いやりで、友達を大切にする学校をつくりまします
★安心して安全な生活が送れる学校をつくりまします
★一人ひとりの命が輝く学校をつくりまします

憲章」「ISSのうた」を子どもたちと教師でつくった。「みんなで安心安全なよい学校をつくろう」「みんなで学校を変えよう」という空気を生みだし、新しい取組に対する期待と高揚感を持たせるようにした。

(2) 指導体制の改善

①教職員組織の活動内容の見直しと検討

生徒指導部、特別活動部などの教職員の組織活動を「安心安全」の観点で見直しを図り、日常の取組と中長期的な目標を明確にした活動計画を立て、実践を推進した。

②児童委員会の主体的な活動

児童会本部、給食、体育、環境等7つの児童委員会の活動内容を「安心安全」の視点で児童が検討した。児童はアイデアのある楽しい取組を工夫した。



〈委員会活動〉

③日課表の改善

毎日行っていた職員朝礼を廃止した。朝の時間帯のけがやトラブルを防止し、メンタル面で不安を抱えて登校してくる児童へのケアを行うためである。それに代わり、月曜・金曜の放課後に終礼を行い、児童の状況を共有するとともに、課題を週目標として設定して取り組んだ。

4 具体目標に対応させた主な取組内容

(1) 自分の体は自分で守れるようにすること

①安全への知識・判断力・行動力を育てる

ア安全学習の整備

学校行事、教科、領域、学級活動等に年間を通した安全学習を配置し、地域教材も含めた小学校6年間の系統性を考慮した年間計画を作成し学習を進めている。

イけがマップの作成

けがをした児童は、「けがマップ」にけがをした場所にシールを貼る。その時の天候が分かるように色分けもしている。地図は目につくホールに展示し、保健委員が分析し、放送委員会が放送で注意喚起するなど、けがの防止に努めている。

ウ保健室利用カード

けがをした児童は「保健室利用カード」にけがをしたときの状況を記入、なぜけがをしたのかをふり返り、今後けがをしないようにするにはどうすればいいかを養護教諭と一緒に考える。

②命を大切に育てる

アいじめ防止フォーラム

全校児童がいじめについて考え、命の尊さ、仲間の大切さに気づき、いじめ問題に児童の手で取り組む機会としている。各学級でいじめや人権について話し合いを重ね、フォーラムで意見を出し合った。保護者や地域住民も参加し意見交換して「いじめ防止宣言」を全員で確認した。



【いじめ防止宣言】
 だれもが、安心・安全な学校生活を営み、自分の命を輝かせることは、曾我部小学校の目標です。これから、いろいろな取組を進め、スクールカウンセラーやセーフティスタッフとして、みんなから認められる学校にしていきたいと思えます。『アイ・エス・エス』憲章にかかげる四の柱は、いじめをしない、させない、ゆるさない学校を作るためにも必要なことです。しかし、実際には、友達を傷つけたり、傷つける言葉があったりと、同じ時間を一緒に過ごす仲間を傷つけてしまったりがあります。
 いじめとは、その人の心や体を、傷つける行為であり、その人の人生に、大きな影響を与えるものです。だからこそ、決して許されず、許してはいけない行為です。
 今日、ぼくたちは、いじめの問題を自分自身のこととして、何ができるかを真剣に考えました。これからは、お互いを思いやり、全校児童が仲良く、楽しく過ごせる学校を作っていくために、次の三つのことを大切にしていきます。
 一、やさしい言葉や、思いやりのある言葉を伝え合い、みんなと仲良くします。
 二、喜びや楽しみを分かち合い、みんなで助け合います。
 三、人を傷つける行動を、決して許さず、困った時にはみんなと解決します。
 ぼくたちは、自分たちの力で、いじめのない、笑顔あふれる曾我部小学校を、作っていききたいと思います。
 平成二十六年 六月 二十四日 曾我部小学校児童会

〈いじめ防止フォーラムといじめ防止宣言〉

イ花の栽培、事業所へのプレゼント

命を慈しみやさしい心を育てることを目的に学校内の花壇に年2回花を植え、育てる活動を行っている。大事に育てた花は地域の施設にメッセージを添えて届けている。

ウ敬老会への参加、お年寄りとの交流

お年寄りの知恵や温かさにふれ、穏やかな心を育てるために、交流を大切にしている。また、学校が積極的に地域行事に出かけることでつながりが深まり、見守り活動をはじめとする安心安全への取組にも理解と協力が得られやすい。

③危険への感覚・予知する力を育てる

ア地域安全マップ作り

地域を歩き、校区内の危険箇所や「こども110番のいえ」を調べ、安全マップを作製した。地域の人や大学生、



〈地域安全マップづくり〉警察とも連携して一緒に巡り、校外の安全な生活の仕方について学んだ。さらには、危険を感じた時や困った時には「110番のいえ」に助けを求める練習を行った。

イ交通安全教室・自転車運転免許証

交通事故防止のために、交通教室を実施し、ルールを守って安全に歩行したり自転車に乗ったりすることを学習した。4年生以上の児童には学科試験と

実技試験を学ばせ、自転車運転免許証を取得させる取組をした。1年から3年生は安全な歩行の仕方や自転車の乗り方を学んだ。



〈自転車運転免許証の取組〉

ウ体験学習の重視

危険個所のフィールドワーク、災害の聞き取りや現地調査、防災ベストの作製など、体験を通し防災について考えたり感じたりする学習を各学年で取り入れた。水害や土砂災害など地域を素材にした教材を開発し、児童が身近なこととしてとらえられるように工夫した。

(2) 安心して安全な環境をつくること

①人を大切にする集団づくりを進める

ア異年齢集団活動

6年生をリーダーに異年齢集団で「なかよし班」をつくり、遊びや給食交流、縄跳び大会、全校ウォークラリー等を行い、児童同士の理解を深め仲間づくりを進めることを目的に取り組んでいる。車いすを押してあげるなどのやさしい関わりが広がってきている。

イ人権旬間の取組

年間2回の旬間を設け、各学年で人権をテーマにした取組を進めている。互いの違いを認め、よさに気付くことや、よりよい学級づくりのために学級の問題点を考えることなど取組を進め、全校でいじめについて考える「いじめ防止フォーラム」とも連動させている。

②学校内外の環境の安全性を向上させる

ア通学路の検討



〈学校安全対策会議〉

学校安全対策委員会を中心に、通学路の安全確認を行い、問題の個所について委員会でも共有するとともに、対策と対応を検討し、自治会と一緒に府や市に

要望するなど改善に努めている。

イ校内の安全点検の実施

遊具、運動場、校舎内の施設設備については、教師の複数体制での点検に加え、児童会やPTAも点検活動を行っている。子どもや親の目線で児童の環境を見つめ、より安全な環境整備を行っている。

③PTA、地域住民、各種団体と連携を強化する。

アヘルメット着用の取組

PTAが中心となりヘルメットの着用を呼びかけている。取組を始めてから所持率63%まで上がってきた。購入の費用負担が生じるため、一気に所持率は上がらないが、安全への理解を求めながら、少しずつ増えてきている。

イ見守り隊の協力

登下校時や放課後等校外での安全を見守る取組として「こども110番のいえ」の取組を自治会と協働して行った。作成したス



〈地域見守り活動〉

テッカーを貼ってもらい、子どもが助けを求められる安全な場所として協力をお願いした。現在100件を超える家が協力いただいている。また、自転車や自動車につける「I（あい）ちゃんパトロール隊」の普及も図り多くの家庭に広がっている。

ウ警察、消防署、ゲストティチャー授業

「交通安全教室」「避難訓練」「防災教育」等に警察や消防署などの各種団体、地域の方を講師に招き学習を進めた。専門的な観点からの講話や訓練、アドバイスをしていただき貴重な体験の場となっている。教職員への研修もしていただいている。

エ広報活動

学校だより、保健だより等に安心安全に関する記事を掲載した。新たに「ISSニュース」を月一回発行し、保護者や地域住民に取組の理解と協力を求めた。



〈ISS ニュース〉

5取組の成果

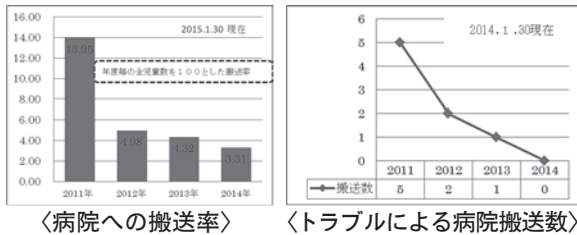
(1) ルールの定着・自主性が高まったこと

「下駄箱のくつそろえ」や「廊下歩行のしかた」「チャイムを守る」等、学校生活の基本となることを目標にして、一週間を単位にして徹底して取り組んだ。教職員の指導と児童会の取組を一致させ、全員ができるように粘り強く取り組んだ。こうした結果、ルール遵守の意識が広がり、友達への配慮も見られるようになってきた。一人一人の行動に荒さがなくなり学校全体に落ち着きが見られるようになってきた。

こうした変化の中で、児童委員会の活動が活発に

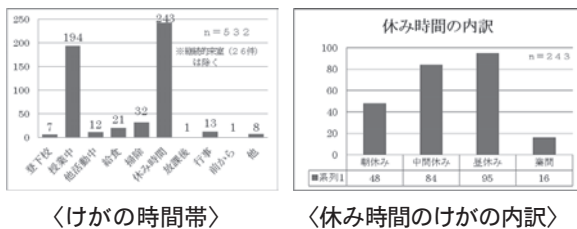
なってきたり、学習に意欲的に取り組めるようになってきたりして、学校生活の中に児童の自主的な行動が広がってきた。

(2) 学校内外のけがが減少したこと



左上のグラフは、けがをしたときの病院への搬送率である。病院へ行く割合が年々減少してきたのが分かる。また右上のグラフは、児童同士のトラブルによる病院への搬送件数である。2014年度はゼロ件、今年度もゼロを更新中でトラブル自体がなくなってきている。また、交通事故の件数も、I S Sに取り組んでからは起こっていない。取組により安全の知識と行動力が児童に定着してきていることが伺える。

(3) 教職員集団の協働体制が向上したこと



上左のグラフに見られるように、学校でのけがは休み時間が圧倒的に多い。重視したのは目の行き届かない朝休みである。朝休みの時間帯は子ども同士のトラブル、不用意なけが、家庭から引きずる精神的な不安など問題が発生しやすい。その時間を教職員がしっかりとサポートすることで、落ち着いて一日のスタートを切れるようになってきた。教職員は、朝から全校児童と関わる中で、子どもの変化や特性に気づきサポートすることや、問題や情報をキャッチし、素早く問題解決に至るための手順などを実践の中で学んでいった。

月曜日と金曜日の放課後には終礼を持ち、児童の課題、課題解決の方針等を確認し、全教職員が同じ基準で指導に当たった。職員室では児童の状況が絶えず話題になるなど、危機への意識と対応力の高い教職員体制が整ってきた。

(4) P T A ・地域住民との連携が進んだこと

「ヘルメット着用」「通学路の安全」「安全マップ作り」「いじめ防止フォーラム」等、数多くの取組をP T A ・地域の方と一緒に取り組んできた。取組の内容は「学校だより」や「I S Sニュース」を通して全町民に知

らせた。新聞に掲載されることも多く、手紙や電話で感想や励ましをいただくこともある。多くの方と連携・協働を重ねる中で、建設的な提案や要望もいただき新たな取組への意欲にもつながっている。地域での子どもの様子や危険箇所等の情報も地域の方から寄せられ、迅速に危険回避し安全を確保することに有効である。このように、温かく協力的に学校を支援していただいていることはとてもありがたくうれしいことである。

6 終わりに

安心安全を学校教育の基盤に位置づけ、その上に教育活動を展開し、信頼される学校をつくりたいという思いからの出発であったが、3年間で子どもを守る環境が大きく前進し、セーフティネットが広がってきた。何よりもうれしいのは、子どもたちの意識や行動が大きく変化し、いじめはもちろんのこと、けがや事故、友達とのトラブルといったことが少なくなり、互いを認め合いながら落ち着いた学校生活が送れるようになってきたことである。

今年の4月、下校途中に児童が用水路に転落する事故があり、一緒にいた児童が「こども110番のいえ」に駆け込み救助してもらったということがあった。地域安全マップの取組で「110番のいえ」に助けを求める練習をしたことが現実に生きた形となった。

本校は10月にインターナショナルセーフスクールとして認証された。安全への教育と環境づくりの充実、今後一層学校教育に求められると思う。I S Sに認証されたことを機に一層安心安全で信頼される学校づくりを保護者や地域の方とともに進めていきたい。

職員の意欲と授業力を高める校長の学校経営

～過小規模校での地域と連携する学校づくりの実践を通して～

岡山県高梁市立津川小学校

校長 川上はる江

I 問題の所在と研究の目的

岡山県下には、教頭、事務職員、養護教諭等の配置がなく、職員数も数名の過小規模校がある。前任の小学校は職員5名、うち2人は臨時的任用職員であった。過小規模校では、校務分掌の多さから日々の授業と実務をこなすことで職員は疲弊してしまう。また、授業公開をしても変則複式学級のため参加者が少なく職員の意欲もなえてくる。授業力を上げるための出張さえ、悉皆出張に出る回数が多いため、思うように参加できない。実際、赴任直後「校長先生、うちのように児童の少ない学校にはだれも授業を見に来ませんよ。」という声が職員から聞こえてきた。

このような状況下にある過小規模校で、職員の意欲を引き出し、授業力を上げ、特色ある学校経営をするために、校長としてどのようにマネジメントを工夫すればよいか、平成24～25年度の実践を通して研究する。そのために、以下の仮説を設定した。

- ①職員の意欲を高めるために、学校経営計画の作成に全職員が参画できるようにしてはどうか。
- ②職員の授業力を高めるために、職員が授業を改善したくなるような研修環境を整えてはどうか。
- ③人手不足を解消するために、地域の人々の参画を進めてはどうか。

これらの仮説の有効性を、職員の記述や言動、授業の変化から検証する。また、児童の学力、体力などの調査結果や児童の発言や文章からも検証する。

II 研究の内容

1 職員の意欲を引き出すための学校経営計画の作成

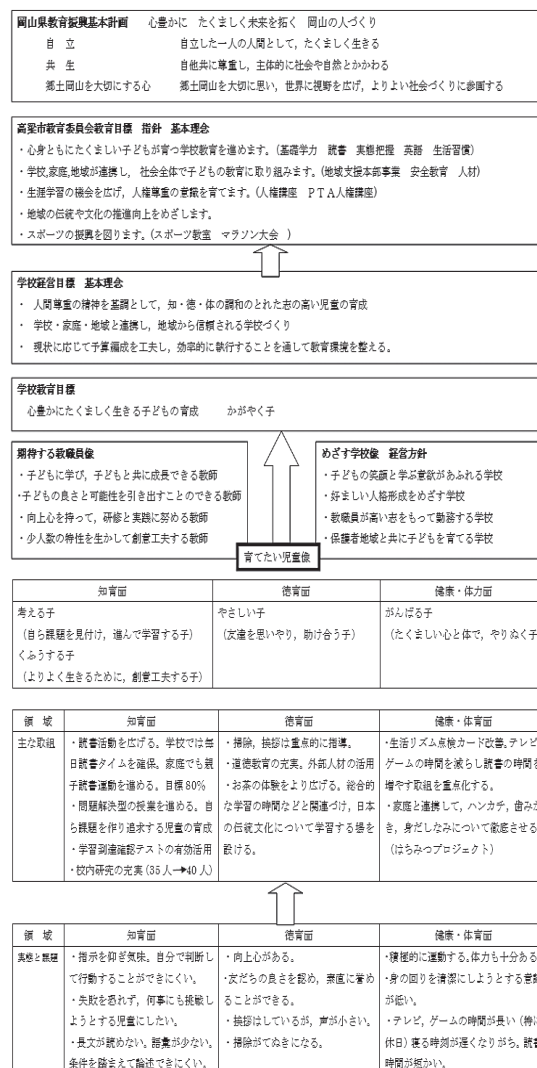
職員の意欲を引き出すためには、職員一人一人が学校経営への参画意識を高めることが大切である。そのためには学校経営計画作成時がチャンスである。全職員参加の下に、めざす児童像、学校教育目標を話し合っ

- 1) 教職は未来を拓く子供の成長に関わる素晴らしい仕事、2) 学校の使命は学力を付けることであり、問題解決の鍵は授業、3) 立志が重要、4) 国の動向や県

の動向、の4点である。

その後、岡山県教育振興基本計画や高梁市の教育目標を記述したワークシート(図1)を利用しながら、児童の実態を話し合い、課題と考えられる点について具体的な改善策を決めた。また、児童の実態を協議する時は、保護者や評価委員会による教育診断のアンケート結果とその分析結果を取り入れ、職員だけの分析にならないように配慮した。

図1 学校教育目標作成のためのワークシート



このワークシートの良さは、次の3点である。

- ①岡山県教育振興基本計画の要点や高梁市の教育目標を記し、学校教育目標の具現化がより大きな目標につながることを意識して考えられること。
- ②学校の教育活動を知・徳・体の調和のとれた活動にするために、児童の実態やすべての教育活動を知・徳・体の側面から整理できるように工夫したこと。
- ③目指す児童像だけでなく、目指す教師像も考えられること。

最初に各自記入し、その後グループで、最後に全体で話し合った。話し合う際には、時間をかけて、取組の具体まで決めた。遠回りでも具体策まで話をつめることで職員は何をどのようにするのか見通しをもつことができた。

2 授業力向上への取組

(1) 外部への発信を－公開授業研究会の工夫

過小規模のため、希望する出張には出にくい、公開授業研究会にも外部参加者が少ないという実態があった。そこで、出にくいのであれば来てもらって意見をいただき、研修を深めようと提案した。「発信が合言葉ですね。」という職員とともに、学外の教師が参加したくなる公開授業研究会の内容や方法を工夫した。

平成24年度には「教科指導の匠」（岡山県の事業）を活用し、3回の公開授業研究会を実施した。その際、常に国語科の基礎講座（ミニ講義）を入れ、新採用教師が興味をもって参加できるようにした。また、指導案を作成したり発問を考えたりする演習を取り入れた。その結果、3回の研究会に市内の16校から44名の参加者があり、職員の表情が生き生きとしてきた。教材研究にも拍車がかかり、職員室において授業の話題が多くなった。

平成25年度は理科の授業力を伸ばすことを目的に校内研究を実施した。その際、理科教育法を指導している大学教授を招聘し、4回公開授業研究会を行った。うち3回は理科基礎実験講座を実施し、小・中学校の教師がうまくいかないと感じている実験を取り上げ、市全体の教師の実験技能が向上する研究会になるように工夫した。その結果、市内の多くの教師が参加してくれるようになった。

研究授業の内容を工夫したことで、外部からの参加者が増え、授業研究への意欲が高まっていった（表1）。

表1 実施した公開校内研究会と参加者数

	内 容	人数		内 容	人数
H24 6月	ミニ講義 授業公開	17	H25 6月	基礎実験講座 授業説明	18
H24 8月	ミニ講義 演習(指導案)	18	H25 7月	基礎実験講座 授業公開	17
H24 10月	ミニ講義 授業公開	9	H25 8月	基礎実験講座 指導案説明	16
			H25 10月	授業公開 研究協議	5

(2) 問題解決型授業への改善を

授業はそつなく流れており、一定レベルは維持できているが、問題解決型の授業とは言いがたかった。

そこで、学習指導要領総則や改正された学校教育法などを校内研修の場で読み合いながら、自ら学ぶ授業の必要性について研修した。また、授業の基本的なスタイルについて協議し、技能習熟に力を入れる授業から思考力育成に重点をおいた問題解決型の授業（課題を把握する、見通しをもつ、自力解決、集団解決、まとめる、振り返る）に改善することを提起した。

教師にとって新たな目標ができたことで、日々の授業が活発に行われ、職員室での会話に変化が出てきた。

(3) 理科室の整備と校長による提案授業

過去4年間の学力・学習状況調査の結果から、本校児童は、理科の基礎基本と実験事実をもとに考察することが課題であることが明らかとなった（岡山県学力・学習状況調査では、過去2年間理科が低く、10ポイント余り県平均を下回った）。そこで、理科の基礎基本の習得と科学的な思考力を向上させるために、理科の授業とノート指導を改善することを提起した。

理科の授業改善のために、まず、理科室の環境整備を進めた。理科室や準備室がほとんど使われることがなく、備品も古かった。そこで、教育委員会に働きかけ、理科教育振興法の予算をつけてもらった。必要な最新の備品や器具を整え、実験がしやすい環境を作り、教師が理科室を使いたくなるように整備した。

また、校長が授業に入ってTTで授業を行い、改善のきっかけを提案した。言葉で説明するより、授業を見てもらう方が早いと考えたからである。理科では導入事象から課題を



写真1 理科実験をする児童

つくり、実験方法を考え、実験するという問題解決の過程を意識した授業や構造的な板書を提案した（写真1）。授業後、気付いた点を自由に述べてもらい、教師自らが授業のポイントを理解できるように工夫した。

授業後の分析・協議は授業改善を大きく推進した。初めて理科の指導案を本格的に書き、外部へ向けて授業公開をする教師もいたが、教材研究、予備実験を全員ですることを楽しみながら研究できた。

一方、教師の中には授業において児童の達成状況を見取ることが難しい実態があったので、授業の中で形成的評価を行い、つまづいている児童へ適切な支援ができるようにルーブリック（評価基準表）をつくることを提起した。規準を基にABC評価にあたる児童の姿を基準に表し、評価の焦点化、明確化、具体化を進めた。授業の中で児童の姿を確実に見取り、適切に支援することができるので教師の授業力の向上に大変効果があった。児童を見取る細やかなフィルターは他の教科へも広がった。

3 地域の教育力を生かす取組

(1) 地域と共に創る教育活動

過小規模の学校の大きな悩みは人手不足である。校長は、教頭職、事務職の仕事もしなくてはならなかったし、教諭も2人ですべての校務分掌や学校行事を動かしていた。そのため、学習発表会は数年前から多目的ホールで行っていた。それに対し地域の方々から「足の悪い者は見に行けない」「狭くて入れない」ため、体育館でやってほしいと要望があった。しかし、職員からは「人数不足で無理」という返事であった。

そこで、人手が足りないのなら、地域の方の協力を仰ごうと考えた。そして、協力していただくだけではなく、主体的に取り組んでもらい、共に教育活動を創るという立場になれるよう、お互いに課題を出し合い、年間を見通した計画を立てることにした。このようにして、学校支援地域本部事業の活性化を図った。

① 地域からの要望を実現した銭太鼓教室

学校支援地域本部の会議の中で、地域の方から銭太鼓を教えたいという声が上がった。学校で協議し、ゆとりの時間を使って月に1回、年間9回程度の実施する計画を立て、地域の方2人をGTに迎え実施した。

② 地域から学んだ栽培活動

栽培のポイントを地域の方から取材した後、夏野菜や大豆を栽培した。地域の方が6人参加して下さり、一緒に土を作ったり、苗を植えたり、支柱を立てたりと一連の活動を行った。収穫した野菜で、夏はサラダ

パーティー、冬は大根パーティーを行い、地域の方をもてなした。また、地域の方に教えていただき大豆から豆腐を作り、お世話になった方々に差し上げた。

④ 地域と共に創る学習発表会

上記の過程を経て、学習発表会を開く時、地域の協力を仰いだところ、準備の段階から本番まで4回、28人が集まり、一緒に体育館での学習発表会を開催した。100余名の方が来校され、照明係の仕事、後片付けまで協力してもらった。全員合唱では地域の方30名余の即席合唱団が舞台上がり、大正琴の参加もあり、共に学習発表会を創ることができた。

④ 地域と共に創るマラソン大会

校内マラソン大会も地域の方の力を借りて行った（写真2）。児童のために20人余の方が参加され、ポイント係、交通整理、応援をしてくださった。地域と学校が一体となり実施できた。声援が多く、記録も向上した。



写真2 地域と共にマラソン大会

(2) 教育活動の発信—いきいきオープンスクール

11月の岡山県教育週間に合わせて、2日間学校をオープンにして地域の方に授業参観をしてもらった。当初職員からは「全校6人しかいないのに、来てくれるんですね」という声が出ていた。しかし、校長としては、学校を開き、地域へ進んで働きかけをしているので必ず成功するという思いをもった。

職員の心配をよそに、当日は朝の活動から終わりの会まで地域の多くの方が来てくださった。2日間で49人の参観があり、教師にも児童にも良い刺激となった。廊下から多くの参観者が出て「まるで附属小学校の授業みたいですよ。」との声も聞かれた。児童も地域の方に教えながら理科実験を一緒に行ったり、パソコンを使って発表する姿を見てもらったりして嬉しそうだった。教師の表情は生き生きとしており、自ら参加型の授業をいくつか用意するなど、意欲も高まり教材研究にも熱が入った。アンケートで感想をまとめ、学校経営にも生かせるようにしたが、帰りには多くの方が校長室に立ち寄り、感想を述べてくださった。

III 成果と考察

(1) 成果

- ・職員意識が変わり、授業改善の取組が熱心になった。職員室で授業に関する話題が増えた。（資料2）
- ・平成26年度岡山県学力・学習状況調査では、各教

科とも県の平均を上回った。10ポイント以上上回ったのは、社会、算数、理科。理科は20ポイント向上した。

- ・徳育については、児童の意識に変化が見られ、自分のことだけ考えるのではなく、大きな視野で物事を考えたり、人間として成長しようと考えたりするようになってきていることが伺えた。また、地域への思いが深くなった。(資料1)

- ・体育については、平成25年度の新体力テストの結果によると、どの学年のどの項目も全国平均を上回るか平均並みであった。また、市内水泳記録会、陸上記録会でも自己ベストを更新し、好成績を残した。

資料1 学校だより抜粋 児童の意識の変容

1月、6年生教室で道徳の授業をしました。「君たちも学校のことを思って頑張ったという経験がありますか。」と尋ねたところ、次のような答えが返ってきました。「ぼくは、作品を描くとき、『ぼくたちの学校は小さいけれど、頑張ればこんなにできるんだという姿を見てほしい。新聞やテレビに〇〇小学校という名前が出れば、地域の人がとても喜んでくれる。元気が出ると言ってくれる』と思って、細かいところまで丁寧に描いたり色を塗ったりしました。よい賞がとれて、地域の人に元気を与えることができ嬉しかったです。」「ぼくは、陸上記録会や水泳記録会に出たとき、『ぼくたちが頑張って〇〇小学校という名前が新聞に出ると、地域みんなが元気になる。』と思って一生懸命頑張りました。入賞したときは地域みんなが喜んでくださって嬉しかったです。」(略)

資料2 教師自己目標シートより抜粋 中間面談

- ・国語科、算数科、理科等、各教科の授業方法について指導助言していただきながら「考える力」を育てる授業改善に取り組んだ。子供たちから、授業後に「今日はかなり頭を使った」という感想も聞かれ、少しずつ考える力を育む授業スタイルになっているのではないかと思う。
- ・学力テストの過去問を行い、分析したことで、課題を明らかにすることができ、ポイントを絞った指導をすることができた。読解力テスト、学習到達確認テストをさらに活かして指導していきたい。

(2) 考察

2年間(平成24～25年)の学校経営の中で、教師の授業改善への意欲は高まり、児童の学習意欲も向上

した。結果として、学力・学習状況調査や新体力テストの成績は上昇した。なかでも理科の正答率は20ポイント余の向上となり、授業の力を改めて考えさせられた。

そして、学校経営で大切なことは、第一に、職員の意欲と能力を引き出し、志を高めることである。そのために、経営計画作成時の協議、校内研究・研修の工夫、自己目標シートを活用しての面談等、機会を捉えて、校長としての思いを伝え、各職員が自身を見つめ、目標を持ち、成果を客観的データで確認できるようにすることである。

第二に、授業改善を進めるために、児童の学力を向上させたいという課題意識を全職員で共有し、校内研究・研修に校外からの参加者を引き入れ、授業環境を整備するといった、授業改善したくなるような状況をつくり出すことである。

第三に、学校だけではできないことを地域の教育力を生かすことで実現できるように、地域の方の主体的な参加をつくり出すことである。

IV あとがき

本研究を通して、どのように厳しい条件下でも、職員が志を高く持てるように士気の高揚を図り、参画意識を高めることができれば、知恵を出し合い協力しながら創造的な仕事ができることが分かった。学校現場は多忙であるからこそ客観的に課題を分析し、いかに克服するか、焦点を絞って考えることが必要である。

また、学力の向上が声高に養成される今日、いきおい知識偏重に偏りがちになる。しかし、学力向上を目指すのであれば、知だけではなく、徳・体もバランスよく育てていくことが求められる。こうした視点で、職員の育成評価システムを適切に働かせれば、職員の授業観も学力観も評価観も変えていくことができる。校長が教育本来の目的と理念を意識した目標を明確に示し、教育活動の仕組みを整え、意欲を引き出し、育成に力を注ぐことが大切である。これは、過小規模校だけではなく、全ての学校における学校経営の基礎基本であろう。

参考文献

- ・小学校学習指導要領解説—総則編、東洋館出版社 2008
- ・光行淳子他、教育小六法、学陽書房 2009
- ・遠藤勇次、教学の本質、備中無適会 1996

主体的に考えて動く子供の育成を目指して

～「逆算」を合い言葉として～

長崎県長崎市立畝刈小学校

教諭 井手 亜弓

1 はじめに

本校では、指導法改善プロジェクトと称し、校長・副校長・教頭・主幹教諭の先生方から御指導を受けながら、経験年数や年齢の近い先生方と日々の授業や学級経営についての実践やその成果・課題について情報交換を行う機会を設けていただいています。

プロジェクトに参加して3年目を迎えた今年度の取組の1つに、各自、指導における自分自身の課題や目標を明確にし、具体的な実践を通して、よりよい指導のあり方を検証する（課題検証研修）というものがあります。

本論文では、私が今年度の研修課題として設定した、「主体的に考えて動く子供の育成」を目指して行っている「逆算」を合い言葉とした子供たちとの日々の取組について報告させていただきます。

2 課題設定の理由

「逆算」を合い言葉にした取組をするに至ったのは、まず私自身の意識の変化が大きく影響しています。

教職1年目、初任者研修で教室を空けがちだった私が当時の校長先生からいただいた言葉の中に「不在の在」というものがありました。以来、教師がいなくても、子供たちが主体的に知恵を出し合い、互いに協力しながら正しいことを考えて動ける学級、これが私の目指す学級経営の根本にあります。

ですが、実際の自分の指導を振り返ってみると、子供たちに極力失敗をさせまいという思いの強さから、活動を始める前に事細かに指示を与えていました。また、活動中も失敗しそうな場面になると、子供たちに考えさせるよりも先に、必要以上に介入していました。今考えると、子供が教師の指示通りに動くことで得られた結果を子供たちの成功だと誤った捉え方をしていたのだと思います。また、その傾向は、教職経験が浅いとき程、強かったように思います。

このように、教師の細かい指示のもとで動く場合の子供たちは、

- 失敗することがほとんどない。

- 効率的に活動ができる（時間短縮になる）。

- トラブルになりにくい。

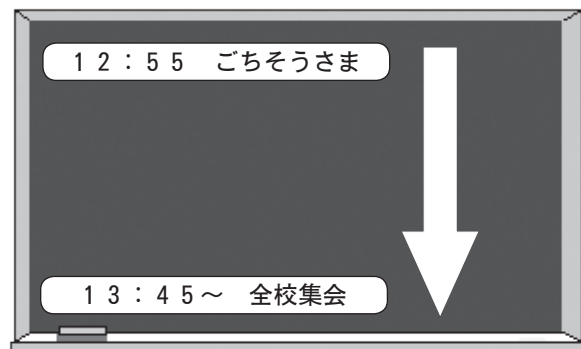
そのため、子供にとっても私たち教師にとっても、有効な指導のように感じられます。しかし、裏を返すと、この場合の主体は教師であるため、子供たちは

- 自分で考える必要がない。

- 指示を待ちさえすればいい。

そのため、教師がいる場面、指示が与えられる場面では動くことができても、それ以外の場面に遭遇した際に指示を待つだけで動けない状況が生まれ、活動に支障をきたすという問題が浮かび上がってきました。

教師が細かく指示を出しすぎることの弊害を感じていた頃、子供たちが別の活動をしている間に、次の活動の始まりと終わりの時刻だけを板書したことがありました。ただ、この時点では意図的なものではなく、単純に必要な事柄がまだ自分の中で整理できていなかったからでした。



すると、板書を目にした子供たちから

- 給食の片付けの必要性
- 用便・給水の必要性
- 教室を出発する時刻
- 昼休みの遊びを切り上げる時刻

などといった、板書では省略していた、食後から全校集会開始までに必要な事柄やポイントとなる時刻に関する声が挙がりました。教師が細かく言わなくても、子供たちはこれまでの活動の経験をもとに、自分たちで考えて動くことができるということに改めて気づかされた一件でした。また実際に、子供たちから挙げら

れた事柄の確認のみを行い、あとはすべて任せてみたところ、お互いに声をかけ合いながら行動し、集会の開始時刻には当時担任していた4年生のクラスの全員が整列を完了することができていました。私は、子供たちが主体的に考えて動く姿を目の当たりにし、これまでの自身の指導の在り方を深く反省しました。何よりも、自分が目指すところを明確にイメージできた出来事でした。

そして、最終的に目指す姿に向かう過程を今の自分まで遡って考えることを日常的に行わせることは、主体的に考えて動く子供の育成につながることを期待できると考えるようになりました。

3 指導の実際

(1) 目標・方針の共有化

今年度の4月、担任する5年生の子供たちと学級目標を決定する場面において、まず子供たちには、目標を立てるだけでは不十分であること、達成するためには必要な条件がいくつもあることについて話をしました。

次に、自分が目指すゴールの姿を最初にイメージして、そこに向かうために必要な事柄や動きを順に遡って考えることはとても大事なことであり、それを「逆算」と言うこと、またこの場合、主体は子供たち自身になることを伝えました。同時に、ゴールに向けて必要な事柄を事細かに教師が提示していく「逆算」とは反対の方法もあるということについても伝えました。両者のメリット・デメリットについても子供たちと一緒に考えた上で、この1年間の目標をどのようなものにするのか、そして、どのような姿勢で目標達成に向かっていくのかについて話し合いを重ねました。その結果、子供たちからは「自分たちでがんばりたい。」「先生がいなくてもできるようにする。」という前向きな思いが多く聞かれ、最終的に「逆算」を合い言葉に自分たちで考えて動くということに年間通して取り組んでいくことを共有化しました。

(2) 基本的な考え方

指導においては、学習・生活、学校生活全般において、次に挙げる3つの段階を念頭に置き、指導に当たりました。

①教師が必要な事柄を示す。

逆算すると成功することを多く実感させる。

②教師のリードのもと、必要な事柄を子供たちと一緒に考える。

※成功は褒める・失敗は改善策を考える

③子供が自主的に考えて動く。

教師は最終的なゴールの姿や時刻を明確に示すだけで、細かな指示はしない。

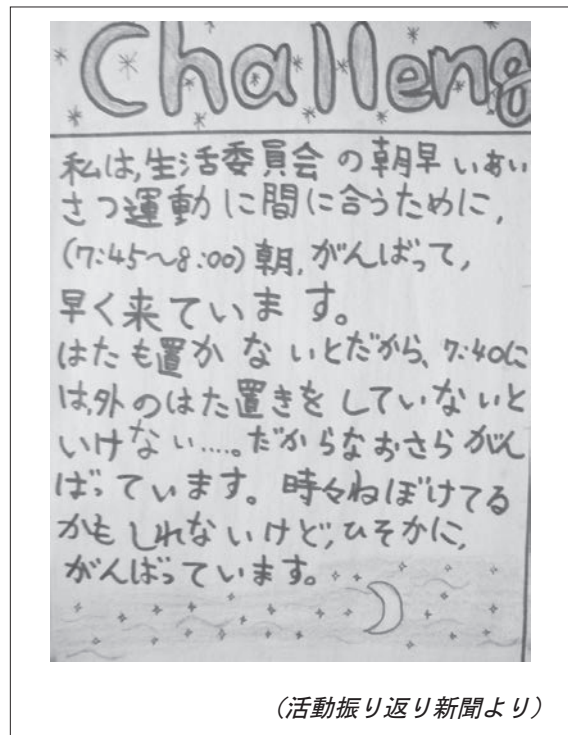
考える主体は子供。

この指導をするにあたって、特に3つのことを意識しました。

1つは、どの段階においても、最終的なゴールの姿や時刻を明確に示すということです。これに関しては、学習・生活あらゆる場面で、とにかく徹底して行い続けました。この取組においては、教師が最終的なゴールの姿を明確に示すことが不可欠だからです。

2つ目が、こまめに取組の様子やその成果及び課題を振り返る機会を設けたことです。成果が見られた際には、結果だけを褒めるのではなく、その間にあった「逆算」の過程をしっかりと褒めることで、「逆算」をしたから成功したという意識を高められるようにしました。

これは、委員会の取組状況についての振り返り新聞です。時刻を「逆算」していることが分かります。



反対に、失敗した際には、できなかったという事実ではなく、「逆算」の段階に目を向けさせることで、ゴールに向かう過程における課題を的確に捉え、改善策を考えられるようにしました。

最後の1つが、3つの段階は、順番にはこだわらず、学習や活動の内容に応じて、子供たちの実態や場面に

合った段階を選ぶようにしたことです。目標はあまりに容易すぎると成就感が得られません。逆に難しすぎると、今度はモチベーションの低下につながります。そこで、子供の実態を見ながら、目標設定が適切なものであるかを見極めて段階の選択を行うことを心掛けました。

(3) 「逆算」で動く子供たち

取組を始めたその週のうちには、子供たちの姿に大きな変容が見られ始めました。教師が「今日は13時45分から集会があります。」と伝えただけで、「逆算！」や「そのためには・・・。」といった声が自然と挙がるようになったのです。その他にも、朝の読書や掃除の始まりや終わり、移動教室に向かう前の整列等、開始時刻に間に合わせるために必要な事柄を遡って考える姿は日に日に増えていきました。

先生が言った片付けの時間に間に合わせるために、みんなで協力して、だれかがほうれん草を切っているときに、卵のからをむいたり、ゆでているときもちゃんと1人は（火の側に）いてという風に同時進行をやっていたので、いいなと思いました。
(調理実習の振り返りより)

今日、友だちと遊ぶ約束をしていたけど、おくれちゃいました。〇〇ちゃんにずっと待っていてくれたから、悪かったです。

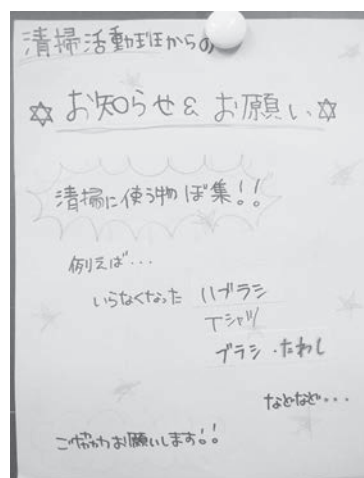
今度遊ぶときは、何時に家を出たらいいか逆算して考えないといけないなと思いました。

(ひとこと日記より)

このように、時刻というのは、誰にとっても共通している明確なゴールです。また、「間に合う」「遅れる」というように、自分の成果も非常に明確です。そのため、子供たちにとっても見通しを立てて考えたり実際に動いたりしやすかったのではないかと考えます。

さらに、ゴールの姿から遡って考えるという意識は、時刻以外の場面にも広がっていきました。例えば、国語の授業で、「次の時間は意味調べをします。」と、前もって伝えておくと、辞書が必要になることを教師が言わなくても、「先生、辞書ありますか？」と尋ねてきたり、さらには、「意味調べをするためには・・・逆算して考えよう」や「国語辞典を持って来よう」と連絡黒板に書いたり、帰りの会等を活用して学級全体に呼びかけたりする児童も出てくるようになりました。

これは、「大掃除をする」ということを伝えた後に、子供たちが自主的に作成・掲示したポスターと、掃除の終了時刻を意識して反省会をしている様子です。



(掃除の反省会)

この場面も「大掃除がある」「終了時刻は〇時」と、ゴールが非常に明確であるため、必要な事柄が考えやすかったのだと思います。

はじめは、プリントに「たっぷり」と書いてあるから、鍋に水をたっぷり入れたけど、火をつける前に、ふっとうしたらどうなるか逆算して、水を減らしました。

うまく行ってよかったです。

(調理実習の振り返りより)

最近忘れ物をしなくなりました。それは、忘れ物をしないためには・・・と逆算して考えて、連絡帳でランドセルに入れたら1つずつ丸をつけてチェックをするようになったからです。

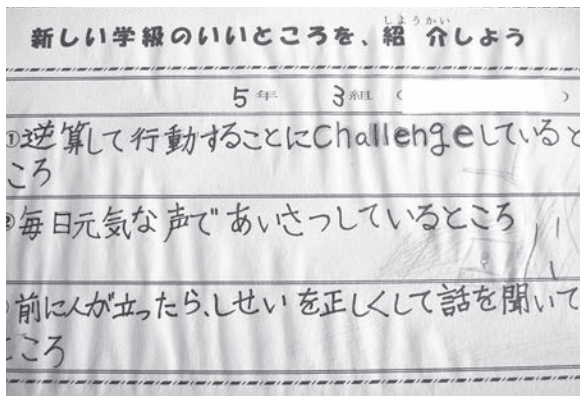
これからは忘れ物をしません!!

(ひとこと日記より)

他にも、少しでも「逆算」を意識している言動が見

られた際には、その子自身の努力を褒め、価値を自覚できるようにしました。また、学級全体にも紹介しました。価値を共有化することで、本人だけでなく周りの子供たちの意欲も高めることができました。やり方が分からない子にとっては、手本にもなったようです。

また、本校では、校長室の前に「よかった掲示板」というものが設置されています。ここには、校長先生から定期的に出されるお題に対する子供たちの思いや考えを書いたものが、毎回各クラス数名ずつ掲示されます。本年度第1回目のお題は「学級のいいところを紹介しよう」でした。



まだ「逆算」を意識した取組を始めて間もない頃に書いたものですが、関連する事柄を学級の自慢の1つに挙げた児童が31名中23名いました。子供たちの意欲や、達成できたときの満足度の高さが伺えます。

ここまで述べてきましたように、「逆算」という言葉をキーワードとして活動を仕組むことで、子供たちが自分で考えて動くことが増えたと感じています。もちろんその中には失敗も多くあります。ですが、失敗した場合も、何がよくなかったのか原因をしっかりと考え、さらには具体的な改善策についても意識が向くようになってきています。

しかし、まだ課題もあります。その1つが、意識や取組状況に関する個人差が大きいという点です。特にゴールまでの期間が長いものに関してその差は大きい傾向にあるようです。ゴールまでの期間が長いということは、つまりゴールに向かう過程に行うべき事柄が多くあるということだからです。

また、活動内容が多数に及ぶ場合についても似たような傾向にあります。これについては、やるべきことがいくつもある際に、優先順位をつけて取り組む力がまだ不十分だからと考えます。

そこで、活動内容が長期または多岐に渡り、子供が自力で見通しをもって計画を立てることが難しいものに関しては、段階的に取組及び達成の状況を確認する

ことが必要となります。

夏休みはもう目の前!! 1学期ラストサポート

Challengeリスト

お見事!合格	
玉どめ&玉結び テスト	😊
雨の俳句&小物作品カード	😊
漢スキふせんゼロ	😊
竹取物語	😞
平家物語	😊
徒然草	😞
奥の細道	😊
4作品連続	😊
健康カード提出	😊
小数のわり算の筆算で、ドリル420を全問正解するまでする。	😊

自分にきびしいめあてを立てて Challenge しました!

個々の実態や活動の内容にもよりますが、このように、すべきことをリスト化し、視覚的に状況を確認することは、子供自身が見通しをもつ上で比較的效果が高いと感じています。

4 終わりに

今回、指導法の改善をテーマとしたこの課題に取り組んだことで自分自身の指導の在り方を振り返り、教師として自分が目指す姿や、子供たちに身につけさせたい力について改めて考えることができました。

まだまだ反省することの方が多い毎日ですが、子供たちが目標に向かって生き生きと活動している姿が何よりの励みです。これからも、より効果的な指導法を身につけるために、実践と努力を積み重ねていきたいと思えます。

学校・家庭・地域で共に育む 読書教育の実践

北海道札幌市立清田緑小学校

校長 中秋 勝広

1. はじめに

本校は開校当初より開放図書館が開設されており、ボランティアの協力等を得て行われる「朝の読書」を始め様々な読書活動を進めてきている。その成果として児童全体の読書量が増加してきている。しかし、読書量の個人差が大きいことや学年が上がっても読書の幅が広がっていかないことが明らかになってきた。

そこで、子どもがより豊かな読書生活を送り、生涯にわたり学び続けようとする心を培う読書教育のさらなる推進に取り組んできた。

2. 読書教育の視点

本校は、学校課題である「一人一人を大切に作る学校～保護者・地域と共に育む(共育)」の重点として「読書教育の推進」に昨年度から取り組んでいる。

「共育」としての読書教育推進をするに当たり、これまで本校で行ってきた読書活動の改善と共に、学校から保護者・地域の方々への具体的発信を重視した。読書活動の改善としては、(1)「うちどく」(2)「読み聞かせ」(3)「ビブリオバトル」を中心に取り組んだ。

3. 具体的な読書活動の推進

上記3つの活動と他の様々な読書活動が相互に作用し合い、広がることでより充実した読書教育になると考え、その推進に当たった。

(1) うちどく(家庭での読書推進活動)

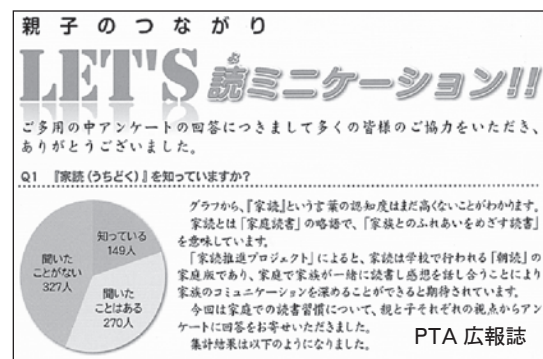
①保護者と共に

「うちどく」を推進していくためには、子どもだけではなく保護者にも読書に関する興味・関心を深めてもらう必要がある。本校では、昭和59年の開校当時から「親子で一緒に読む本」を購入し、全家庭に回覧してきたが、「うちどく」への意識は高まらず、家庭での読書に影響を及ぼすまでにはいかない状況であった。

そこで、まず「うちどく」への理解を得るために、次の2つの方策を試みた。

①「うちどくのスズメ」を学校便りにのせ、発信することで学校の取組を理解してもらう。

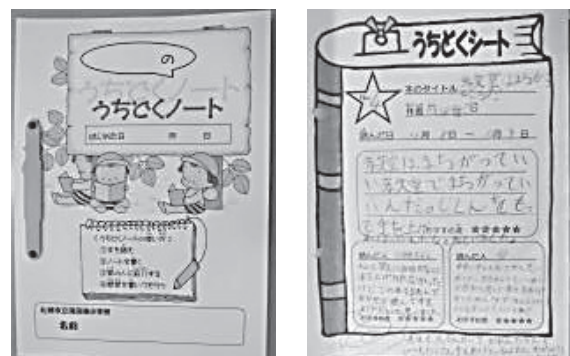
②保護者の読書に関する実態調査をし、PTA広報誌で「うちどくに関する特集」を取り上げる。



広報誌の取組により、多くの保護者に「うちどく」が意識されたため、子どもへの取組をさらに進めることにした。

②うちどくノートの活用

ある程度、「うちどく」の内容や効果が理解されたところで、『清田緑小学校うちどくノート』に全校児童で取り組むことにした。これは、家庭で自由に記入するノートだが、学級担任も目を通し、保護者の許可を得て校内に掲示することで意識化を図った。



また、記入するシートは、いつでも追加することができるよう工夫した。活用していく中で、家庭でコミュニケーションがとられていることが感じられた。

以下は、紹介したノートの一部抜粋である。

【とべバツタ】

- ・自分一人で、にげたりとんだのがすごかったです。(児童A)
- ・自分の力を信じ、チャレンジすることであたらしい自分を見つけて最後まであきらめずがんばったすがたがかっこいいです。(母)

【じっちょりんのあるくみち】

- ・この本は5年生の時にチャンプ本になった本です。私はこの色えんぴつで書いたような色が好きです。(児童B)
- ・じっちょりん、あたまいいね。(妹)
- ・コンクリートから生えている草をみたらじっちょりんを思い出してしまいそうだよ。(父)

(2) 読み聞かせ～地域と共に

本校の地域開放図書館は、開放司書と地域のボランティアによって支えられている。ボランティアの方々には、「朝の読み聞かせ」と年間計画に位置付いた『おはなしかい』で子どもたちに読み聞かせを続けてきている。

①朝の読み聞かせの改善

「朝の読み聞かせ」をボランティアの方々だけではなく、担任、養護教諭、栄養職員、事務職員等を含めた全教職員の協力を得て行うこととした。それによって、低学年中心であった「読み聞かせ」が、全校29学級で行えることになった。

また、立場や経験、年齢の違う読み手が本を選ぶことで、これまでよりも内容の幅が広がった。さらに、児童は、様々な方に「読み聞かせ」をしてもらうことで、同じ本であっても読み手によって伝わるものが違うという「読み手を通して本を読む」よさを知ることとなり、読書に興味を示す児童が増えてきた。

②全担任による『どリーミーの日』の取組

読書のよさを広めていくための『どリーミーの日』を設定することとした。

『どリーミー』とは、開放図書館「宝島」に住む鳥のキャラクターである。清田緑小の「みどり」と「夢」を連想してネーミングされた。

『どリーミーの日』には、学年内や他学年と担任が入れ替わって読み聞かせをする。この日には、決まって図書館の貸出が増えていることから、読み聞かせは子どもの本に対する興味関心を高めているといえる。



どリーミーの日 ICTを活用した読み聞かせ

③読み聞かせ学習会

読み聞かせをより充実させるため、保護者・ボランティアさん・教職員を対象に「読み聞かせ学習会」を行った。J P I C読み聞かせサポーター実践講座研修会の資料を活用し、小学校の読み聞かせの基本や選本を中心に実施した。

グループワークでは、実際に同じ本で互いに読み聞かせをし合うことで、読みの違いを感じとることができた。また、読み聞かせにおける注意点等も発表し合い、充実した学び合いにできた。



(3) ビブリオバトルの実践

ビブリオバトルは、バトラー（紹介者）が、勧めたい本を選び、決められた時間で紹介をする。

この活動は、一方的に紹介をするのではなく、聞く側の質問を受けたり、発表を聞いて読んでみたくなった本に投票してチャンプ本を決定したりするため相互のコミュニケーションがとれる。参加者は、読む・考える・書く・話す・聞く力をすべて使い、選んだ本のおもしろさのよりよい伝え方を考える。

ビブリオバトルの活動後は児童から「もう一度やりたい」「次はぜったい、チャンプ本に選ばれたい」という意欲的な発言が多く出てきている。

①児童委員会活動から全校に

26年度は、まず、図書委員会が休み時間にビブリ

オバトルを行い、参加した大勢の児童で本を楽しむことができた。



繰り返すほどの人気だった。

この図書委員会の活動は27年度も継続し、各学級での活動につながっている。

②大学生サークルによる体験学習を通して

児童だけではなく、保護者・地域にもこの活動のよさを知ってもらうために大学生にバトラーとなってもらい体験学習を行った。保護者・地域の参加者は初めての体験となる方も多く、実りある学習となった。また、積極的に質問したり自分の思いを大切に投票したりする姿から児童の育ちを見ることもできた。



体験学習後、ビブリオバトルを参観授業で実践し、保護者にも投票してもらうことで、親子で本について語り合うきっかけとした。保護者からは、「他の学年のビブリオバトルも見てみたい。」「子どもが、よく考え、楽しそうに参加している。」などの感想が寄せられた。

併せて、児童の意欲や関心が高まり、休み時間に自発的にビブリオバトルを行う児童がでるなど活動が広がりをみせた。

4. 読書指導の充実に向けて

(1) 親子で貸出し

児童への読書環境改善のため、貸出しは、開放図書館・児童図書委員会・司書教諭が以下のように可能な限り多くの時間帯に行っている。

○朝～様々な活動で休み時間に図書館に来られないことのある3年生以上を対象に貸出し

○中休み～本校で全員外遊びを奨励しているため、雨天や雪解け時期のみ貸出し

○昼休み・放課後～常に貸出し

○開放図書館臨時開館～開館日以外に参観日や地域行事の際に貸出し

これらの貸出し方法をとる中、全員外遊びと読書の両方を勧める『晴耕雨読』ならぬ『晴校雨読』（晴れの日には校庭で遊び、雨の日には図書館で本を読もう）が合い言葉となってきている。

また、参観日や学校と地域の連携事業の際などには、親子一緒に仲よく本を選ぶ姿を多く見ることができた。



中には、児童が小さい弟のために絵本を選んだり、お母さんにお菓子作りの本を借りてもらってにこにこしたりする姿、母親が児童に本を勧めている姿も見られている。

(2) 司書教諭の活用（図書館指導）

読書教育には、全教職員の共通理解が必要である。特に図書館利用の仕方やマナーについては「本を愛する心の育成を大切にする」ことを共通理解とし、低学年から指導したい。

そこで、図書館利用指導については、教育課程に位置付け、1年生から具体的な指導をしてきた。

その一つとして司書教諭が、低学年を中心に貸出し方法や本の選び方の授業を行い、きまりやマナーを身に付けるだけではなく、本を大切にしていくことや友だちと一緒に利用する楽しさについても学ぶ機会としている。



(3) コミュニケーションを深める

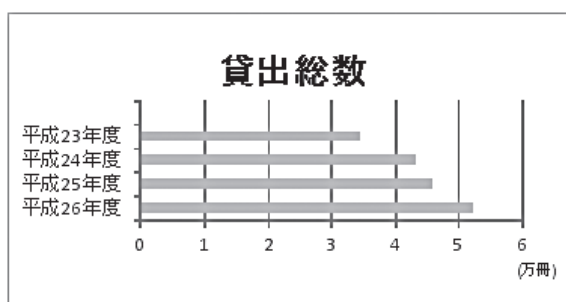
朝の読書や日常の読書指導に関しても教職員の共通理解が得られるように環境づくりの工夫を試みてきた。

一つ目は、職員室の一部に「おすすめ本」を年間を通して設置したこと。二つ目は、『どりーみーの日』の充実に向けて、学年の発達段階を考慮した「テーマ別のおすすめ本」コーナーを設置したことである。このことで、教職員が不安なく指導できるようになり、職員室で児童の読書についての会話が増えた。同時に、司書教諭と担任が読書や本を活用した授業に関して気軽に相談し合える関係づくりにも役立っている。

また、保護者には学校評価（保護者アンケート）に読書についての項目をつくり、「うちどく」を始め、児童の読書について自由に悩みを記入できるようにした。さらに、家庭での困り感を少しでも解消していくよう、学校便り等を活用し「うちどく」を進めていくアイデアなども発信してきている。

5. 成果と課題

以上のような取組を進めてきたことの成果として、まずあげられるのは読書量の増加である。



表からもわかるように、平成23年度と比較すると平成26年度の貸出し総数は1.5倍となり、5万冊を超えるようになった。一日当たりや一人当たりの貸出し数も同様に増加している。

また、貸出し数には表れない巡回図書や寄託図書、札幌市の図書館の本（ぶっくさあくる）等の読書を合わせるとさらに多くの本を読んでいることが分かった。様々な読書活動の工夫により、児童の読書に対する意欲や関心が高まったと考えられる。

次にあげられるのが、読書の質の高まりと幅の広がりである。以前は、中学年・高学年となっても挿絵中心の本や学習漫画等にとどまる様子が多く見られた。

しかし、学校全体で読書教育を推進することで、長編物語や深い内容の本が読まれるようになってきた。併せて、話題の本や新刊本のみならず、これまで動き

の少なかった本も読まれるようになってきている。

また、取組を通して児童が図書担当教員に読む本のアドバイスを求めたり、児童同士が本について情報交換をして読書計画を立てたりする姿が見られるようになってきている。平成27年度も図書委員会への希望者が大変多く、「全校に読書の楽しさを伝えたい。」という思いをもつ児童が増えてきている。このように、学校と保護者・地域が共に育む読書教育は、児童同士が共に育むことにもつながってきているといえる。

これらの成果は、学校評価にも表れ、平成26年度の読書に関する学校評価では、児童・保護者・教職員の三者評価がすべてA評価となった。保護者からは、「学校で読書を勧めてくれるので、読書習慣が付いた。」「『うちどく』のような取組を積極的に進めてほしい。家庭でも声かけしたい。」との声が寄せられている。

一方、課題としてはなかなか読書習慣が身に付かない児童への対応の必要性があげられる。学年・学級では、担任の読書に対する関心がそのまま児童の関心につながることも多いことから、定期的に教職員が情報を交流し合うことで、子どもの成長に目を向けた指導を進めていきたいと考える。

また、PTAへのアンケートでは、読み聞かせをしたことのない保護者が1割弱、日常的に読書を全くしない保護者は約4割いることが明らかになった。そのような家庭に向けての方策も必要であると感じている。

今後も、共に子どもを育む姿勢を継続し、その成果を共有しながら、担任や保護者の読書に対する理解や関心を高める工夫をしていきたい。

執筆代表者 教諭 丸山 雅代

学年型教科教室の学習環境を生かし、主体的に学び続ける生徒の育成

～生徒一人ひとりの学習意欲が持続する授業の実践を通して～

福島県田村郡三春町立三春中学校

校長 佐藤 祐也

1 本校の目指す教育

三春町教育委員会では昭和59年以降一斉画一・没個性型の教育からの脱却を目指し、創造的教育観に立った教育内容・教育方法の改革を主眼に、「子どもの夢と教師の夢がともに育つ学校づくり」を進めてきた。本校はこうした『三春の教育』の収斂として旧三春中学校を含め、教科教室型の運営方式を採る桜中、沢石中、要田中の4校が統合し、新生三春中学校として平成25年4月に開校した。本校は各教科が専門の教室を持ち、生徒がスケジュールに従って、教科教室に移動して学習する教科教室型の運営方式を採る中学校である。統合当初より、1年間を「出会い・決意期（第Ⅰ期）」「努力・熱中期（第Ⅱ期）」「挑戦・向上期（第Ⅲ期）」「感謝・感動期（第Ⅳ期）」「夢作り・継承期（第Ⅴ期）」とし、その節目を設け活動への意味づけを行っている。また節目ごとに生徒と教師の振り返りや評価を実施し、改善の視点と次期への目標を明確にして、達成感と満足度の高い学校づくりを目指している。



〈教科スペース〉

〈コミュニティーガーデン〉

2 生徒の実態と育てたい力

生徒の実態として、「純真さ、すなおさ」「目標に向かってひたむきに努力できるよさ」を持っている。そしてより身に付けさせたいものは、「新しい知識や技能を意欲的に獲得し学習を継続する力」「学校で学んだことを目的に応じて活用、修正し、それを発信し今後の生き方に活かそうとする力」である。これらの能力や姿勢を育むことにより、本校の目指す「主体的に学び続ける生徒の育成」が図られると考える。

3 研究仮説

①本校生徒の実態を把握し、②学年型教科教室の良さを生かし、③個性を重視した学習への質的な転換を図ることを基盤として、④次の4つの視点（学習

意欲をかきたてる課題の提示、具体的な活動や体験活動を活かした言語活動、協同的な学習活動の展開、進んで学級・学校外に学びを広げるまとめ）を取り入れた授業を継続的に実施していけば、⑤学習意欲を継続させる力を獲得し、系統性や発展性のある主体的に学んでいく生徒を育成することができるだろう。

4 本校の目指す生徒像

忠恕：「うるわしい心を持つ生徒」

探究：「夢に向かって学び続ける生徒」

必達：「心身を鍛え、未来を切り拓く生徒」

5 研究の具体的な手立てと内容

〔手立て1〕各教科の研究テーマと個人研究テーマ設定

全体の研究主題に迫るために、各教科部会ごとに研究テーマを設定し、さらに教科の個人研究テーマを設定することで、教科内で研究を共有し、教科におけるゴール地点を一致させ、研究内容の焦点化を図った。

今年度は、研究の自由度を広げ、教科の特色や教職経験により柔軟性を持たせた。個人研究テーマは学校全体・教科の研究テーマの探究と密接なもので、授業力向上・指導法の改善のために必要な研究内容を盛り込んだ。

〔手立て2〕研究主題・副主題を達成するための授業改善と授業研究会の実施。

各教科で共通して以下の4つの視点を重点的に研究する。

〔視点1〕生徒が疑問や矛盾を感じ学習意欲をかき立て、自ら求めて学習に取り組む『課題の提示』
〔視点2〕具体的な活動や体験活動を生かした『言語活動』の工夫
〔視点3〕共感と共生を意図した『学び合い、高め合う活動』の工夫
〔視点4〕自分の成長に気付き、学びを広げる『まとめの工夫』

上記のような学習活動を実践することは、生徒一人ひとりに学ぶ喜びを感じさせ、ひいては本校生徒の課題である「自己肯定感」を高める視点にもなり得るものとする。また、人と人との交わりを重視した学習活動は、その学習過程を通じて、他と共に学ぶことが、自分の成長（個性の伸長）につながっていることを実

感できる要素を多く含んでいる。また共感的で、共生の意識を高めた人間関係を育むことにもつながる。上記の学習活動は本研究のねらいとする生徒一人ひとりの『主体的に学ぶ』を育む原点であると捉えている。

6 研究仮説の検証方法

(1) RPDCAサイクルによる研究の推進

【R】Research (調査)

1 問題点の洗い出しをする。

「問題」とは、「目指す姿」と現状とのギャップ。

▼*前年度の研究の反省（職員用アンケート）の実施

【P】Plan (計画)

2 課題を明らかにする。

問題点の要因を分析し、課題を明らかにする。

*各種テスト（全国学力・学習状況調査）の分析

*学習に関する生徒用アンケートの実施

3 課題解決のための見通しを持つ。

*PDCAサイクルを取り入れた学力向上グランドデザインの作成

① 研究推進体制（組織）の計画を立てる。

・全体、教科部会、個人

② 研究推進日程の計画を立てる。

・校内研究主題に関わっての見通し

③ 授業研究の実践

▼*ワークショップ型研究会の実施

・指導案の形式 ・授業研究会の持ち方

【D】Do (実行)

4 課題解決策を実行に移す。

① 検証授業の事前検討会

*模擬授業・指導案検討会・検討授業の実施

② 日常の授業実践 ③ 校内研修会の実施

▼④ 校外研究会への参加

【C】Check (評価)

5 解決策の評価・分析をする。

▼① 成果と課題を明確にする。② まとめを行う。

【A】Act (改善)

6 解決策の改善を図る。

① 改善策を導き、共有化を図る。

(2) 実態把握と変容のわかるアンケートの実施

① 学習（指導過程）に関するアンケートの実施

本研究での「目指す生徒像」をもとに、生徒用学習アンケートを作成し、実施する。アンケートの質問項目は、「課題提示・探究・まとめ」の指導過程の中で内容を作成する。

② 学校生活に関するアンケートの実施

それぞれの節目ごとには、達成感と満足度の高い学校づくりを目指して、改善の視点と次期への目標を明確にした評価アンケートを生徒と教師に実施する。

(3) 検証授業の実施

教科部会ごとに検証授業を実施し、研究仮説の有効性を検証する。

- 5教科と実技教科の6つの教科部会を設ける。
- 教科部会ごとに推進計画を立て研修・研究を行う。各教科部会で、代表教師が、授業を公開する。指導案検討会・模擬授業（教科ごと）→検証授業（全体）→事後研究会（全体）を行う。
- 教科部会での研修・研究の方法を工夫する。
 - ・検証授業参観の工夫と事後研究会の工夫
 - ・付箋紙を活用し、ワークショップ型の授業検討会を実施する。
- 教科部会内で、日々の授業の相互参観を行う。
- 教科部会内での成果と課題を明確にする

7 本年度の各教科研究テーマ

教科	各教科研究テーマ
国語	根拠を明確にして自分の考えや思いを伝え合う力を向上させ、主体的に学び続ける力を育成する国語学習
社会	社会的事象に関する興味・関心の喚起とその持続を図るための指導過程の工夫
数学	数学的活動の工夫を通して、確かな学力を身に付けさせるためにはどうすればよいか
理科	自然の事物・現象に進んで関わり、科学的に探究する能力の基礎と態度を育てる指導過程の工夫
英語	生徒一人ひとりの思いや考える力を向上させ、主体的に学び続ける力を育成する
美術	生徒一人ひとりが課題の把握をして技能の向上につなげ、意欲的に制作に取り組む力を育成する
保体	生涯にわたって運動に親しむために、自分に合った運動を実践させ、主体的に運動・学習に取り組みせ、基礎体力・生活習慣について正しい認識を培う学習活動
技家	自らの課題解決に向けて、実生活に生かすことができる確かな実践力の育成
音楽	生徒一人ひとりの表現技能を向上させ、自信を持って表現し、楽しく音楽活動できる生徒の育成
特別支援	それぞれの生徒の実態に応じた、達成感の味わえる学習指導の工夫
通級	生徒一人ひとりのニーズに応じた学習に取り組み、自己理解を促し各自の苦手なところを主体的に学ぶ力を育成する通級指導

8 教科教室型の学校運営を生かした教育活動

教科教室型の学校運営の良さを生かすことにより下記のような実践が可能と考える。

① 「教え込みの一斉画一的な授業形態」から脱却し、生徒一人ひとりの「個性を重視した学習」への質的な転換を図る教科経営が可能である。

② 生徒一人ひとりの個性やこだわりを学習活動に反映しやすく、生徒の実態に応じた質の高い学び（課題解決的な学習）を実現することができる。

③ 必要な教材を集中化でき教科の特質を出した学習環境が整えられるため、生徒一人ひとりの学習意欲を高めたり学習活動に連続性・継続性を持たせたりする学習活動を展開することができる。

④ 生徒自らが教科の部屋へ「移動すること」を積極的に捉え、自ら進んで学習しようとする意志と日頃の生活の中から主体性を育む学校生活を構成することができる。

⑤ 学年フロア中央に「教師ステーション」を設けることで、日常的に生徒と教師のコミュニケーションがとりやすい状況をつくり出している。教師にとっては、生徒理解や生活自体を支援しやすくなっている。

〈主体性を育む学習活動（理科）〉

2つの理科室の間にある教科スペースには、生徒が自由にいつでも使える実験器具や科学雑誌を常設している。生徒は遊び感覚で操作をしたり、生徒相互の話題にもなったりして、モチベーションを高める効果を生んでいる。



(生徒が自由に使える実験器具) (科学雑誌等の展示)

〈学習意欲を喚起するための環境作り（数学）〉

教室内のスペースを活用し、数学に関する様々な掲示物や資料を設置した。



(数学関連資料の展示) (計算練習プリント)



(学びに導く資料の展示) (デジタル教科書による授業の展開)



(国語ノートコンテスト) (美術作品)

9 研究の実際（研究の視点ごとに一部紹介）

〈視点1〉『課題の提示』

国語2学年〈新しい短歌のために〉

○ 石川啄木の短歌で短歌について確認し、過去の生徒作品を部分マスキングして提示することで、生徒の言葉に対する関心が高まり、創作意欲を高めることができた。

理科2学年〈生物と細胞〉

○ 顕微鏡で見える様子を顕微鏡カメラで、ディスプレイに投影して見せたことで、生徒たちはそれぞれの顕微鏡観察の視野と比較しながら観察を進めることができた。実験の材料を身近なものを取り入れ、意欲が格段に変わった。

〈視点2〉『言語活動』

英語1学年〈道案内〉

○ 生徒の生活圏である身近な場所に題材を求めたため、生徒達は意欲的にコミュニケーション活動を行うことができた。インフォメーションギャップの手法を取り入れたことも活動を積極的にさせた。

社会2学年〈世界から見た日本のすがた〉

○ 事例に対する意見の集約に付箋紙とワークシートを使うことで、自分の考えを短い言葉でまとめることができた。付箋紙は、掲示しやすいこともあり、全体の意見を把握する上でも有効であった。身近な事例は生徒の積極的な発言を促した。

〈視点3〉『学び合い、高め合う活動』

数学1学年〈文字と式〉

○ 近くの席の生徒同士やと考え方を共有する場面を授業の中で随時取り入れた。思考過程の共有化が図れた。



保健体育2学年〈水泳〉

○ パディシステムを採用し、徹底することによって学習効果が高まった。能力別のパディを組ませ、教え合う場面を設定した。



〈視点4〉『評価の工夫』

音楽1学年

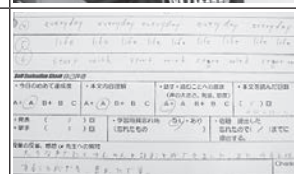
〈混声合唱へのステップ〉

○ 自分の成長に気づく自己評価のため、iPadで録画し、過去の自分の声と良くなった声を比較した。



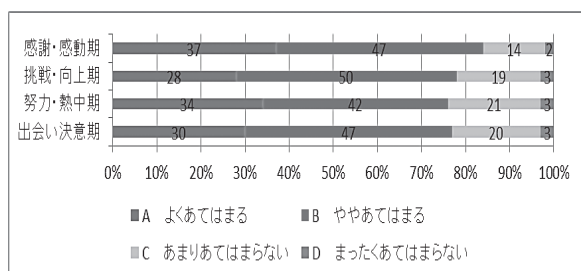
英語2学年〈電話での応答〉

○ Today's Goalに連動し、自己評価表を用いて5段階で評価させた。本時の授業で何ができるようになったかと目標を書かせた。

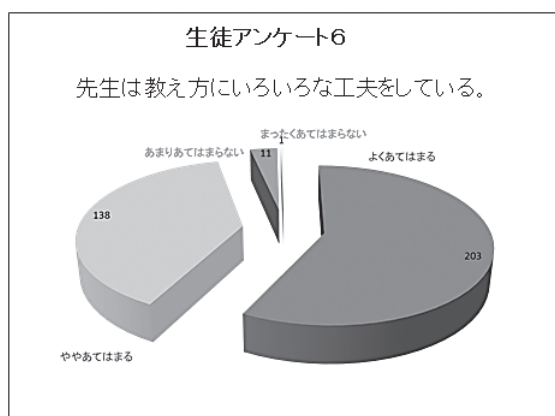


10 研究仮説に基づく生徒アンケート結果（抜粋）

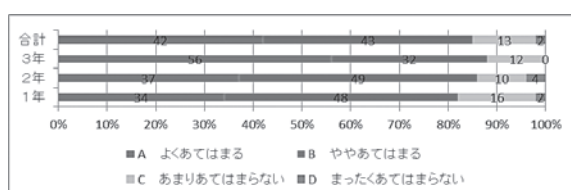
仮説②〈学年型教科教室の授業は学習効果が高まるか〉



仮説④ 〈先生方が教え方に工夫をしているか〉



仮説⑤ 〈家庭では自分から学習しているか〉



11 研究の成果

(1) [手立て1] について

教職員一人ひとりが主体的に推進する研究となり生徒一人ひとりが各教科の良さや学ぶ意味を味わうことのできる学習活動を生み出すことにつながった。

(2) [手立て2] について

[視点3]：学習活動の中に生徒が学び合う場面を意図的に設定することで、物事を多面的に見たり、視点を変えて考えたりすることができた。また学び合うことにより思考の広がり、深まりを促すと同時に、友達への理解を深め、新しい人間関係を築くことにもなると実感した。

[視点4]：学習のまとめの段階で、iPadや自己評価を用いて自分の進歩を実感した音楽科と英語科の授業、さらには授業で学んだことを実生活に生かすきっかけとなった英語科と家庭科の授業など、どれも自分の成長（個性の伸長）の高まりを実感し、学習意欲を広げていった実践となった。

(3) 検証授業の実施

『指導案検討→模擬授業→検証授業参観→ワークショップ型の事後研究会』を原則として取り組んだ。検証授業研究会では、事務所の指導主事を講師に、客観的な指導の場を設けた。



〈英語科 指導案の検討会と模擬授業〉

(4) 学年型教科教室の活用の成果から

各教科部会の研究成果からは、『生徒一人ひとりの個別化、個性化を意識した実践』『既習と本時そして授業外へと学びの連続性を促す学習活動』『生徒の実態に応じた学び』『教材の周到な準備』『教室環境の充実』『学び合う学習活動』『受ける授業から進んで行う授業』などがあげられた。

本校が無数の可能性を秘めていることを再認識した。全ての教師が参加した本研究は、生徒の学習意欲を高め、主体的に学ぶ生徒の育成に寄与した。仮説の有効性が確かめられ、本研究主題達成にせまる実践ができた。

12 今後の課題

課題としては、教科教室の良さを生かしつつ、個別化・個性化を図った実践をどう転換していくかである。具体的には教科教室の在り方を1単位時間の計画から、単元、年間を見通した在り方に視野を広げ、一般化を図っていくことである。それには、全職員で学校の課題を共有化し、学校での教育計画（教育課程）を数年次かけてどう編成していくかが今後の課題である。

執筆担当者 教諭 伊東 実

授業で学校を創るために

～教師の潜在的カリキュラムに着目して～

兵庫県豊岡市立豊岡小学校

校長 嶋 公治

1. はじめに

豊岡小学校に勤務して6年目となる。「授業で学校を創る」は、教諭時代から「授業で学級を創る」「教科指導と生徒指導の一体化」というテーマで実践を心がけていたことと軌を一にする。校長として豊小のスタートから2年間は、職員に「聴く・つなぐ・もどす」ことを言い続け、とりわけ「聴く」ことを重視してきた。とにかく教師は子どもの声を虚心坦懐に聴くことに徹する。そして、子ども同士も聴き合うことを学習の最重要事項と位置づけてきた。

佐藤学氏（教育学者）は、学級崩壊、授業崩壊の原因をさして「男子は喧騒の中で、女子は沈黙の中で落ちていく」と指摘しているが、本校においても油断できない状況は至るところにあった。それらを解決するための方策を最もシンプルに考え「聴くこと」に置き、その手応えは若手教員においても充分にあったように思われる。

学習指導要領の変遷とともに、国の方向は、「思考力・判断力・表現力」を言葉の力、特に言語運用力を培うことで育てようとし、言語活動の重視を叫び始めた。本校勤務3年目から職員は、言語活動の基幹教科ともなる国語科の授業の充実を意識するようになり、研究授業では多くの職員が積極的に国語科を選択するようになった。

そして、昨年度は、国語科活用型単元「豊小モデル」の創造を通して、子どもたちの思考力や言語力を培い、職員の授業力の向上を図ろうと取り組んできた。

職員の授業を何度も参観し、研究協議を重ねるうちに、「どのような教材を使い、どのような指導過程を、あるいはどのような指導方法を駆使しても、かならずA先生は毎年同じような学級を創る。B先生と同じ指導案をつかってもしっかりA先生はA先生らしい授業になる。」という現実が見えてきた。そこで、本稿では、授業の質を左右する「潜在的カリキュラム」に着目しながら昨年度の実践を分析することにする。

2. 潜在的（ヒドゥン）カリキュラムについて

潜在的カリキュラムとは、主に、教師の無意識的、

無自覚的な言動により、子どもたちへ伝わっていく知識、価値観、行動様式のことである。

1968年にシカゴ大学の研究者、フィリップ・ジャクソンによって提唱された。学校教育の中では、目標をふまえ、各教科および領域ごとに綿密な教育計画が立てられている。このように目に見える形で意図的・計画的に行われるカリキュラムは顕在的カリキュラムといい、潜在的（ヒドゥン）カリキュラムは、目に見えず暗黙の了解の形で子どもたちへ伝達される。

潜在的カリキュラムの負の側面について、具体的な例を挙げると、

□授業中、一度指名した児童がずっと黙っていたので、笑顔で「じゃあ、○○君は？」と次の児童にまわすことで、黙っていれば発言しなくてもよくなると児童が理解する。

□手を挙げた児童だけを指名して授業を進めていくことで、「手を挙げなくても誰かが発表してくれる」「先生が説明するのを聞いているだけでいい」と児童が理解する。

□一度決めたルールを何度も変更することで、先生の作ったルールは変更可能であると児童が理解する。

□教師が時間通りに動かないことで、時間を守らなくてもよいのだと児童が理解する。

などが、知らず知らずのうちに教室の文化として位置づけられていくのは、よくあることである。

しかしながら、これらの負の側面は、教師が意識することで、子どもたちにプラスの影響を与えることも可能となる。

以下、私たちが、研究授業等で授業を観るとき、どのような手法で授業者の潜在的カリキュラムを浮かび上がらせようとしているのか。また、教師が発するプラスの潜在的カリキュラムで学級をどのように創ろうとしたか、昨年の実践を紹介する。

3. 指導の実際

(1) 授業の「見え方」を鍛える

教師の専門的力を高めるため、若手とベテランがともに学び合いながら、授業の「見え方」を鍛えるた

めの研究協議の在り方に工夫を施した。

授業は先生と子どもたちが一緒になって紡ぎ出す固有のストーリーである。本校では、授業を、「発問は」「板書は」「ワークシートは」「掲示物は」と切り刻まれた断片で観るのではなく、ストーリーとしてとらえることを重視してきている。そこで、下の写真に示すように、授業の全体（「授業の相」）を可視化できるような工夫を行ってきた。



授業後の研究協議会において、模造紙4枚程度をつなぎ合わせた用紙を掲示し、そこには、予め本時指導案の活動分節ごとの枠組みを記入しておく。協議会は、参加者一人一人が、そこに、授業を参観して、気になった（よかったこと、課題に感じたこと）児童や教師の言動の事実を見つけ、記入し、添付していくことからスタートする。

あくまでも授業後の協議は、一定の理論や教育方法の有効性を検証したり、その理論に対する教師の指導内容や方法の是非を判定したりする場ではないことを意識しなければならない。

参観者の関心が集中する事実や、解釈が多様化する事実について、それぞれの解釈を重ね合うこと、あるいは、他の教師の解釈の価値を意味づけたり、関連づけたりする中で見えてくる教育観を重視するのである。その営みこそが、他の教師の、また、自己の潜在的カリキュラムを探り出す教師の「目」を鍛えることになると思う。

(2) A 先生の実践（5年生学級担任）

次に紹介するのは、A先生の4月からの指導記録の一部である。ここに、A先生が作り出す独自の潜在カリキュラムを見つけることができる。

①具体的な実践事例

(A 児の場合)

A児が有する主な課題（学習困難。逃げる、すねる。不集中・衝動性あり ADHD 傾向。単語で話し、自己

表現が苦手。不規則発言多し）

【指導の事実】

- 「わからん」と発する言葉を大切にす。どこがわからないのかを「ぼくは・・・のところはわかりません」と発言させ、「A君は何を言おうとしているのかなあ」と全体に広げる。他にモデリングさせ、正しく話せたときは「よくわかるように伝えられたね」と認める。さらに、わからないことは、恥ずかしいことではない事を何度も伝える。
- 姿勢の悪さ（脚、座り方）等には目をつぶる。読書等、黙って作業する時間を設定する。

A先生は、不規則発言に振り回されることなく、そこに二つの意味をもたせようとしている。一つは、「A君は、何を言おうとしているのかなあ」と全体になげかけ、A君が自分なりに授業に参加しようとしている構えを評価し、学び合う学級集団にA君が必要であることを示唆している。さらに、「わからないことは、恥ずかしいことではない」ことをかけ声だけにせず、A君の「わからなさ」から学習をスタートさせることで、学級全体に「わからない」ということは、先生や友だちから揶揄される事柄ではなく、学びにとって大切なことだというカリキュラムを生みだそうとしている。しかも、「姿勢が悪い」など、ともすれば誰からも注意をうけがちな、あるいは、恐らくこれまでA君がずっと指摘され続けたであろうことより、A君のもつよさを優先して学級の文化に位置づけていることは、子どもたちに大きな影響を与えていると考えられる。

(B 児の場合)

B児が有する主な課題（独創的な考えをもてるが、場の雰囲気を読めず、他人の考えを受け入れない。友だちとの関係づくりが課題。)

【指導の事実】

- 4月、「聴く」「つなぐ」を目標にし、詩の学習を行った際に、独創的な発言、生活とつないだ発言をしたので、認め、全体に広げた。「B君がみんなと違う考えを発言してくれたのでみんなで考える楽しさを味わうことができた」「今の発言は、生活とつないだ発言ですばらしいね」と褒める一方で、自己中心的な発言には、「今は、〇〇についてみんな考えているので、その意見は後に聞きます」というように発言のタイミングを指導した。
- 宿題を正しい方法でしっかりできているときは、

きちんとできていることを伝えて褒める。保護者との連携を密にする。

A先生は、私が数年来の学校経営の中心課題としている「聴く」ことを4月の、しかも教科学習の中でさっそく具現化させようと取り組んでいる。そして、子ども同士が考えを重ね合わせ、深め合ったり、広げ合ったり、さらには、摺り合わせたりするために、「つなぐ」という方法を意識させている。その学習活動の中心にB児が座ることができるよう、「B君が、みんなと違う考えを発言してくれたのでみんなで考える楽しさを味わうことができた」と意味づけ、異質の考えや意見が、学級での学びを活性化させ、学びの楽しさまでも生み出すことに気づかせようとしている。

ただし、B児のもつ自己中心的な発言については、課題であることを全体の場で示唆しており、学級には自分達が意識しなければならない一定のルールがあることを考えさせるきっかけとしている。これは、潜在的カリキュラムを学級づくりに有効に働かせるための重要な側面である。

(C児の場合)

C児が有する主な課題（過保護な親。家庭学習未定着で意欲が低い。友だちの忠告が聞けない）

【指導の事実】

□意味不明な発言や問いとは合わない発言であっても「～という意味やね」と補足し、意味づけるようにする。また、発言できた事や聞きやすい声の大きさを認める。「できました」「書けました」などそれが低・中学年特有の反応であっても、「いい反応ですね」と認める。

□自分で予定を立てる。自分のことは自分でさせ、あまり干渉しない。できた時は褒める。

C児の場合も、言動の意味づけを大切にしている。何よりも「発言をする」という事実を重視するとともに、できていること、友だちと比べたらまだまだだが、前よりできるようになったこと、またやろうと努力する姿勢を称揚し、そのことを学級全体に広げようとする担任の意図が感じられる。このように、子どもの課題を解決するために、できていないことを数多く指摘することよりも、できていることを見つけ、そのことの意味づけや値打ちづけをすることから始め、やがてできていないことも友だちや先生の支援を得ながら解決していく道筋を重視しているのである。このことを

私たちは、合言葉として「肯定的なかかわり」と呼び合い、豊小教育の生命線として学校教育目標のサブテーマに掲げている。

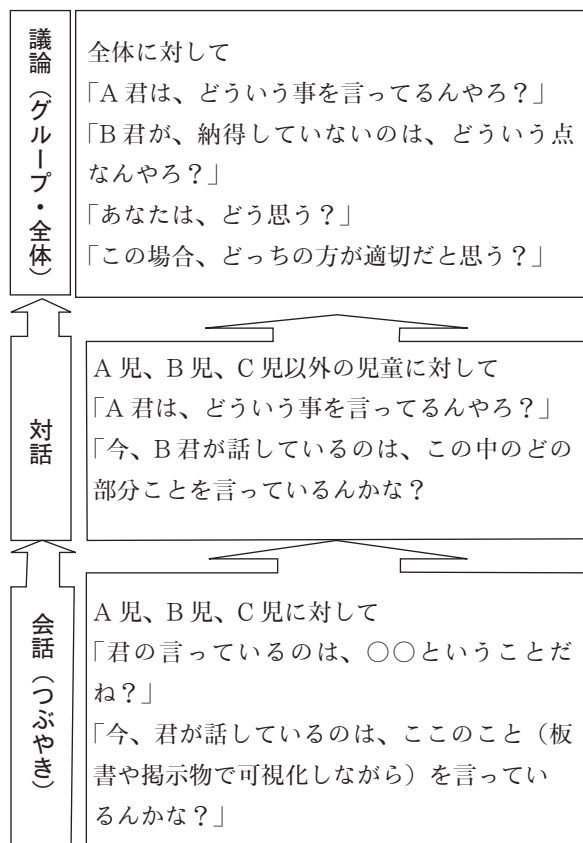
②授業をデザインする

A先生は、通常の授業において「会話」→「対話」→「議論」といった展開を心がけている。「会話」はつぶやきや雑談の部類であり、それを「発言」に押し上げて、さらには「議論」へと昇格させていく。授業では、正確な自己表現を苦手とする彼らが、「何を伝えようとしているのか」を学級全体に返し、学級の仲間としてともに考えることで、再び自己表現に戻すようにしている。

この時の教師の役割はとても重要である。A児やB児から発せられる、ともすれば不規則発言ともとれる「つぶやき」の中で、授業に関わることのみを全体の場に乗せていく。その際、話題の確認（「つぶやき」が学級を混乱させる単なる不規則発言となってしまうように、今、何のために何を話しているのかを確かめること）、先にも述べたように授業中の発言の位置と意味、さらには広がりすぎないように焦点化し、他の児童へつなぐ、といった「授業のデザイナー」としての存在に徹しなければならない。

形態

授業デザイナーとしての教師の役割



このような展開を学習活動の基本としながら、子どもたちの学びが教師の手によってデザインされることで、次のような効果を得ることができてきた。

□ A 児、B 児、C 児の声や教師の補足、意味づけを聴いた他の子どもたちが、「同じ事でも自分の言葉で言えばいいんだ」「こういう事を今、話し合っているんだ」と気づき、主体的に授業に参加できるようになる。

□ B 児の発話は、独創的なので教師の補足が必要になるが、彼の発話は自分の考えを素直に表現したもので、他の児童が、自分と異なる考え、反対意見の素晴らしさに着目することができるようになる。そのことから、見方によって物事は違って見えること、一人一人の様々な考え方を共有することで学習が深まるということが、学級集団の中に、潜在的カリキュラムとして位置づけられる。

□ A 児や B 児の衝動性は、授業の反応から観て、教師への授業評価である。授業が「わからない」「つまらない」と感じていることが、素直な反応によって証明されており、教師が反省する材料とすることができる。いわゆる「A 児や B 児を核にした学級経営」と呼ばれるものである。

③子どもの変化をみとる

2 学期の半ばにさしかかった頃、授業というフィールドで、教師によるプラスの潜在的カリキュラムが浸透し始めてきたことが、次の子どもの様子から感じ取れる。

A 児・・・「みんなのためにできることがある」(集団への貢献感)

9 月、誰かの水筒が壊れてお茶がこぼれていた。近くにいる女子は、「こぼれている」と言うだけで何もしようとしない。その時、A 児がお茶を拭き始めた。担任と一緒に拭こうとした時、彼はこう言った。「僕は、これくらいしかみんなのためにできる事はないから。」

この時、担任は彼に対して「認めること、勇気づけること」の重要性をはっきり認識し、授業の中で A 君のもつよさを優先して学級の文化に位置づけていくことに手応えを感じたという。

B 児・・・「わかると楽しい。伝えてわかってもらおうと気持ちいい」(共同体感覚)

算数は、教科担任制でコース別学習に取り組んでいる。B 児は、「わからない人が自分からたずねる」

を基本として、仲間との自力解決に挑戦している。

彼の持ち前の素直な反応や独創的な考えは、「わからないことをわからないと言っているのだな。」という仲間の思いに応える形となり、「自分と友だちの考えがちがっていても当たり前なんだ。」というふうに仲間の考えや反応を引き出すことになっている。

C 児・・・「私にもわかる、できる。」(自尊感情)

苦手な立体の学習。直方体と立方体の名前が混同してしまい、定着しない。教科担当が毎時間、授業の始めに二つの立体を示して「これは？」と聞き続ける。1 週間後、完璧に答えられるようになった時、みんなから拍手をもらい、担任は「C さんのお陰で、みんながこの立体の名前はバッチリだよ。」と評価した。ここにも、「誤答から学ぶ学級集団」の潜在的カリキュラムを見いだすことができる。

4. おわりに

今から 30 年ほど前に、サンフランシスコで「ピグマリオン効果」という心理行動が報告された。日本語では、「教師期待効果」と訳されている。

知能テストを行い、その結果、ランダムに選び出した子ども 20% を「今後伸びる子」として、担任には「密かに期待すること」だけを指示した。半年後、20% の子どもたちは、学科の成績だけでなく行動の評定も他の子どもたちを大きく上回った。担任が「密かに期待する」以外、何も差が生じないようにしているはずなのに。

これは、期待を込められて育てられた子どもは、その子に合った望ましい方向に伸びていくということを示唆している。つまり、その子どもたちにとって望ましい潜在的カリキュラムが学級に存在していたに違いない。

普段、自分が子どもたちに与えている潜在的カリキュラムには何があるのだろうか。また、今、不登校傾向を顕したり、学級集団への不適応で困っていると思われる子どもの言動の原因が、潜在的カリキュラムにはないだろうか、ということ私たちはメタ認知してみる必要がある。

今後も、校長として、授業で学校を創るために、授業研究や相互授業参観の視点に潜在的カリキュラムを据え、子どもたちの成長とともに職員の授業づくりを支えていきたい。

自分の考えをいきいきと表現する子どもの育成

～国語科「書く」単元の指導の工夫・改善を通して～

広島県廿日市市立宮園小学校

校長 新見 忠昭

はじめに

本校では、長年「道徳の時間」の研究校として研究を推進してきたが、平成23年広島県道徳研究大会を区切りとして、これまでの研究と児童の実態を考え、校内研修を見直すこととした。そのとき課題として挙げたのが児童の「書く力」である。すなわち、本校の児童は、それまでの授業研究で「ぞんぶんに話し合う場」を取り入れていたため、話すことに慣れた児童は多かったが、思考を深める手段として書く活動を活かしたり、自分の考えや思いを的確にかつ表現豊かに書き表したりすることを苦手とする児童も多く見られた。書く活動を行ってはいしたが、自分の思いや意見を書くのが精一杯で、書く喜びを感じながら表現豊かに書くことには至っていないこと、書く目的や書くための手立てが明確でないため、「書き方がわからない」「書くことが見つからない」などの苦手意識を持つ児童が多いことが分かった。

そこで、昨年度から国語科「書くこと」の領域で、自分の考えを豊かに表現する児童の育成を目指すこととした。研究主題を「自分の考えをいきいきと表現する子どもの育成－国語科『書く』単元の指導の工夫・改善を通して－」とし、国語科の授業改善を中心に据えた研究をスタートさせた。「いきいきと表現する児童」の「いきいき」については、書くことに意欲的に取り組む児童の姿（「いきいきⅠ」）と内容が的確で表現豊かな作品（「いきいきⅡ」）として現れると考え、児童の「書く意欲の育成」と「書く能力の向上」の両面からアプローチすることとした。（図Ⅰ）



図Ⅰ 研究構想図

1 昨年度の研究の概要

昨年度は、授業改善のポイントを①体験・感動を生かす②確かで豊かな表現力を付ける③書く力を高める指導の工夫として、授業研究を中心に研究を進めた。

また、書きたくなる素材・内容・場の設定を行い、単元を貫く言語活動を設定した。そして、書くための「取材・選材・構成・記述・推敲・交流」の各過程での指導を目的と評価の一体化を図りながら計画的に行うようにした。さらに、評価のA基準を明確にするるとともにA基準にするための指導や手立てについても研究した。

一単位時間としては、指導と評価の一体化を目指し、評価基準と手立てを明確に持つことにした。

昨年度の研究の成果と課題としては、

- ・「いきいきⅠ」については、児童が興味を持って活動するような「単元を貫く言語活動」を設定し、書く必然性を持たせることにより、児童の書く意欲を持続させることができた。

- ・「いきいきⅡ」については児童の意識調査からは「書いた作文に自信が持てず、どのように書くか悩んでいる」ことがわかった。

- ・学力調査等の結果からも「自分の考えを明確にした構成」や「事例を挙げた記述」等表現豊かな作文を書くことにつながる技能が十分でないことがわかった。

2 今年度の研究の取組

今年度は昨年度の成果と課題を受け、「いきいきⅡ」の書くことの技能面の指導に焦点を当て、研究に取り組んだ。研究主題と副題は昨年度のものを踏襲したが、仮説は「国語科の『書く』単元において、単元を貫く適切な言語活動を設定し、付けたい力を高めるための手立てを具体的に工夫すれば、『書く』喜びを感じ、いきいきと表現する子どもを育てることができる。」とした。

(1) 年間指導計画の作成

表1 身に付けさせたい書く力

	いきいきⅠ	いきいきⅡ
低学年	進んで書こうとする態度	順序やつながりを考え、つながりのある文章を書く能力
中学年	工夫しながら書こうとする態度	相手や目的に応じ、段落相互の関係などに注意して書く能力
高学年	適切に書こうとする態度	目的や意図に応じ、文章の構成の効果を考え、て書く能力

最初に、書くことの実態調査を行った。意識調査で児童の書く上での悩みを分析した。続いて作文調査を行い、児童の作文力の実態を把握することとした。そのために5月は「遠足」、2月は「マラソン大会」という題で作文を書くこととし、6つの観点から作文を比較することとした。その観点とは、①したことだけを書いていないか②思ったことが書いてあるか③会話が書いてあるか④伝えたいことがわかるように書いてあるか⑤構成を意識して書いているか⑥主述のねじれがないか、である。実態から児童が付ける力を明確にし整理したのが上の表1「身に付けさせたい書く力」である。

この「身に付けさせたい書く力」を基に、年間指導計画を作成した。これは、いつどの単元でどんな力を付けるか、ねらいを絞り、重点指導項目を考え、一覧にしたものである。この一覧表を作ることで、年間の単元間のつながりや学年とのつながりも見え、計画的に指導するための一助となった。

(2) 単元を貫く言語活動の設定

次に、児童が進んで学習をやり切る姿を想定し、単元を貫く適切な言語活動を設定するようにした。例えば、2年の「よく見て書こう」では「観察したことを詳しく伝える文を書く力を付けたい」という教師側のねらいと「トマトの成長の様子をおうちの人に知らせたい」という児童の目標をすり合わせ、目標に向かって最後まで意欲的に書いていくことで、教師がねらっている力が付くことにつながる。

(3) 「書く」力を高める個への手立ての工夫

作文を書くということは、基本的に個人作業であり、個人差があるのが前提である。年5回の校内研修で指導・助言をお願いした吉田裕久先生（広島大学大学院教育学研究科教授）が毎回のように話されたのもその点である。すなわち、「書き方がわからない」と思っている児童がどこでつまづいているのかを見極め、ど

のように指導すればよいのかを研究する必要がある。具体的に作文を書くプロセスで指導することがなければ、児童はどう書いたらいいか学ぶ機会はない。また、その単元だけでなく前後の単元をつなげていく児童の「学びの連続性」を意識して指導することも大切である。

ア 「取材・選材」過程での指導

作文を書くための材料はどうやって得るのか、その集め方を集める経験を通して指導する。

イ 構成の過程での指導

低学年は「順序」、中学年は「はじめ・中・終わり」の組立て、高学年は目的に応じて構成を考える力を付けていくことが求められる。作文の「構造」を意識して書かせることが大切である。

ウ 記述の過程での指導

実際にどう書くか、使うことばや言い回しを指導する。「先生、ここはどう書くのですか」と児童自らが「教えてほしい」と思うときに応える指導でありたい。教えてもらいたいと思っていないところで、ストップをかけて教えることは避けるようにする。

エ 推敲・交流の過程での指導

「推敲」では、見直す観点を明確にすることと絞ることで一人一人が見直すことができるようにした。また、「交流」の過程は、昨年度は単元の最後に持ってきていたが、互いに気軽に相談する場として書く過程でも取り入れ、書いているときに生じた課題を解決する場とした。



図2 グループでの交流（構成）6年

オ 作文主義（付けた力を確かめる）

指導（児童にとっては学習）の焦点を絞って書かせた（書いた）作文で、付けたい力が付いたかどうかを見ると同時に定着に向けて別素材で「もう一度書く」場を作った。例えば、5年「伝えよ

う、委員会活動」で5年になって取り組んだ委員会活動の様子をこれから委員会活動することになる4年に紹介するという目的でリーフレットにまとめた(図3)。ここでは、目的に合わせて書く事柄を選ぶこと(選材)、



図3 委員会活動を紹介します

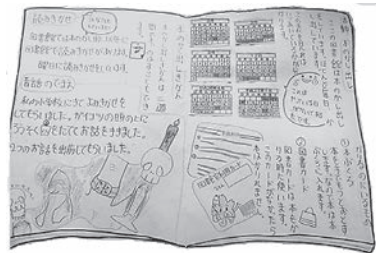


図4 図書館活動を紹介します

言いたいことが伝わるように資料を活用することなどの力を付けた。その付けた力を使って、今度は総合的な学習の時間の「地域の人々共に生きよう」という単元で、関わりのある地域の人々の活動をリーフレットでまとめた(図4)。子どもたちが受け止めた地域の人々の活動として、そのパンフレットは地域の方々に見てもらった。

また、本校では、「鈴木三重吉賞」などのコンクール作文で力を試すことも行った。その作文自体を書かせるときは、これまで培ったどの力を使うのかを明確にして、取り組ませるようにした。

3 「書くこと」の授業づくり

特に今年度は、「いきいきⅡ」の書く力の向上につながる指導の工夫をどうするかについて具体的に研究を進めた。授業研究として年5回校内研修を行い、それぞれ本時のねらいに迫る授業になっていたか、そのための手立てが具体的で児童一人一人の書く力を付ける工夫がされていたかをグループ協議した。

ア 材料を集めるための工夫

・1年「ことばあそびをしよう」では、食べ物に関する擬態語・擬声語を掲示し、選んで書



図5 1年掲示

くことができるように工夫した。(図5)

・2年「2年1組はつ明じむしょ」では、発明品を説明するために必要な観点を示し、それを参考

に考えられるようにした。(図6)

イ 組み立てる力を付けるための工夫

ワークシートと同じ観点で記入したモデルを示すことで、書くときの参考にできるようにした。(図7)

また、文種や目標に合わせてワークシートを作成することにより、児童が構成や組立てを考えやすいようにした。

ウ 書く力を伸ばすための工夫

6年「ふるさとの良さをしょうかいしよう」では、準備した材料を目的に合わせて書き進めるために、レイアウトのモデルを提示し、それを参考にしながら記述できるようにした。(図8)

エ 見直す力を付けるための工夫

記述の観点から数点を絞り、それを重点ポイントとして推敲させた。相互評価の観点としても使うことができた。(図9)

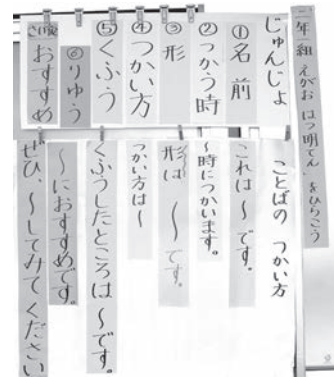


図6 2年掲示

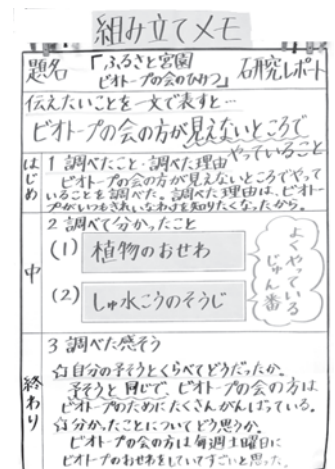


図7 3年ワークシート

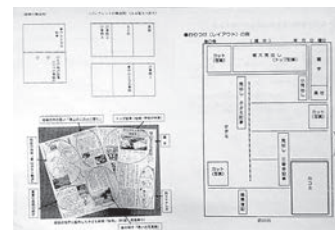


図8 6年レイアウトのモデル

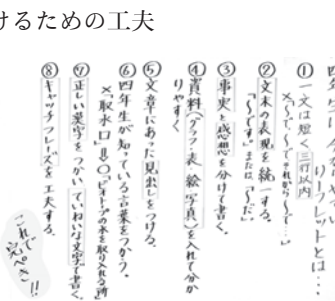


図9 5年記述・推敲のポイント

目的・相手意識が明確であれば、本気で書こうとし、本気で推敲することがわかった。

4 授業を支える取組

「書くこと」の力を付けるのは授業の充実が第一で

はあるが、国語科の授業以外で基盤を整えるために次のような取組を行った。

ア 日常的に書く

- ・日記を全学級で書かせている。
- ・各教科で単元が終わった後、学習作文を書かせている。
- ・書き慣れさせるという目的で、学校全体で視写に取り組ませている。

イ 多様に書く

- ・俳句・川柳・観察日記などに取り組ませている。



図10 「まんの五・七・五」コーナー
毎週作った俳句・川柳の中から校長が選んだ特選句を紹介する取組を続けている。

ウ 語彙を増やすための読書指導の推進

- ・より多くのことばに触れさせるために、朝の読書やボランティアによる読み聞かせ、読書月間や親子読書などで読書を奨励している。

エ 体験的行事の充実

- ・書く内容を充実させるために、地域行事を積極的に紹介したり、地域のボランティアの協力を得て体験活動を実施したりして書きたい事柄や相手が明確になるようにしている。

オ 発信する

- ・書いた作品を新聞やコンクールに応募している。
- ・「宮園五七五」として月に1回保護者・地域に向け、俳句・川柳を載せた「五七五だより」を発行している。

5 成果(○)と課題(●)

- 作文単元での教材の工夫・単元を貫く言語活動の工夫により、「作文を書くことが楽しい。」と回答した児童が78%と、1・2学期に比して約10ポイント増え、作文への興味・関心が高くなった。
- 教師がねらいに合わせてプラス評価を与えてきたこと、児童が互いに良さを見つけ合ったこと、放送や展示でみんなに読んでもらう場を設定したことが、児童のプラス評価につながり、「書いたものに自信が持てない。」と答えた児童が46%から23%と半減した。

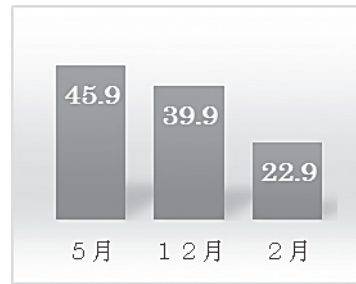


図11 児童意識調査より
「書いたものに自信が持てない」と回答した割合 (%)

また、達成感に結びつく感想を書く児童が増えた。

- 「自分の思ったことを文に書くことができる」と答えた児童は1・2学期に比して数ポイント増え86%で、児童は書く技能が身に付いてきていると感じている。
- 4月、2月の作文実態調査から、1番伝えたいことに絞って書いている児童が増えた。また、6つの観点(したこと・思ったこと・会話・伝えたい事・構成・主語述語のねじれ)での比較でも目標を達成した児童が20ポイント増えた。
- 書けるのに「自信がない」「書くことが好きではない」と答える児童が少数ながらいる。個々の理由に寄り添い、指導していくことが必要である。
- 各作文単元で身に付けた力が定着したかどうかわかるように、再度書く機会を単元の中に設定して取り組んでいくようにする。

終わりに

本校では、「書くこと」に焦点を当てた研究を2年間続けた結果、徐々に目的に合わせて適切に書こうとする力や意欲が児童に育ってきた。それは目的と相手意識を明確に持つことのできる言語活動を設定して取り組んできたことが大きい。地域や保護者の方が児童の作品を読んで心から喜んでくださる場を設定できたことで、児童の「書きたい」という思いが育ったとも言える。今後は課題にもある「書く力は身に付けているが書く意欲が低い」という児童の姿にも焦点を当て、生きる力としての「書く力」を確実に付けさせていくことが目標である。

執筆責任者 元教頭 阿部 洋子

一人一人のよさを発揮し、共に科学を創造していく子どもの育成

愛媛県今治市立乃万小学校

校長 原田 周範

1 はじめに

中教審の特別部会が、8月20日に取りまとめた次期学習指導要領の改訂骨格案では、知識や技能の他、思考力・判断力・表現力、人間性などを総合的に育むことが必要とされ、子どもが問題の発見と解決に向けて、主体的・能動的に学ぶアクティブ・ラーニングや体験学習の充実が求められている。このような時期に、本校は、平成28年度に四国理科教育研究大会愛媛（今治）大会の研究指定を受けた。この機会に、これまで問題解決の過程を重視しながら実践・研究してきた理科授業が、本当に子どもたちの主体的な問題解決になっていたかどうか、見つめ直すことにした。

2 主題設定の理由

○ 「一人一人のよさを発揮し」とは

自然事象に出会ったとき、子どもたちはいろいろな見方や考え方をし、一人一人がイメージを膨らませていく。これまで、そのような出会いや子どもの思いを大切に授業を心掛けてきた。その積み重ねの中で、子どもが本来持っているものの見方や考え方、また、生活体験や既習事項など様々な背景があることに教師は気づき、それらを含めて思いを受け止め、子どもを理解することの大切さを感じるようになった。

教師の枠が狭くて見えていなかった子どもの活動やつぶやきを受け入れ、どの思いにもその子なりの見方や考え方をしているよさを認めたい。そして、子どもが一人一人のよさを発揮できるような関わりの場を工夫したい。本研究において、「一人一人のよさ」とは、「自然・自分・友達と出会ったり、関わったりしたときにもつ、自分なりの見方や考え方」と捉えている。

○ 「共に」とは

子どもたちは、自然事象との関わりが深まっていくとき、自分の意見をはっきりもち、友達に伝えるようになってくる。そのとき、自分と違う友達の意見を認め、自分と友達の見方や考え方を比べて、お互いのよさに気付く過程を大切にしたい。また、自分と友達との見方や考え方の違いに、もう一度自然事象や教材の中の事実を見直すことが必要となってくる。その追究

の場で、それぞれが個人のよさを使って一緒に確かめる場を保障したい。一方で、自分の考えにこだわって、観察や実験を続けようとする子どももいるであろう。その思いも大事にしたい。なぜなら、そこでも友達の影響を受けて自分の見方や考え方が変容していくと考えるからである。自分が納得できるまで追究することで、これまでの見方や考え方を修正し、さらに新しい見方や考え方ができるようになっていくのである。

以上より、本研究における「共に」には、①自然と共に、②友達と共に、③自分と共に、④教師と共に、の4つの側面がある。

このような活動になるためには、「働き掛け」で「待つ」教師の姿勢と、「自由さ」や「考える時間」の保障が必要である。また、一人一人が自分のよさを発揮して考えたり、活動したりする場を保障することによって、追究していく楽しさだけでなく、困難を乗り越えて納得いくまで追究し続ける根気強さなどの力も身に付けさせたい。単に一緒に観察や実験をするグループ学習ではなく、問題解決に向けた主体的・協働的な学習となっていく。

○ 「科学を創造する」とは

単元を通して、子どもたちは、教材との出会いや友達との考えのズレなどから問題を見付け、追究する。まず、自分たちで実験方法を考え、調べていく。そして、事実を見つめ直し、自分にとっての新しい事実を見付けていく。さらに、追究した結果を基に説明し、自然の決まりを自分の言葉で表す。このような学び合いを通して、子どもは、自分自身の内面と対話して、変容していく。

このとき、子どもたちは事実に基づいて考える。しかし、同時に、子どもたちは必ず何かを感じている。例えば、育ててきたチョウの羽化を「美しい」とか「不思議だな」と感じたり、一生懸命応援したりするような素朴な感情もあるだろう。実験を繰り返す、自分たちで決まりを見付けたとき、思わず「あっ、そうか」と声が出るような「分かった」という感動もあるだろう。あるいは、困難な課題に悔しい思いをしたり、挑

戦する情熱を燃やしたりもするであろう。このような感性が、主体的な追究活動を支えているのではないだろうか。科学と感性のバランスがとれた学びによって、より質の高い気付きが得られるのだと考える。

以上より、本研究において、「科学を創造する」とは、「学び合いの中で見付け出す、これまでになかったより質の高い気付き」及び「科学と感性のバランスがとれた学び」と捉えている。

3 研究の仮説

- (1) 見通しをもって取り組めるような魅力ある教材を開発したり、教材との出会わせ方を工夫したりすることによって、一人一人のよさを発揮することができるであろう。
- (2) 自分の考えをもち、友達と共有しながら主体的に問題解決に取り組むことで、ものの見方や考え方を再構成し、共に科学を創造していく子どもが育つであろう。
- (3) 自然の事物・現象への興味・関心が高まる環境づくりを工夫することによって、科学的なものの見方や考え方を支える感性が養われるであろう。

4 研究の内容

- (1) 子どもの目線に立った教材の開発
 - ア 調べてみたくなる教材の開発
 - イ 教材の魅力を引き出す工夫
- (2) 一人一人が自分の考えをもち、共に追究する創造的・主体的な授業づくり
 - ア 自分の考えをもち、主体的に観察、実験をする場の設定
 - イ 友達と関わり、自分の考えを明確にする場の工夫
 - ウ 見方や考え方を深める振り返りの場の設定
- (3) 感性を養う環境づくり
 - ア 地域の自然に浸る体験活動の充実
 - イ 自然と触れ合う校内環境
 - ウ 子どもの発見や思いを伝える掲示
 - エ 魅力を実感できる理科コーナーの設置

5 主体的な問題解決の理科授業の開発

「2 主題設定の理由」に記述した主体的な問題解決の授業をデザインするとき、本校では、まず自然現象や教材にじっくりと浸らせて「なじむ時間」を保障する。その中で、子どもたちは、驚きや発見、感動、疑問、矛盾など自分なりのイメージや思い、見方や考え方もつ。それは、子どもによっては「気持ち悪い」や「苦手」などのマイナスの感情の場合もあるが、それらも含めて「一人一人のよさ」と認めたい。

次に、その疑問や矛盾を解決したいという問題意識に基づいて学習問題を設定し、予想や仮説を立てる。それを友達と共有する中で、一人一人が自分の考えを固め、「確かめてみたい」と能動的な活動につながる。

そして、自分の予想や仮説を検証する観察、実験の、自分なりに考えた方法で行う。すると、新しい気付きや発見があったり、予想もしなかった結果に驚いたりして「感動する」。その結果を友達と認め合って共有したり、友達と意見が異なっても妥協せず自分の考えにのめり込んだりしながら、「繰り返し観察、実験して「あっ、そうか。分かった」と「感動する」。

いよいよ結果に基づいて自分の言葉で説明したり、友達との対話や自己内対話したりしながら、学習問題に対する考察を行う。その中で、見方や考え方が再構成され、納得し、「自分事になる」。そこから新しい疑問が生まれたり、日常生活との関わりに気付いたりする。

以上、本校が考えた主体的な問題解決の理科授業をまとめたものが、下の【資料1】である。特筆すべき特徴は、①「なじむ・感動する・自分事になる」過程を経る、②自分と友達との見方や考え方の違いに、もう一度観察、実験を繰り返す、ことにある。

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1 | 導入・・・【 <u>なじむ</u> 】 |
| 2 | 問題意識に基づいた学習問題の設定 |
| 3 | 予想・仮説とその共有 |
| 4 | 予想・仮説を検証する観察、実験の計画 |
| 5 | 観察、実験の実施や繰り返し・・・【 <u>感動する</u> 】 |
| 6 | 結果とその比較や共有・・・【 <u>感動する</u> 】 |
| 7 | 考察・・・【 <u>自分事になる</u> 】 |
| 8 | 結論と振り返り・・・【 <u>自分事になる</u> 】 |

【資料1】「なじむ・感動する・自分事になる」授業構想

6 研究の実際

(1) 実態調査

平成27年4月21日に行われた全国学力・学習状況調査の「児童質問紙（全81問）」を、後日、調査対象の6年生以外の学年にも実施することにした。目的は、各学年の課題や、本校の実態が客観的に探れると考えた。ただし、質問紙の言葉が下学年には難しい部分があるため、1・2年生では実施せず、研修主任が3年生でも分かる言葉に作り直して、必要に応じて学級担任が読み上げながら小学校3年生～6年生に、5月に実施した（小3＝105人、小4＝88人、小5＝80人、小6＝77人）。調査結果については、公表方法の関係により、ここでは具体的な数値の掲載は行わず、4件法の内、肯定的回答をしている小6の児童の割合を全

国や県と比較して、右のA～Dの4段階で表示する。

表示	肯定的回答の全国・県平均との差
A	全国・県平均より高い
B	全国・県平均と同じかやや高い
C	全国・県平均よりやや低い
D	全国・県平均より低い

【資料2】調査結果の4段階表示

調査結果の一部を下の【表1】に示す。

番号	質問事項	対愛媛県	対全国
(48)	国語の勉強は好きだ	B	A
(58)	算数の勉強は好きだ	C	C
(67)	算数で問題の解き方や考え方が分かるように、ノートに書いている	A	A
(69)	理科の勉強は好きだ	A	A
(71)	理科の授業はよく分かる	A	A
(72)	自然の中で遊んだり、観察したことがある	A	A
(76)	理科の授業で、自分の考えを周りの人に説明したり発表したりしている	D	D
(78)	観察や実験は好きだ	B	B
(79)	理科の授業で、自分の予想を基に観察や実験の計画を立てている	A	A
(80)	観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えている	A	A

【表1】実態調査（小6年）の一部抜粋

<調査結果の考察>

ア (48)(58)(69)より、本校の6年生は、理科が好きな児童が全国や県よりもずいぶん多い傾向にある。ただし、(69)の小3～小6の結果を詳しく見ると、上の学年ほど低くなっており、6年生のみ大変高い。すなわち、理科が好きな児童が大変多いのは、現在の6年生のみの特徴であると考えられる。

イ (71)(79)の結果を詳しく見ると、上の学年ほど高く、本校では「理科の授業がよく分かると感じている児童」や「自分の予想を基に観察や実験の計画を立てている児童」が全校的に多いことがうかがえる。

ウ 本校の理科教育の一番の課題は、(76)の「自分の考えを周りの人に説明したり発表したりする」ことである。これは、6年生だけでなく、3～5年生も肯定的回答の割合はほぼ同じ数値であり、全校の課題と言え。また、【表1】には掲載していないが、「(7)友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ」の結果はD、「(46)友達と話し合う活動を通して自分の考えを深めたり広げたりしている」はCと、理科だけの課題ではないことがうかがえる。

(2) 授業実践：5年生理科「魚のたんじょう」

平成27年6月22日(月)に、横浜国立大学教育人間科学部の森本信也教授(日本理科教育学会会長)を助言者にお招きし、県内各地から多くの教員が来校し招いて、研究授業：5年生「たまごから子メダカへ」を公開した。授業は、【資料1】に示した、主体的な問題解決の理科授業の展開に沿って立案した。

本時のねらいは「メダカの受精卵がどのように変化、成長していくのかを意欲的に調べる活動を通して、生命を尊重する態度を育てるとともに、生命の連続性についての見方や考え方を育てる」である。(本時4/8)

ア 前時までの取組(単元の導入)

本時に先立って4月下旬に教室でメダカを飼うことから始め、メダカに対して自然に興味をもてるようにし、教材にじっくりと浸らせてなじむ時間を保障する。教室の水槽で生まれたメダカの卵を育ててみたいという児童たちの気持ちを尊重しながら、一人一人に卵を渡し、自分の手で育てる体験ができる環境をつくった。

イ 本時の展開(概要)

- ① 前時までに観察した受精直後から受精3日目までの受精卵の変化や成長の様子を発表し合った。「目が見えて、ここがドクドクしていたので、僕はここがメダカだと思う」とか「人間の赤ちゃんのように丸まっている」など、多くの児童たちが言葉豊かに発表した。これらの発言を教師が「目・心臓・血管・体の形」の4項目に整理して、構造的に板書した。
- ② 本時の問題「受精卵の中は、どうなっていくのだろうか」を確認し合う。
- ③ 今日の受精卵(6日目)はどのように変わっていると思うか予想して発表した。下が主な発言である。

T	変わっているところがあると思う人?(挙手)
S	体が大きくなると思う。
S	もう1つの目ももっとはきりしてくると思う。
S	色がだんだんついてくると思う。
T	どんな色?→ S 黒色だと思う。
S	目だけじゃなくて、もっと全体がくっきり見えなくて、あわがなくなると思う。
T	どうして、そうなると思ったの?
S	目の色が付くのと同時に、体の色が付く。
T	(板書の目、心臓、体を見ながら)心臓は?
S	今までと同じで、変わらず動いている。
T	じゃあ見てみようか。どんなになっているかな。

- ④ 1人1台の顕微鏡で観察したことを「発見カード」に書いた。その後、「僕はあわがないと思っていたけど、少しあった」、「心臓がとても速く動いていた」など、驚きや発見による感動を発表し合った。特に、「心臓がグルグルン動いている」とみんなの前で

体を使って表現した男子の発表が印象的であった。



⑤ 教師が撮影しておいた受精6日目の卵のビデオを見せると、「うぁ～」と歓声が上がり、心臓の速さに驚いた。10秒間の鼓動回数をみんなで声をそろえて「1、2・・・」と数えると31回だった。次に、受精3日目のビデオを見せて、10秒間の回数をみんなで数えると15回だった。「3日間でこんなにも速くなってる」と、感動の質が高まった。「どうして？」と教師が投げ掛けると、「人間と同じで、赤ちゃんと大人は違う」など自分事として考えを巡らしていた。

⑥ この後、もう一度、自分の卵を観察し直して、納得するまで繰り返し確かめて、自分事にする予定であったが、時間が終了した。

ウ 研究協議での森本信也教授の指導助言（抜粋）

- 予想させたので、何を観察するのかははっきりした。
- 心臓の回数を、みんなで声をそろえて数えさせたことがよかった。このことによって自分事になった。

▲ 研究内容の「共に」を考えると、発見カードに書いたことをお互いに見せ合って共有すればよかった。

(3) 指導案づくり

今年の11月に、研究会の中間発表会を行い、全学年1学級ずつ理科授業を公開する。本校は理科専科がないので、近隣の理科の仲間に依頼し、各学年ごとの指導案づくりに協力してもらった。下は、その会を通して、本校の職員が学んだ生の声である。

- 私は理科を専門としていないけれど、長年実際に理科を指導されてきた先生方のお考えを教えてください、「単元全体の構成が大切なこと」や「教師自身が楽しむことの大切さ」を感じた。
- 私達の疑問にも、実験をしながら、専門的な立場から説明をして解決していただいた。授業のどこが大切で、何を子どもたちに学ばせるかなど、基本的なこともきちんと説明してくださり、理科を教えた経験がほとんどない私には、大変ありがたかった。

(4) 感性を養う環境づくり

5月以降、各学年ごとにいろいろな植物を栽培している。一人一鉢を基本とし、学校へ来るなり、自分のアサガオやトマトに一目散にかけ寄って水やりをす

る。全員、毎朝である。優しい目で水やりをしたり「昨日より伸びてる」「つぼみ見つけた」と友達に話したり、どの児童もいい表情をする。小さな命の育みから、児童たちは、多くのことを学ぶ。

8月21日の登校日には、4年生がヘチマの観察とサルビアの鉢の手入れをした。3階にまで届きそうなヘチマの成長に驚いたり、サルビアの蜜を始めて吸った児童たちは「あま～い」と叫び合ったりしていた。



7 成果と課題

- 理科の授業において、単元が始まる前から教室などで、教材になじむ時間をたっぷり保障することで、予想や観察をする時に自分なりの考えをもつことができ、一人一人のよさを発揮することができ始めた。
- 「なじむ・感動する・自分事になる」の場面を重視した主体的な問題解決の理科授業では、自分の言葉で友達に説明したり、繰り返し実験したりして、自分なりに納得して理解することができる。このことが、【表2】の結果に表れている。

	全国学力テスト	愛媛県定着度確認テスト	
	4/21実施	6/30実施	
	小6の結果	小5の結果	小6の結果
全体	A	B	A
選択式問題	A	B	A
短答式問題	C	C	B
記述式問題	A	B	B

【表2】県の平均正答率との比較

【表2】は、今年度の全国学力・学習状況調査及び、県下の全小学校5年・6年に実施された愛媛県第1回定着度確認テスト（H27年6月30日実施）について、本校の理科の結果の一部を県の平均正答率と比較したものである。A～Dの4段階表示は、【資料2】に準ずる。5年も6年も短答式問題に課題があることは明白であるが、小6の4月と6月を比較すると、上昇している。1学期間の本研究の取組の成果だと考える。

▲ 6-（1）に記述した本校の理科教育の一番の課題である「自分の考えを周りの人に説明したり発表したりする」ことが、本研究の取組によってどのように改善されるか、今年度末に同じ調査を再度実施して、本研究の仮説の有効性を検証したい。

いじめを生まない学級づくり

～一次支援の視点を重視した、ライフスキル教育の実践を通して～

新潟県新潟市立上山中学校

教諭 堀 徹

I はじめに

平成26年4月、いじめ防止基本方針が各学校で策定された。さまざまな委員会が設置され、いじめを組織的に防止していく取組が行われている。実際にいじめと疑われる問題が起きたときには、担任一人に対応するのではなく、チームとして対応していく体制ができていて実感している。しかしながら、いじめが起きる前に行っておかなくてはならない、いじめが起りにくい学級経営やいじめをしない人間関係づくりの授業など、一次支援に関する取組に課題があるように感じている。諸外国では、一次支援に力を入れ、いじめに関わらず生徒が抱えるさまざまな諸問題を未然に防止するための教育プログラムなどを取り入れている。日本はこの一次支援の視点が遅れているものと思われる。いじめをしない人間関係づくりやいじめの兆候を見逃さない学級の雰囲気づくりが今の学校現場においては重要である。一次支援の視点を取入れた授業を実践することは、いじめ防止に向け、大きな役割を果たすものと考えている。

II 主題設定の理由

当校は全校生徒708人、1学年7学級の大規模校である。1年生は237人在籍しており、二つの小学校から入学してくるため、半数は互いのことをよく知らない状況で中学校生活がスタートする。入学後一か月ほど過ぎたころから些細なことが原因で、けんかや人間関係のトラブルが起り始めた。その中でも、相手の個性を否定することや人の気持ちを考えない言動をとることで、互いに傷つけたり、傷つけられたりする、いじめの兆候と見受けられるケースがあった。

そこで、希薄な人間関係から生じるいじめを防止するためには、人間関係づくりをねらいとする授業を年度当初の学活だけで終わらせずに、継続的に行うことが必要であると実感した。互いの人間性を理解し合うことで、不必要なトラブルを避けることができると考える。また、いじめをしていた生徒に話を聞くと多くの場合はいじめているという自覚がない状況で行

われることが多い。遊びのつもりや相手も嫌がっていないなどという勝手な思い込みがある。いじめの構造やいじめによる影響の大きさなどを学ぶことでいじめに対する抑止力になるものと考えた。

いじめを生まない学級をつくるためには、人間関係づくりといじめ防止に関する一次支援の視点を重視した授業実践が必要と考え、本研究を行うこととした。

III 研究仮説

【研究仮説①】

人間関係づくりをねらいとする授業を定期的を実施することで生徒は相互理解を深め、学級は互いを尊重し、居心地の良い場となるであろう。

【研究仮説②】

いじめの実態やいじめの影響を考える授業を実施することで、いじめがもたらす結果を理解し、いじめを許さない学級の雰囲気ができあがるであろう。

IV 研究内容

本研究は、1年生の一つの学級を研究対象とする。人間関係づくりといじめ防止をねらいとする授業を行うために、一次支援の学習プログラムである「JKYB ライフスキル教育プログラム」を中心に、学級の実態に合わせて授業内容を構成した。

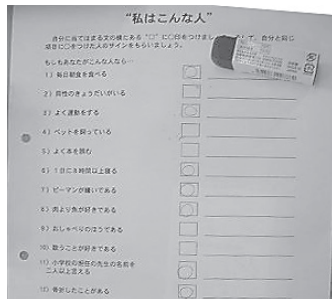
1 研究仮説①「居心地の良い学級づくり」について

(1) 互いをよく知る大切さ(4月)

人間関係が希薄な現代において互いを知らないことは誤解や不安を生む。そこで、互いを知り合うために、意図的に会話のきっかけを授業でつくりたいと考え、「お互いをもっとよく知ろう」という授業を行った。

この授業は、15の項目(ペットを飼っているやゲームが好きなど)が書かれたワークシート(資料①)の中で自分にあてはまる項目に○を付ける。そのワークシートを持って、全員が教室内を移動し、同じ項目に○を付けた人、また、同じ項目に○が付いていない人を探し、サインをもらうという活動を行った。

授業での生徒の様子は、ゲーム感覚で互いに声を掛け合い、○が付いている人、付いていない人を見つけ、その項目についてお互いに質問し合うなど会話を楽しむ様子が伺えた。自分から声を掛けられない生徒にとっても周りから声を掛けてもらえるので、嬉しそうにコミュニケーションをとることができていた。



【資料① ワークシート】



【資料② 活動の様子】

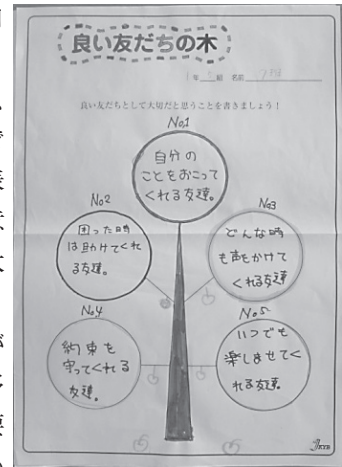
授業後のアンケート結果では、「たくさんの人と話すことができたか」の問いでは、「はい」と回答した生徒が100%であった。「自分とクラスの仲間は同じ部分や異なる部分があると感じたか」の問いでは、「感じた」と回答した生徒が97%であった。生徒の感想は、「違う小学校の人とは、これまであまり話していなかったけれど、きっかけがあったことでたくさんの人と話せて楽しかった。クラスを人の知らないところが分かって良かった。これからたくさんの人と話したり、遊んだりしようと思う。」という内容である。生徒の感想の中で、「これまで話さなかった人と話すことができて良かった」のような内容を書いている生徒が、66%いた。それまで関わりの少なかった生徒同士にとって、互いを知り合う良いきっかけとなる授業であった。

(2) 良い友だちの要素を考える (5月)

最近のいじめは同じ仲間関係にある生徒同士の中で起こるケースがよくある。仲間ではあるが、上下関係があったり、いわゆる「いじられキャラ」といった存在が生まれたりすることが背景にある。そこで、どんな友だちが大切な友だちかを考えさせることと、自分はどんな友だちなのかを振り返らせることでその後の仲間関係を良好にしたいというねらいから、「すばらしい友だち」という授業を行った。

この授業は、まず、良い友だちの要素を生徒個々で考えさせる。次に、グループで良い友だちとはどんな友だちかを話し合う。その後、グループの考えを学級全体で発表し合う。最後に、今現在、自分はどんな友だちかを振り返らせ、今後どのような友だちでいたいかを決意表明するという活動を行った。

授業では、良い友だちの要素を班内で話し合う活動を通して、互いの意見を尊重し合い、本当の友だちとはどんな友だちかを真剣に話し合う姿があった。良い友だちの要素で、「自分のことを注意してくれる」という考えは、はじめは少数意見であったが、仲間の発表を聞いて、自分を注意してくれる友だちは大切な存在であるということに気付いた生徒が多かった。その他に多かった良い友だちの要素は「優しさ」、「思いやり」、「うそをつかない」、「人の嫌がることをしない」、「困っているときに真剣になってくれる」などがあった。



【資料③良い友だちの木】

授業後のアンケートでは、「良い友人であるために必要なことが分かった」と回答した生徒が100%であった。授業後の感想では、「友だちが困っていたら助けてあげたり、友だちが悪いことをしていたら注意してあげたりして本当の思いやりを大切にしていきたい。」などがあった。授業を通して、友だち関係を良好にするためには何が必要なのかを学級全体で話し合う良いきっかけとなった。

(3) 互いの良さに目を向ける (9月)

思春期の中学生は、友だちからの言葉に大きな影響を受ける。いじめのない人間関係をつくるために、互いの良さに気付くことはとても重要なことである。仲間の悪口ではなく、仲間の良さを讃え合う関係をつくるために、「友だちをほめよう」という授業を行った。

この授業では、はじめに褒められた経験やその時の気持ちを発表し合い、どのように褒められると嬉しいのかを全体で共有した。上手に褒めるとは、相手の努力や行動、能力に対して具体的に褒めることが大切であることを確認した。

次に、無作為に決めた3人の秘密の友だちの良いところやがんばっているところを一週間、観察し、記録していく。

「友だち」観察記録		1年3組 名
観察日	A	B
11月10日	授業中いろいろ注意していた!!! のおかげで、みんなに知らず知らずうちに話しかけられた...	七りとうが話しかけていた。いつも、みんなの気が配り、明るかった。
11月11日	なやみの時、最後まで片付けをしてくれていた!!! すごい!!!	その場に合せて、よりよけたり、気が配っていた!!!
11月12日	なやみの時、最後まで片付けをしてくれていた!!!	すごい!!!

【資料④観察記録用紙】

一週間後に資料⑤のように、自分の手を書いた用紙を背中に貼り、秘密の友だちに賞賛メッセージを送り合った。

授業後のアンケートでは、「いろいろな褒め方があることが分かったか」、「友だちからほめられて嬉しかったか」、「こ



【資料⑤活動の様子】

れからも友だちの良いところを見つけないか」のいずれの問いに対しても「はい」と回答した生徒は100%であった。

生徒の感想では、「友だちから褒められて嬉しかった。褒め合うことの大切さを知った。」「人には良い所がたくさんあると分かった。」などの意見が多かった。

この授業を通し、生徒は人から褒められ、認められることに喜びを感じ、賞賛し合うことの素晴らしさを実感していた。この授業では、自己肯定感の高まりが期待できるとともに、より良い人間関係を育むことに効果的であった。授業後の学級は褒められた喜びや感謝の気持ちなど、温かな雰囲気に包まれていた。

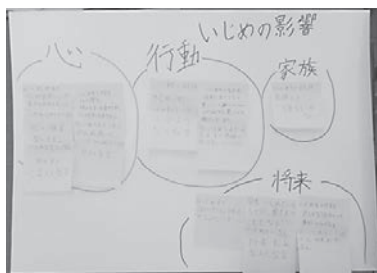
2 研究仮説②「いじめを許さない学級づくり」について

(1) いじめの実態を知る（6月）

生徒は、からかいや冷やかしなどを深刻に受け止めていないケースが多い。軽い気持ちで行っているいじめがもたらす影響を知ることは、いじめを未然に防止する上で重要である。そこで、「いじめの真実」という授業を行った。

この授業では、はじめに、いじめが実際にどれくらい行われているのか、また、いじめの形態について全国の中学1年生のアンケートデータをもとに、学級全体で考えた。次に、いじめがもたらす悪影響について、被害者、加害者、傍観者、家族にどんな影響があるかをブレインストーミングで意見を出し合い、いじめによる悪影響についてグループでまとめ、話し合った。その後、グループでまとめた、いじめによる悪影響を学級全体で発表し合い、さまざまな立場によるいじめの悪影響について深く理解し合うことができた。

授業後の生徒の感想では、「いじ



【資料⑥いじめによる影響】

めは絶対にしてはいけないと思った」、「いじめは被害者だけでなく、加害者や傍観者にとっても良いことは一つもないと分かった」、「いじめはいじめられている人の将来をめちゃくちゃにしてしまうと思った」など、軽い気持ちで行っている、からかいはじめがどれだけ重大な結果をもたらすのかを真剣に考えることができていた。

(2) いじめに関わる意志決定の方法を知る（7月）

生徒は、いじめが悪いことだと分かっていたとしても、仲間関係を壊したくないという思いや自分がいじめられたら嫌だなど、さまざまな影響を受けて、正しい行動選択ができないケースが多い。そこで、より良い意志決定の方法を学ぶために「いじめに関する意志決定」という授業を行った。

この授業では、はじめにより良い意志決定のしかたについて学ぶ。意志決定の方法として、① STOP「何について決めなくてはならないのかを明らかにする」

② THINK「どんな選択肢があるのかを考え、その選択を行った場合のプラス面とマイナス面を考える」

③ GO「プラス面とマイナス面を理解した上で、一番

良い選択肢を選び行動する」という内容である。次に、ネット上でクラスメイトのBさんの悪口をグループトークしているという一場面において、いじめを誘われたAさんはどんな行動をとればよ

【資料⑦ワークシート】

いのかを、意志決定のSTOP、THINK、GOにあてはめて考えた。

生徒が考えた選択肢では、「Bさんの良いところを書き込む」、「話題を変える」、「親に相談する」、「次の日に先生に相談する」などが挙げられた。

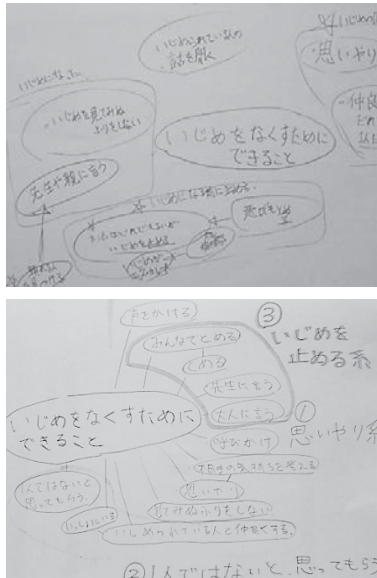
授業後の生徒の感想は、「いじめを見たときには、その場で止められなくても大人に相談するという選択をしたい」、「何かを決めなくてはいけないときには意志決定のステップを使って意志決定していきたい」といった内容が多く述べられていた。

自分で止められなくても大人に相談するという行動が理解できたことは大きな成果であった。

(3) いじめに関するファシリテーション（9月）

夏休みの課題として生徒が書いた人権作文の中で「いじめ」に関する作品を三つ生徒に紹介した。一つ目は、いじめている側の視点で書かれたもの、二つ目

は、いじめの被害者の視点で書かれたもの、三つ目は、傍観者の立場で書かれたものを読み聞かせた。三つとも「いじめは絶対にしてはいけない」、「いじめをなくしたい」という強い思いの込められたものであった。その後、「いじめをなくするためにできること」というテーマでファシリテーション（資料⑧）を行った。生徒は、いじめが起きる前にできること、いじめを見たときにできること、いじめられている人に対してできることなど、さまざまな角度からいじめを防ぐためにできることを話し合うことができていた。



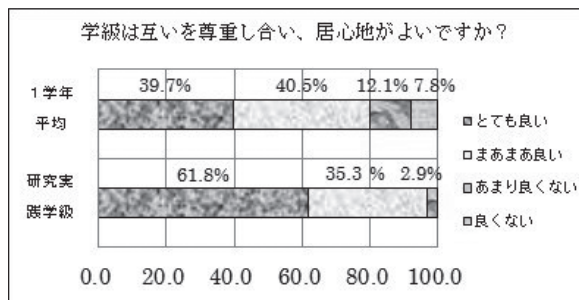
【資料⑧班の記録用紙】

生徒は、身近な仲間の作文を聞くことで、改めていじめをなくしたいという思いが強くなっているように感じた。

V 研究の成果

【仮説①「居心地の良い学級づくり」の検証】

資料⑨は7月末に行ったアンケートをまとめたもの



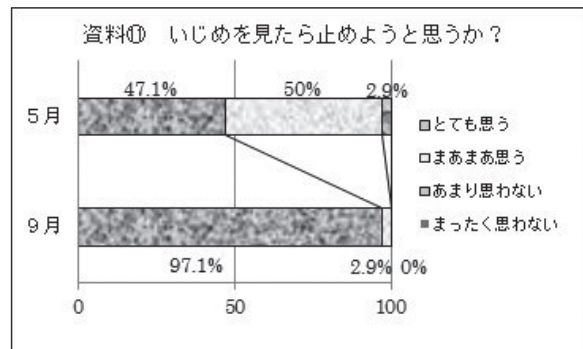
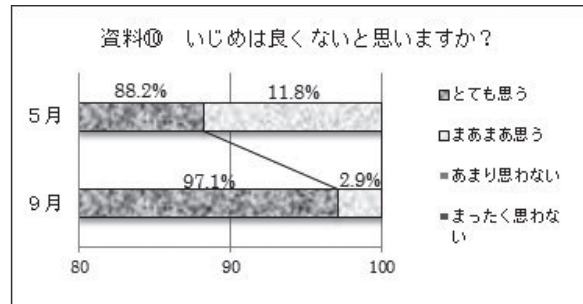
【資料⑨生活アンケートによる比較】

である。「学級は、互いを尊重し合う雰囲気があり、居心地がよいか？」という質問に対し、肯定的な回答をしている割合が、1学年7クラスの平均は80.2%であるのに対し、研究実践学級では、97.1%と高い結果であった。さらに、このアンケートは全校で行ったものであるが、1～3年生の全21学級の中でも最も高い数値であった。また、5月に行われたいじめ調査では、人間関係のトラブルやいじめの訴えを書いた生徒が4人、6月は5人いたのに対し、9月では1人に減っている。学級全体がお互いを尊重し合う雰囲気

ができつつあることを感じる結果を得られた。

【仮説②「いじめを許さない学級づくり」の検証】

資料⑩はいじめに関わる授業を行う前の5月にとった結果と授業後の9月にとった結果を比較したものである。「いじめは良くないと思うか？」の質問に対し、「とても思う」の割合が88.2%から97.1%と高くなった。特に変化が多かったのは、資料⑩の「いじめを見たら止めようと思うか？」の質問に対し、「とても思う」と回答した生徒が、授業前は47.1%であったのに対し、授業後では、97.1%に上昇し、いじめをなくそうという学級全体の意識の高まりを感じる結果を得られた。



VI 終わりに

いじめはあってはならないが、いつ、どこで起きるか分からないという危機感といじめをなくしたいという思いを持ち続け、この度の研究実践をこれからも続けていきたい。

参考文献

- 『JKYB ライフスキル教育プログラム中学生用レベル1』JKYB ライフスキル教育研究会（川畑徹朗編著）東山書房 2007年
- 『ライフスキル形成を基礎とする「いじめ防止」に関する教育プログラム』JKYB ライフスキル教育研究会

自ら学び、伸びようとする子をめざして

～ストーリー性のある学習を通して～

福井県鯖江市進徳小学校

教諭 高島 明子

1 はじめに

学びは、全ての子どもたちに平等に与えられるものである。しかし、与えられただけで終わる学びは、意欲が続かなかったり、定着しなかつたりする。小学校では、学びに向かう姿勢を身に付けるべきだと考えて、子どもたちが無理なく、自分から学びたいと思う指導方法をいつも模索してきた。

6年生を担任した時、常に中学校への進学を意識させた学習を行ってきた。だが、やはり学習の基礎は、1年生からだ実感した。小学校では、学びの基礎を身に付けるべきである。子どもたちが無理なく、自分から学びたいと思う指導方法を子どもの目線に立って、1～3年を通して実践してみた。

2 研究主題設定の理由

(1) 本校の実態から

本校の児童は、明るく素直な子が多く、友達と仲良く関わることができる。指示されたことには誠実に取り組むが、自ら考えて判断し、主体的に活動することは十分とは言えない。また、他への思いやりやコミュニケーション力が不十分な子、粘り強さや根気、忍耐力に欠ける子も見られる。

(2) ストーリー性のある学習の必要性

1年生は、いろいろな幼稚園や保育園から入学してきた子どもたちで構成されている。家庭環境や成育歴の異なる子どもたちが、同じ教室で同じ学習を行うには、様々な課題がある。しかし、それは当然のことであって、工場の機械のように流れていくものではない。どの子も目の前の学習活動が自分のものであることを実感し、友達と共有しながら自分が成長していくのだという気持ちを持たせられる指導法を準備しなければならない。そのためは、それぞれの教科や学校行事が密接に関連しあい、子どもたちにとって無理なく取り組める必然的なストーリー性のある学習が必要であると考えた。

それぞれの学年が、次の学年での学習を見据え

自主的な学びを実感できれば、新しい学びに対する抵抗が無くなり、学習したことの定着率もアップするはずだと考えた。

3 研究仮説

子どもたちの実態とストーリー性のある学習の必要性から、次のような仮説を立てた。

各教科や学校行事との関連を考えたストーリー性のある学習を進めれば、自ら学び伸びようとする子を育てることが出来る。

4 研究内容与方法

(1) 学習のつながりを意識させる学習活動の工夫

各教科の学習は、相互に関連しあっている。しかし、子どもたちにとって、それらが必然性のあるものでなければならない。子どもたちの目線に立った学習活動をつなぎ、子どもたちに必然性を意識させながら学習を進めていくことが意欲につながると考えた。

(2) 授業内容の工夫

授業は、單元ごとに目標があるが、その目標を、出来るだけわかりやすく設定し、取り組みやすいものにしたうえで、今までの学習を生かせる内容を考えていく。あくまでも主体は子どもたちである。そして、こちらから与えるものではなく、子どもたちの思いや気づき、初発の感想等を大切に子ども達自身が作り上げていく授業をめざしたい。

5 研究の実際と考察

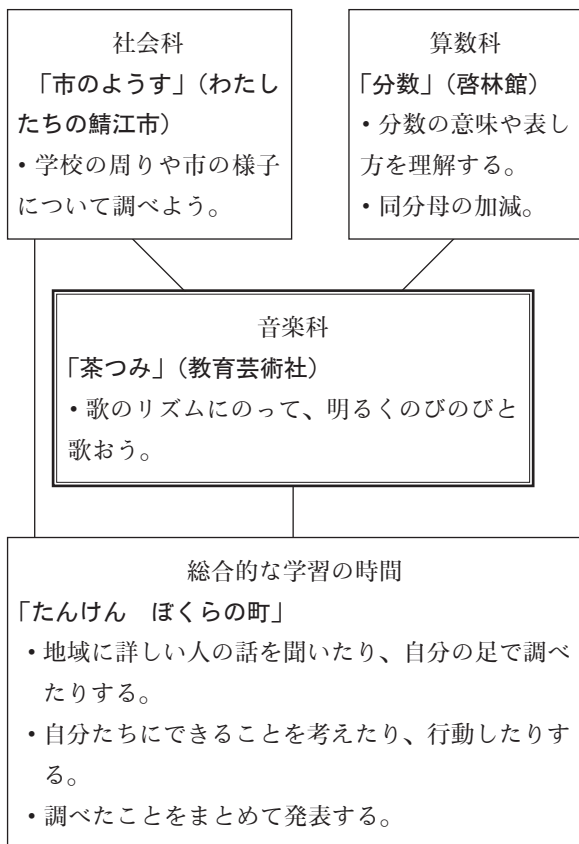
(1) 学習のつながりを意識させる学習活動の工夫

① 他教科との関連（音楽科 社会科 算数科 総合的な学習の時間）

3年生になり、音楽ではリコーダーという楽器を使用するので、最初から子どもたちは意欲的で

あった。しかし、すぐ使用させず、3年生では、どういことを学習するのか1年間の見通しを持たせてから学習に入っていた。すると、やりたくてうずうずしている気持ちが、リコーダーの練習を始めた瞬間にあふれだし、一瞬で指使いをマスターできる子が続出した。

1. 2年生の時には、元気よく歌ったり、音楽に合わせて体を動かしたりすることが好きだったので、毎時間楽しく活動していたが、中学年になると、歌詞に注目したり、拍の流れを感じて歌ったりすることが出来るようになってくる。そこで、「茶つみ」をメインにして他教科との関連を図った。



2年生の時に生活科で「町たんけん」を行なっているが、店や建物中心であった。地域を流れる日野川や学校のすぐそばにある西山の自然も探検の対象にはなかったが、「茶の木」に関しては、全くふれていない。また、近年「茶つみ」そのものが、生産地以外では見られなくなっている。この歌の歌詞の内容をつかむには、映像を見せるだけでは不十分であると考え、地域の人の協力を得て、学校周辺で「茶の木」を探した。すると、歩いて5分のところの家の庭先に存在することが判明した。お願いして、茶摘みを体験させてもらった。

一番茶摘みは、5月の連休直後の限られた期間にしなければならないので、その日に合わせて体験を行った。この時には歌詞の意味がよくつかめていなかったもので、歌うことが出来なかった。しかし、摘んできた茶葉をお茶にする体験を通して、歌詞の内容への理解につながり、茶葉をもむときには、自然に「茶つみ」の歌を歌いだした。茶葉そのものを「茶つみ」という名詞だと思い込んでいる子が多いことに驚いたが、活動を通して「摘む」という意味を正しく理解することができた。さらに、同じ茶葉から緑茶、抹茶、紅茶ができることを知った。出来上がった茶葉を使って冷茶を作り、みんなで試飲した。色は薄いですが、ほんのりと甘いお茶の味と香りに、「おいしい!」との感想が聞かれ、みんなおかわりをしていた。



また、この楽曲の旋律の、全てのフレーズの1拍目と最後の4拍目が4分休符になっているので、手遊びを取り入れやすい。そこに算数の分数の学習が絡み、4分音符や4分休符の理解につながっていった。



社会科の地図記号の「茶畑」は、全員の子が覚えた。今はもう姿を消してしまっていたが、昔は家の周りに栽培していて、自家製のお茶を飲んでいたことにも気付いた。この体験をこれから学習する「昔の暮らし」にもつなげていきたいと思った。また、2学期の校外体験学習では、お抹茶体験をし、さらにこの歌を身近に感じさせることができた。

② 教科と学校行事との関連

(国語科 音楽科 「ありがとうコンサート」)

本校では、毎年10月に、お世話になっている方々を招いて「ありがとうコンサート」を行っている。家族、地域の人はもちろんのこと、見守り隊や図書ボランティアの方々、公民館や児童センターの方もお招きする。その際にそれぞれの学年

が、学習したことを発表するのだが、コンサートのために学習そのものが犠牲にならないように配慮すべきと考え、今年度は、「詩」の群読と音楽で学習した曲を取り入れた。こちらで構成したものを与えて練習させるのは簡単だが、主役はあくまでも子どもたちであるので、意見を取り入れながら構成していった。

今年度は、春の遠足で行った「恐竜博物館」での体験をもとに、「自分で考えた恐竜の絵」「土粘土で作ったオリジナル恐竜」を関連させて考えていった。

音楽で学習した「あの雲のように（初めて取り組んだりコーダーの二重奏）」「とどけようこのゆめを（歌とリコーダーの伴奏）」「きょうりゅうとチャチャチャ（グループに分かれて歌）」さらに、2学期当初、国語で楽しく音読していた「詩の群読」。詩は、2編の中から好きな方を選択させた。そして、つなぎの言葉や、手を使った4拍子のリズム打ちをしながらの隊形移動を取り入れた。子どもたちは、短時間の練習時間にも関わらず集中して取り組み、あっという間に仕上がった。練習中も「リコーダーの音は切らずに、トウを忘れずに」をアドバイスすると、お互いに聞きあって練習する姿が見られた。また、体育館で練習を始める前には、伴奏者のピアノ伴奏に合わせて、集まった子から、リコーダーの練習を自主的に始めていた。どの子も、自分の成長した姿をお客様に見てもらいたいのだなと強く感じた。



コンサートがすんで、教室にもどって感想を聞くと、「緊張した」「言葉や歌がちょっと速くなった」「がんばったから、気持ちが伝わったと思う」「来年は、みんなで悪かったところを直していきたい」という反省に立って先を見据えた意見まで出た。子どもたちは、発表に満足しつつも、次はもっと上手にやりたいという思いを強くもって

ることがわかった。

(2) 授業内容の工夫

(思考や気づきを大切にした国語の授業)

① 「つたえよう、楽しい学校生活」(光村図書)

単元の目標は、「グループで話し合って考えをまとめ、学校行事を紹介しよう」である。学校生活の中で紹介し合う内容として、子どもたちが知りたい内容を取り上げ、伝える相手はクラスの友だちにした。

9月の初めなので、2学期に行われる学校行事の見通しをもたせたいという思いと、子どもたちの知りたいという思いをつなぎ合わせ、次の内容を選択していった。

学校行事である「市の総合防災訓練」「マラソン大会」「校外体験学習」「ありがとうコンサート」4年生になったら始まる「委員会」「クラブ」について、グループごとに話し合ったり、インタビューをしたりしながら発表したいことをまとめていった。「なぜ行われているのだろう」「どうやって調べたらいいのだろう」「誰に聞いたらいいのだろう」等、素朴な疑問から話し合いを始め、校長先生、担当の先生方や上級生にも、必要とあらばインタビューに行き、まとめていった。

遊びたいはずの休み時間でも、誘い合って発表に必要な準備を進める子が多く、2年生の頃とは違って、自分たちで考え行動している姿を垣間見ることができた。そのため、ほぼ予定時間通り学習を終えることができた。どの発表も、今まで自分たちが知らなかったことばかりだったので、お互いに質問し合う学び合いの姿が見られた。委員会やクラブに関しては、半年後に経験することになるので関心が強く、発表用の掲示物が有意義に活用されていた。この学習を通して、本当に楽しい学校生活を伝え合うことができたと思う。

② 「ちいちゃんのかげおくり」(光村図書)

単元の目標は、「場面のうつりかわりをとらえて、感想をまとめよう」である。感想を書くためには、場面の様子をしっかりとらえなければならない。また、戦争という子どもたちにとっては、非日常の世界にどれだけ踏み込んでいけるのかが難しい。

そこで、題名だけで想像できるお話を考えさせた。すでにお話を知っている子が、4分の1。そ

れ以外の子は、「ちいちゃん」という幼い主人公の冒険話や、影に関係のある贈り物の話、森や動物が出てくるファンタジックな話などを想像していた。しかし、実際は違う。そのギャップを感想に生かしたいと考えた。

家族4人で行う「かげおくり」とたった一人で始める「かげおくり」の違いから入り、その間に起こった出来事を確かめていった。役割を変えながらの音読を繰り返す中で、場面の設定や登場人物の気持ちを考えたり話し合ったりしていった。空襲で逃げまどい、一人ぼっちになる場面では、家族に聞いてきた戦争の話を取り入れて、少しでも身近に感じられるようにした。ひいおじいちゃんが、シベリア抑留されたことや大阪から疎開してきた話、食べる物に困った話、防空壕に逃げ込んだ話等、初めて耳にする「戦争」が「ちいちゃん」の生きていた時代の背景にあることを子どもなりにとらえていたと思う。

また、「ほいしい」を実際に作り、食べてみて「食べる」と「かじる」との違いを感じさせた。油で炒めて塩で味付けすると食べられるが、幼い「ちいちゃん」では調理もできないし、のども渇くということが実感できた。

最後の場面では、「なぜ、前の段落でお話が終わっていないのか」について、話し合った。ここでは、「作者は、戦争を知っているから、今は違うということを言いたい」「戦争は、恐ろしいから、2度としないでもらいたいという願いが込められている」「今は、平和なんだということを言いたい」「この場面がなかったら、かわいそうだけで終わってしまう」等、作者の心情にまで迫った考えがいろいろ出たことに驚いた。

感想を書く活動では、「はじめ」の所に題名から想像したことを取り入れ、「中」に一番心に残った場面や文についての自分の考え、「終わり」には、学習を終えての感想を入れることにより、構成をしやすくした。その結果、どの子も構成通り、感想文を書きあげることができた。取り上げた場面や言葉は様々だが、そこから自分の思いをしっかりと文章にすることができていた。その後、感想を読み合い、共感したり、新たな考えに気付いたりすることができた。また、戦争については、社会科の「昔のくらし」にも関連があるので、そこで再び戦争についての話題や自分の思いが出ることが予想される。

さらに、この学習を、道徳の「命の大切さ」の学習にもつなげていきたいと考えている。

6 終わりに

「小学校では、学びの基礎を身に付けるべきだと考えて、子どもたちが無理なく、自分から学びたいと思う指導方法をいつも心がけてきた。指導すべきことは学年に応じて系統的にまとめられているので、誰でも工夫を凝らして指導法を考えることができる。しかし、どの学年においても、指導者が誰であっても、子どもたち自身が学びに対する確かな姿勢をもち続けてほしいと願い、接してきた。

授業が終われば、次の授業の準備をしてから休み時間にするのは、1年生の頃から定着している。授業開始時刻になれば、当番が号令をかけて自習活動に入る。学びが自分自身のものだと分かっているからだ。そして、新しい学習を終えるたびに、できるようになった充実感と次の授業に対する期待が感想の中にあふれている。

ストーリー性のある学習を行うことは、子どもたちに意欲をもたせ、もっと学びたい、もっと成長したいという気持ちを育てるのに適していると思われる。接している私自身も、楽しく毎日を過ごせている。

今後も、子どもたちの目線に立った指導を工夫していきたい。

「受けるより、与える方が幸い」を实践できる子どもの育成

～達成感や自己有用感を育むスモールステップとピアサポート活動～

兵庫県明石市立明石小学校

校長 濱田誠二郎

1 はじめに

激動する社会において教育の世界でも様々な価値観を持った保護者と円滑に連携していく必要に迫られている。特別支援教育においてもインクルーシブシステムの導入に向けて、徐々にではあるが実践研究の段階に入りつつある。しかし、ここで立ち止まって考えたことの一つに『不易流行』がある。どんなに時代が変わり、人々の価値観が変わろうとも変わらないものいや変えてはならないものが教育技術の中にもあると考える。

本稿は、教育の先人が大切にしてきた、チーム体制で丸となって課題解決に取り組んだ一実践である。

具体的には、小学校の情緒・自閉症学級に在籍する4年生たくちゃん（仮名）への管理職（臨床心理士）、担任、音楽専科、6年生の子どもたちによるチーム支援の一端を紹介するものである。

2 <本児、たくちゃんの紹介>

本児は小学校4年生男子（仮名：たくちゃん）、乳児健診時に自閉症と診断され、小学校入学から本学級に在籍している。とてもひとなつこい。発語はほとんどない状態であるが、1、2年生の教科内容は理解していた。教師の質問には指で答えを指していた。文字はなぞり書き程度で、自分の思いを文章化することは難しい。

儀式行動として、始業のチャイムと同時に筆者（当時は教頭）の腕時計のガラス部分を2～3回人差し指でなでた後、職員室のたなを見て、移動していたテップカッターや物品をもと通りにしてから教室に戻る。筆者「たくちゃん、おはよう」たくちゃん「あー」筆者「ありがとう」こんな毎日が続いていた。

家族は、父、母、妹（3歳）、二か月後に誕生予定の赤ちゃん。父は関東へ単身赴任中で一か月に1～2回程度家族と過ごす。子煩悩ではあるが、仕事が忙しく家族とともに過ごす時間は現状で筒いっばいとのこと。

母親は控えめではあるが、たくちゃんをいつもやさしい眼差しでみてくれ、学校にも協力的である。

3 支援の概要

(1) 現況

たくちゃんにとってこれから先、どんな力が生きる力となるのだろうか。今、学校教育で何ができるのだろうか。学校で学んだ成果を目に見える形で残してあげたい。また、母親一人で孤軍奮闘している子育てで、筒いっばいがんばっている状況は、もうすぐ出産を控え、限界が見えている。焦る気持ちと現実の狭間で悩む日々が続いた。ちょうど、懇談会があったので、担任から母親に、これから先の不安や支援が得られそうな親族や友人の有無について聞いてもらった。母親の実母は電車で2時間ほど離れたところに住んでいる。仕事を持っていることもあり頻繁に来てもらうことは難しいし、実母が長時間滞在すると、お互いに感情的になってしまうことなどが話された。母親の実母も孫たちがかわいい気持ちはあるが、母親と口論になってしまうことが多いので、滅多にこないとのことだった。

(2) 支援の着地点とターゲットスキル

一般的に個別計画には対象となる子どもにのみ焦点を当てた計画が多い。しかし、子どもに関わる時間が一番多いのは家族である。本実践においてもたくちゃんのリソースとなる家族を、自然な形でどのように巻き込んでいくか話し合いを持った。

そこでまず、母親が心のエネルギーを充電しつつ本児に関わる方策を着地点とした。

次に、遠方に住む祖母が本児を愛おしくてたまらない、会いたい感情を持ってもらえるような行動を本児に獲得させることに設定した。具体的には、後述するがなかよし学級のミニコンサートを参観に来ていただく際、母親が電話で祖母とアポをとる。その横で本児は待つ。祖母が「うん、いくよ」と言った瞬間に本児と電話を代わり、「あーとー」と発語するのである。祖母はまさか、自閉症の愛する孫からお礼の言葉が聞けるなんて夢にも思わない。この孫のためなら何かしてあげたい。そう思ってほしいというのが実践の願いでもある。出産を控えた母親にとっても、息子の成長

は大きな励みとなるだろうし、単身赴任の父親も今よりさらに、電話をしてきたくなるかもしれない。この家族の関係性の循環を円滑にするのも大きな目的なのである。

4 スモールステップ

(1) スモールステップ概観

めざすゴールは、はるかかなたに思えるだろうし、支援者にとっても具体策がイメージしにくい。そこで、遠い到達点ではなく、3本先の電柱を小さなゴールとしてイメージし、スモールステップの考え方を生かすことにした。その都度リソースチーム(本児にとって、より教育効果が高いメンバー)で作戦会議を行うことで、無理のない行動目標で、かつ支援者にとっては、達成感を味わえるよう配慮した。つまり、大きな目標ではなく、ちょっと努力すればできる行動目標を設定し、うまくいかないときは、目標レベルを下げ、うまく定着すれば次の小さなゴールを設定しようとした。

(2) リソースチームを編成

昨今、特に小学校では、担任が課題を抱え込んでしまい、有効な解決策を見いだせないまま、保護者や児童との関係性が悪化していく傾向が多い。今回、管理職(臨床心理士)、担任、介助員、音楽専科、さらに、6年生の音楽委員会の有志が、それぞれ役割分担しながら、情報交換してチームで課題解決する楽しさも味わうことができるように編成した。その役割の主なものとして、

担任：保護者との連絡、相談、全職員への啓発

介助員：観察記録

音楽専科：本児がリズム運動を好むタイプだったので、ワークの前の体ほぐし、ワークの後の楽器演奏、選曲、楽器指導

6年生の音楽委員会の有志：ピアサポートの手法を一部取り入れることで、6年生には自分も役に立てている、活躍する場所があるという自己有用感を高めることができ、本児にとって同級生の交流学級児童だけではなく、広く他学年のお兄さん、お姉さんにやさしくしてもらえることで、心地よい時間を過ごすことができるだろうと考えた。6年生児童9人の役割としては、本児を含んで仲良し学級(特別支援学級)6人が、ミニコンサートをするお手伝いをしてもらった。

管理職(臨床心理士)：着地点までのスモールステップのデザインや作戦会議での各構成員へのコンプリメント(賞賛)、保護者とのカウンセリング等

(3) Small step の実際

ロジャーズの来談者中心療法や、精神分析とはちがいが、行動療法の領域に入る心理療法の一つである。

心に潜む課題を探し当て、どう対処していくかではなく、クライアントに定着している学習方法を小さなゴールを一つひとつ解決していくことで、最終の望ましいあるいは、クライアントにとって幸せへと結びつく行動を会得させようとするものである。

本児の場合、9歳ではあるが、発語に関しては3歳から目に見えた成長はみられない。「あー」という一語が精いっぱい、周りの大人がノンバーバルを読み取り、感情を理解しようとしてきた。これからの本児のためには、バーバルコミュニケーションスキルを身につける必要を感じていた。それは、特別支援学級に在籍する児童の場合、低学年の時は、他の学級・学年の仲間から「〇〇ちゃん」と愛称で呼ばれるが、高学年になって体も大きくなるにも関わらず、行動面では幼く見える。このギャップは低学年からみると、「こわい」とか「変わった人」というまじがったレッテル貼りになってしまうこともある。

本児に二語を獲得させ、そこを手掛かりに三語、四語と広げていこうとすることが本実践のねらいである。

さらに、周りの支援者にとってもしっかりとゴールを共有して、小さなゴールをクリアしていく意識づけが必要だと考えた。そこで、ピアサポート活動の手法を取り入れて、6年生の音楽委員会有志が特別支援学級児童6名に楽器の演奏を支援、指導することで、6年生には、自己有用感を育み、特別支援学級児童には頼りになるお兄ちゃん、お姉ちゃんが学校にいるという安心感を持てるようになることを願った。

Small step 1

本児の好きな飴(イチゴミルク)一つを両手のどちらかの拳に入れて、「たくちゃん、どっち？」本児は指さしながら、「あー(こっち)」と言う。⇒コンプリメント(賞賛)

これを7-8回繰り返し、ご褒美(トークンエコノミー)として飴を一つあげる。そのとき、ありがとにかわる言葉と行動⇒「あー」といって頭をさげる練習をする。このお礼の行動は家庭でも何度も学習していたようで、比較的短時間でできるようになった。

Small step 2

10センチ四方の箱の中の一方向に飴を入れる。入れる数は、毎回変えるが片手で表現できる数に限定する。

「たくちゃん、どっちの箱に入ってる?」「あー」(こっち)筆者「当たりました!ではいくつ入ってるか当てましょう」と言って箱をふる。片手で2、3、と表現させ、当たると拍手。7-8回のセッション後ご褒美。

筆者との関係性でできるようになると、担任と代わり、担任ができるようになると介助員と代わる。このように指導者が代わってもできるように、何度も「できた⇒ほめられた」経験を積ませる。

学習の後は、音楽専科の時間が空いているときに、緊張ほぐしと楽器の練習をする。やがて、二時間目の後の長い休み時間には、6年生の音楽委員会の有志が嬉々としてやってくる。ボンゴ、鍵盤ハーモニカ、か小太鼓など特別支援学級6人が得意とする楽器を6年生が支援する。何とも微笑ましい時間なのである。どちらの子どもにとっても温かい心の交流のひとつときとなっている様子を見ることが、わたしたち教師にとって最高の喜びの時間となった。

Small step 3

さあ、いよいよ「あーとー」にチャレンジする日がやってた。本児のメンタル、体調の良い日を選び、実施。いつもの箱の片方に10個の飴を入れる。

「たくちゃん、どっち」「あー」ここまではいつも通り。「あたりー!いくつ入っている?」いままでは片手で表現することで可能だったが両手での表現は学習していない。戸惑っている本児の目の前に飴を置き、筆者が一つずつ声を出して数える。「ひとつ、ふたつ、みつつ……とー」最後の「とー」だけ一緒に声を出すトレーニングに没頭した。口をとがらせた口形を獲得するにはかなり時間を要した。しかし、やり遂げると飴が待っていると思ったのか、モチベーションは比較的高いように感じた。数週間後、「とー」をマスターした

この発語に意味を持たせることができ初めて成功と言えるので、大好きな飴をもらったあと、「あーとー」逆に本児に教師が落とした文具などを拾ってもらったときには、教師が「あーとー」。6年生との音楽交流で、6年生の指示が通れば6年生から「あーとー」うまくいけば、本児から6年生に「あーとー」。笑顔の交流の渦は瞬く間に広がっていった。

Small step 4

いよいよ電話トレーニング。おもちゃの電話で教師の横にたくちゃんがすわり、教師と介助員が電話やりとりをした。最後にたくちゃんが「あーとー」を入れる。もっと時間がかかると想像していたが、存外、「あーとー」が心地よい言葉として認知されていたようで、

スムーズに言うことができた。6年生の優しい言葉かけの影響は大きいと言える。

Small step 5

母親と担任がおもちゃの電話でやりとりし、本児が最後に「あーとー」を入れる練習。母親にはミニコンサートおさそいのシナリオを渡しておき、本児が同じ場面で同じ言葉を言えるよう配慮した。

Small step 6

このトレーニングと並行してミニコンサートの練習にも力を入れた。幸い6年生有志が毎日来室してくれたので、仲良し学級の子どもたちも大喜びだった。子ども同士の結びつきが今更ながら大切だと実感させられた。6年生にとってなついてくれている下級生は、とても大切な存在になっていたし、自分たちが役に立っているという確かな実感が演奏という目に見える形で味わえるのである。

仲良し学級の子どもたちにとっても、いつもそばにいる教師や介助員よりも休み時間とともに、満面の笑顔で来てくれる6年生のお兄ちゃん、お姉ちゃんは大歓迎なのである。目には見えないけれど、だれもが確かな絆を感じる事ができた。このやり取りの中で、たくちゃんは、お気に入りのお兄ちゃんに「あーとー」が言えるようになっていた。この言葉は、確かに意味のある心から出たメッセージだということが何よりも大切なことである。



6年生児童との作戦会議

Small step 7

ミニコンサートの日時も決まり、いよいよおばあちゃんに連絡する日が来た。ご自宅から祖母宅へ電話する方法もあったが、サプライズの成功率を上げる目的で、慣れた教室から電話することにした。母親も緊張していたが、シナリオを読み返しては、うなずきながら本児をなでていた。

本番!母「お母さん、〇月〇日〇時にたくちゃんが

ミニコンサートでボンゴをするんだけど、観に来れる？」祖母「へえーたくちゃん、がんばってるやん。うん、いくよ。」ここからです！母親の手は震えていました。たくちゃんがあの言葉が言えるかどうか・・・

「あっ、おかあさん、ちょっと待ってね。たくちゃんが電話代わりたいてって・・・」「・・・あーとー・・・」

何ともいえない心地よい沈黙の時間が教室中に充満しました。電話の向こうでおばあちゃんのおどろき、よろこび、胸が熱くなって涙がこぼれている様子をだれも疑う者などいません。」母親が「おかあさん、たくがね。お話できるようになってきたのよ。」おばあちゃんは声が出ず、ただ泣いておられたようです。

5 ピアサポート活動

実践校には数年前から、高学年有志が特別支援学級と器楽演奏を通して関わる素地ができていた。高学年児童と特別支援学級児童の合同演奏会を年2回、七夕コンサートとクリスマスコンサートと題して、業間の休み時間を利用し、練習や発表の時間に当てていた。

異年齢集団活動とピアサポートの大きな違いは、トレーニングから個々人のプランニングつまり、自分がちょっと努力したら達成できることを大切にしながら進める点です。トレーナーである筆者が特に配慮したことは、サポーターに直接関わる、音楽専科、特別支援学級担任に、トレーニングで用いるエクササイズの意味や個々人のプランニングへのほめ方等、心理教育の支援をすることでした。



ピアサポートのトレーニング 新聞タワー

【感想】笑顔って大事。ジェスチャーや表情でも気持ちは伝わるんだね。

ミニコンサートでは、大好きなお兄ちゃんが、本児の肩をかるくたたきながらリズムをとっていました。



リハーサル

6年生「そうそう！上手！その調子！」「トントン」と肩に触れて合図すると、うまくいったよ。

6 おわりに

おばあちゃんは、持ってきたカメラで撮影することも忘れ、たくちゃんをじっと見守っていました。

それからというもの、2時間も電車に乗ってたくちゃん一家を支え続けてくれました。また、お父さんも電話の回数が格段に増え、たくちゃん「あーとー」は父親にとっても言葉に表せないご褒美となったのです。

何よりも、本児たくちゃんがこの二語の発語から、他の二語を獲得して、5年生に進級する頃には、単語をはっきりとした口形で発語できるようになったことである。自閉症というハンディがあるから～できないのではない。小さなゴールに向けて職員が良きチームとなって取り組むことで、多方面の知恵、ネットワークを生かしながら子どもを支援することができるという良い例を見ることができた。この喜びこそが教師にとって最高の報酬といえるのではないだろうか。

第21回 日教弘教育賞

教育研究集録 第27集

平成28年3月24日発行

編集・発行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会

URL : <http://www.nikkyoko.or.jp>

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-6

TEL 03-3354-4001

FAX 03-3354-4068

印刷 株式会社 篠原印刷所

〒422-8033 静岡市駿河区登呂6丁目7番5号

TEL 054-286-5141
